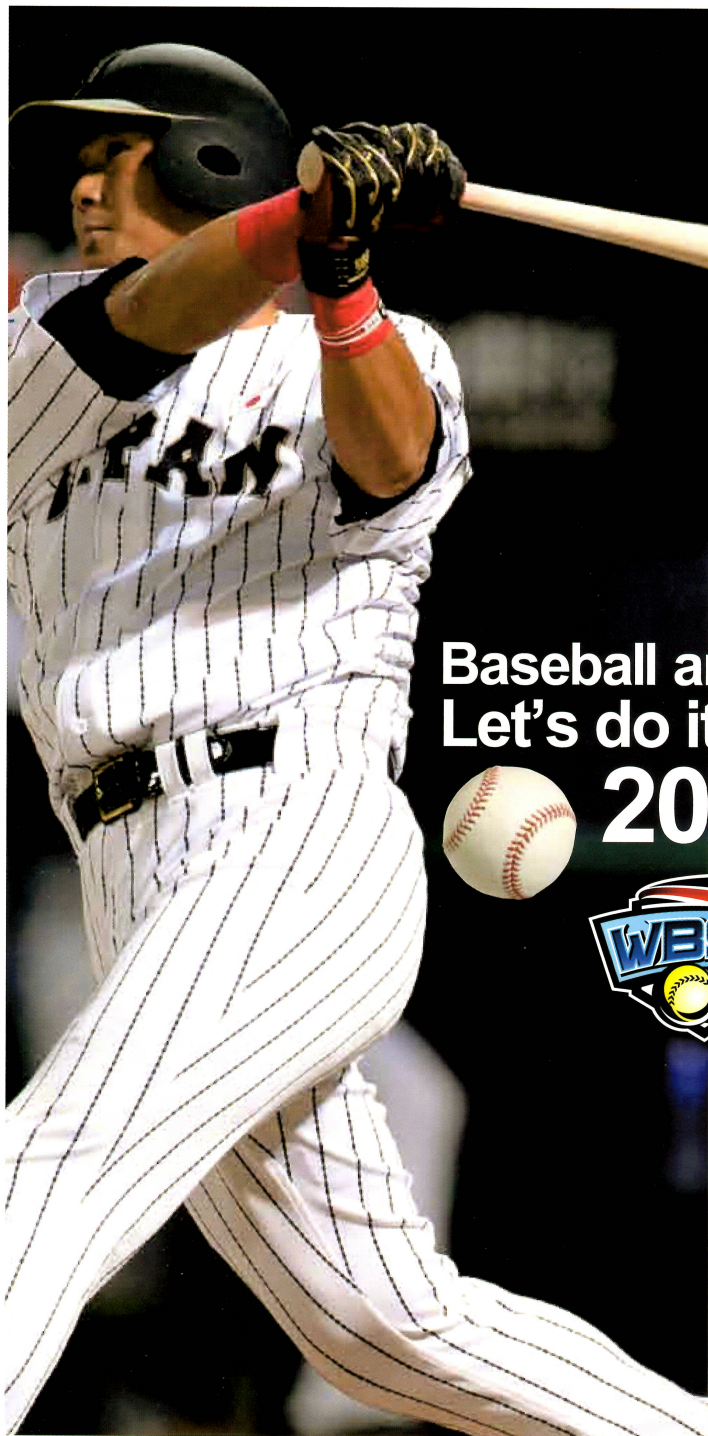


未来に向か

つて

大学ソフトボール50年の歩み



Baseball and Softball
Let's do it together



2020



野球・ソフトボール 2020年復帰を!



WBSC加盟国

世界野球ソフトボール連盟
WORLD BASEBALL SOFTBALL CONFEDERATION



全日本大学ソフトボール連盟

ごあいさつ

創立50周年を迎えて



全日本大学ソフトボール連盟会長 一谷 宣宏

全日本大学ソフトボール連盟が創立50周年を迎え、ここに記念事業の一環として、学連機関誌 **ウインドミル** の50周年記念号『未来に向かって 大学ソフトボール50年の歩み』を発刊することになりました。

1964年(昭和39年)、戦後20年を迎える中、東京オリンピックが日本で初めて開催され、日本のスポーツ界が大きく動き始めました。そのような社会情勢の中、初代会長に栗本義彦日本体育大学学長をお迎えし、下奥信也氏を理事長に擁し1966年1月、日本ソフトボール協会の承認の元、ここに全日本大学ソフトボール連盟が創設されました。ソフトボールを愛する先輩諸氏の思いとソフトボールを日本国中に大きく普及せんとする情熱の賜であり、心から敬意を表するものであります。

以来、50年、本連盟は歴代会長・役員並びに加盟大学関係役員の方々の献身的なご努力によって、日本のソフトボールの発展とともに躍進を続けて参りました。

そして、現在、加盟大学233校、選手登録数5,042名を擁し、世界のソフトボール振興の一翼を担う責任ある団体として、発展し続けています。この間、平成7年、平成23年に発生した未曾有の大震災の影響を受ける中、東西大学選手権大会や全日本大学選手権大会などを通じて、ソフトボールの健全な普及を図るとともに、大学連盟独自の国際交流活動を創設し、競技力向上事業として優秀選手を強化し、オリンピック大会等で活躍する選手の育成に取り組んでいるところであります。

全日本大学ソフトボール連盟は、急速に進む少子高齢化社会等の社会変化の中、大学ソフトボールの使命を改めて認識し、グローバル化の中の日本のソフトボールの立ち位置を考え、多くの人々から信頼され、親しまれる大学ソフトボール連盟になるよう、これからも、努力して参りたいと存じます。

最後になりましたが、50年の歩みを顧みて、本連盟発展のために、ご指導、ご支援をいただきました、諸先輩、文部科学省、公益財団法人日本ソフトボール協会をはじめ関係各位の皆様にご心から感謝もうしあげるとともに、今後ともなお一層のご理解、ご支援をお願い申し上げて発刊の言葉と致します。

ごあいさつ

全日本学連のさらなる発展を願って

全日本大学ソフトボール連盟学生委員長 木村 晃拓



この度は、全日本大学ソフトボール連盟が創立50周年を迎えましたこと、心からお喜び申し上げます。私は、この記念すべき年にたまたま東海地区でのインカレ開催ということで学連委員長をさせていただきましたととてもに光栄でした。

私事ではございますが、南山大学に入学し、ソフトボール部に入部して初めてソフトボールという競技に関わりました。小学生から高校生まで続けてきた野球とはまったく違った面白みがあり、すぐに夢中になりました。入部してからこれまで、多くの大会に参加し、勝利する喜びや、涙が出るほど悔しい思い、仲間と分かち合うソフトボールの楽しさを感じました。私にとって、部活動は大学生活において、一番の大切な思い出です。

また、その部活動の中での一つの大きな経験として、学生委員長をやらせて頂いて、一年と半年が経ちました。選手としてだけではなく委員長としてソフトボールに関わることで、私達が見えないところで、多くの方々のご協力があって、大会が、私たち学生にとって、素晴らしいものになっていることに気づかされました。

特に、伊勢市での第50回全日本大学ソフトボール選手権大会の学生委員長として、何ができるのか何をすべきなのか悩んだこともありますが、とても貴重な経験をさせていただきました。その経験の中で、私が強く心に感じたことは、地元の方々、学連の先生方、学生委員の皆さん、そして大会に関わる多くの方々のご協力により全日本大学ソフトボール選手権大会が素晴らしい大会であり続けていることです。

私は、先輩方が守り発展させてきた、この素晴らしい伝統に関わることができましたことをとても嬉しく思っています。そして、学生委員長として十分な活動できなかったという反省もあり、今後とも全日本大学ソフトボール連盟がさらに飛躍していくことを願って何らかの形で大学ソフトボールに関わりを持ち続けたいと思っています。さらなるご指導・ご鞭撻をお願いして記念誌発行のご挨拶とさせていただきます。

祝 辞

公益財団法人 日本ソフトボール協会
会長 徳 田 寛



全日本大学ソフトボール連盟が、このたび創立50周年を迎えられる
とのこと、誠におめでたくお祝い申し上げます。また、これを期と
して輝かしい実績を後世に伝える記念誌を関係各位のご努力により
発刊されることは誠に意義深く、心から敬意を表しお慶び申し上げ
ます。

全日本大学ソフトボール連盟が発足以来、今日までソフトボール競
技の発展に多大な貢献をされ、数々の実績を挙げられましたことは
誠に喜ばしい限りであります。

大学時代にソフトボール競技を通じて培われた体力と精神は社会に
飛び立つ際の大きな力となることかと思えます。その環境を作り上
げ提供し続ける貴連盟の存在はとても大きなものかと思えます。

さて、日本のソフトボール競技は日本代表チームの活躍でも分かる
ように男子・女子ともに国際的な競技力を有しながら、尚且つ、子
供からご高齢の方まで楽しんでいただけるスポーツとして、広く国
民に愛され続けております。このような今日の隆盛をみることが出
来ましたのは多くの苦難を乗り越え、その普及と振興にご尽力され
た貴連盟をはじめとする連盟の諸先輩方と現在ご活躍いただいてい
る皆様方のご尽力の賜物といえましょう。

2008年には北京オリンピックで女子日本代表チームが悲願の金メダ
ルを獲得し、多くの国民の方々に感動を与えることができましたこ
とはソフトボール関係者の最大の喜びとなりました。

少子化による競技人口の減少など、取り組んでいかなければならな
い課題も抱えておりますが、本会といたしましては多くの方々にこ
のソフトボールという競技が持つ「真の魅力と楽しさ」を発信し、
新たな競技人口の獲得やさらなる普及・発展に努めてまいりたいと
思っておりますので、引き続き貴連盟のご支援、ご協力をお願いし
たいと思います。

最後に、全日本大学ソフトボール連盟の50年の歩みに改めて心から
の敬意を表し、これを契機に更なるご発展をご祈念申し上げお祝いの
言葉といたします。

ごあいさつ	創立50周年を迎えて 全日本大学ソフトボール連盟会長 一谷宣宏	1
	全日本学連のさらなる発展を願って 全日本大学ソフトボール連盟学生委員長 木村晃拓	2
祝 辞	(公財)日本ソフトボール協会会長 徳田 寛	3

第1章 大学ソフトボールの原点 ～座談会：大学連盟の原点に遡って～

1	全日本大学ソフトボール連盟の設立と手造りの第1回大学選手権大会	6
2	全日本大学ソフトボール連盟の全国への広がり	8
3	未来に向かうこれからの大学連盟	10

第2章 大学ソフトボールの歩み

1	画期とその特徴	
①	第1期（1979年まで）：大学ソフトボール競技の生成・普及期	12
	大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ① 三宅 豊	13
②	第2期（1980年代）：大学スポーツ競技としての成長期	14
	大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ② 清水 正	16
	池田紀子	17
③	第3期（1990年代）：オリンピック競技種目の採用と大学ソフトボール競技の発展期	18
	大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ③ 儀保信虎	20
	大木彰人	21
④	第4期（2000年代～）：大学ソフトボールのさらなる国内的・国際的展開期	22
	大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ④ 杉田 剛	24
	渡邊華月	25
2	全日本大学東西対抗戦、全日本女子短期大学大会	
①	全日本大学東西対抗戦の記録	26
②	全日本女子短期大学ソフトボール大会の記録	27
3	国際大会への参加	
	大学男子の国際交流のあゆみと今後の課題 吉末和也	28
	全日本大学ソフトボール連盟の女子選抜チームの国際大会への参加 久保田豊司	31
	国際大会参加経験のあるOB・OGの全日本学連への期待 伊藤幸子	36
	増淵まり子	37
	中島幸紀	38
	松田 光	39
	高橋速水	39
4	ソフトボール競技の変遷 ～ルール改正からみた競技の改良と変遷～	
①	主なルール改正	41
②	ルール改正によるソフトボール競技の改良点	41
③	大学ソフトボール競技への影響	42
5	各地区の50年の歩みと地区における後援大会	
	大学連盟創立50周年に添えて 一北海道・東北地区の現状と課題 一 大塚健樹	42

関東学生関係大会のここ10年を振り返る	清水 正	43
「峠のまち」Matsuida Cup男女大学ソフトボール強化大会の歩み	高橋伸次	46
北信越地区これまでの歩みと今後の課題	岩間英明	47
北信越地区の後援大会の歩みと今後の課題	岩間英明	49
東京地区50年の歩み ～東京地区の現況～	筒井崇護	50
東海地区の価値を創造する新たな取り組み	二瓶雄樹	51
大学ソフトボール東海オープンの歩みと課題	水谷 博	52
近畿地区（男子）50年の歩み	森田啓之	53
近畿地区（女子）50年の歩み	久保田豊司	55
全国国公立大学オープン大会の歩みと現況	森田啓之	56
中国地区大学ソフトボールの50年史	逢坂秀樹	58
四国地区の歩みと今後の課題	宮尾直海	59
九州地区大学ソフトボール連盟の今 ～先輩から後輩へ～	濱 貴一	60
「ちゅーぱーリーグ」— 春季ソフトボール強化リーグ in 読谷 —	新垣 實	61
6 ソフトボールの各界から見た大学ソフトボール		
創立50周年記念誌に寄せて（公財）日本ソフトボール協会	藤井まり子	62
記録が語る大学ソフトボール（公財）日本ソフトボール協会記録委員会記録副委員長	下村征二	63
文部科学大臣杯全日本大学選手権大会を開催して 富山県ソフトボール協会理事長	竹島正隆	63
大学ソフトボールに関わっての思い出と将来への期待 ミズノ株式会社	近藤晴彦	64
専門誌も魅了されて半世紀 ソフトボール・マガジン編集部編集長	山内浩太	65
ソフトボールとの関わり方について 元学生委員長	石井新菜	66
大学ソフトボールに関わっての思い出と将来への期待 京王観光株式会社神奈川北支店	田高直人	67

第3章 未来に向かって ～座談会：大学連盟はこれからどこへいく？～

1 全日本大学選手権大会（全日本インカレ）のありかたと今後	68
2 大学ソフトボール、並びに大学連盟の責務・課題と展望	71

第4章 記録・資料集 ～全日本大学ソフトボール連盟50年の歩み～

全日本大学ソフトボール連盟年表	77
主要なソフトボール国際大会	83
国際大会への大学生、大学生選抜の参加	84
大学ソフトボール界における研究成果と調査報告	
～全日本大学ソフトボール連盟機関誌「ウインドミル」を中心に～	86
(1)日本のソフトボール創生期に関する研究	
(2)全日本大学ソフトボール連盟機関誌「ウインドミル」の研究調査報告一覧	
インカレ大会成績一覧表（男子の部）	91
インカレ大会成績一覧表（女子の部）	93
インカレ（男子）大会入賞校・入賞回数	95
インカレ（女子）大会入賞校・入賞回数	95
全日本大学ソフトボール連盟規約	96

第1章 大学ソフトボールの原点

～座談会：大学連盟の原点に遡って～

〔出席者〕 大内 敬哉 （顧問，元．会長／元．中京大学）
齋藤 滋雄 （顧問，元．副会長／元．学習院大学）
吉野みね子 （顧問，元．副会長／元．東京女子体育大学）
末井 健作 （顧問，元．理事長／元．兵庫県立大学）
一谷 宣宏 （会長／園田学園女子大学）
〔司 会〕 森田 啓之 （事務局長／兵庫教育大学）

注）（ ）内は、学連職と所属大学

森田（司会）●我々の組織である「全日本大学ソフトボール連盟」は今年50周年という大きな節目を迎えることができました。そこで、大学連盟の諸活動に長らく携わって来られた4名の顧問の先生を迎え、会長とともに、学連の設立、あるいはこれまでの思いや苦労を振り返りながら、学連のこれからを考える機会にしたいと思います。

1 全日本大学ソフトボール連盟の設立と 手造りの第1回大学選手権大会

森田●本誌の別頁にも「1965年に当時の日本体育大学でソフトボール部の監督・部長であった下奥信也氏が、日本ソフトボール協会に『大学連盟』の必要性を再三にわたり力説した」とありますが、どなたか当時のことを教えていただけませんか。

齋藤●その何年か前に、オール東京とオールハワイの試合をする機会があって、下奥さんと一緒に私もコーチとして参加しました。ちなみに、その時に初めて私はウインドミル投法を見ましたが、何と速いボールを投げるんだと大変驚いたのを覚えています。それで、その時に彼から「大学も連盟を作って活動をしていこう」という話を聞きま



した。ただ、「連盟と言ってもまだまだチームはないじゃないですか」と私が言うと、俺は全国に呼びかけ・誘いのためのアンケートをやろうとしているというようなやり取りがありましたね。

森田●なるほど。顧問である角田先生が「25周年記念記録要覧」の挨拶でこう書かれています。

「昭和40年後半、日体大部長兼監督の下奥氏より、大学選手権を何としても開催しようとの話があった。当時東京ですら3大学しかチームはなかった時である。そこで、全国にどのくらいチームがあるのかを調べるのが先決と、学生数が2,000名以上在籍する大学に、チームの有無と、もし大学選手権を開催した場合、参加するかどうかのアンケートを発送した」と。まさに下奥先生がゼロからのスターターで動かれたわけですね。

齋藤●下奥さんと当時、全国に情報は流したんだけどアンケートの返事が2校しかないから、もしかしたら東京だけになってしまうかも・・・みたいな会話をした記憶がありますね。それと会長や副会長を誰にお願いするかも含めて、役員体制をどうするかについては様々な紆余曲折と苦労がありました。

森田●そのような苦難の創設期に、第1回の全日本大学選手権大会が開催されますよね。

末井先生が持ってきて下さった第1回のプログラムによれば、チームの引率責任者に、吉野先生と齋藤先生のお名前があります。

吉野●そうです。私は学部を卒業して1年目でした。

チームは第3位という成績でした。ただ、女子はまだ5チーム（日本体育大学・日本女子体育大学、東京女子体育大学・武庫川女子大学・富山大学）しかありませんで、今からすれば、第3位なんて言ったら何十チームいるのかと思われそうですけれどもね（笑）。このような小さな大会からのスタートでしたが、それを企画していった下奥先生の功績は非常に大きいと思います。



森田●今でこそ一般的に、ソフトボール競技は女子のイメージが強いですが、大学ソフトボールは男子中心にスタートしたというのは興味深い事実ですね。ソフトボールに限らずですが、大学スポーツは当時はまだ女子の進学率もそう高くなかったという事情があるのかもしれませんが。

齋藤●本当に懐かしいです。場所は、駒沢オリンピック公園の野球場。私はユニフォームのまま進行をしたような記憶があって、それが私の一番の思い出です。この第1回目は男子10チーム、女子5チームの参加で無事に終了しましたが、大会は当面の間は可能な限り東京で面倒をみようということだったと思います。

森田●このプログラムを見ましたら、他に現在もご活躍の諸先輩方のお名前をいくつも見つけることができます。まず、日体大のメンバー表には利根川先生、日本協会副会長の尾崎さん、そして主将は宮崎県協会の理事長をされている押川さんのお名前がありました。早稲田大学、国士舘大学では、現在も監督をされている吉村先生と森池先生が主将として出場されていますね。

末井●当時私は野球部だったのですが、この

時に初めてソフトボールに関係しました。プログラムには記録員として名前があります。下奥先生の依頼で、野球部員がソフトボールのルールも十分に分からないまま記録（スコア）や運営に携わりましたね。

森田●初めてのソフトボール競技の印象はいかがでしたか。

末井●凄い！というのが率直な感想でした。特に、ボールの速さには驚きました。野球とは全く違う。ちなみに、私は男子担当だったんですが、審判のジャッジでどこかの大学同士が激しくもめたことも印象に残っていますね。（笑）



大内●東京と関東が中心とは言え、第1回で男女15校集まったというのは大したものですよ。

森田●日体・国士舘・早稲田・学習院に加えて、高橋理事長のところの高崎経済大学も1回目からの出場ですね。近畿は関西大学が1校参加していますが、中京大学は東海地区として2年目からですね。どのような経緯や呼びかけがあったのですか。



大内●これはね、私が出奥先生からの連絡を受けてですね。こういう大会が開催されると・・・是非参加してほしいと。そのようなことで、私は早急に野球経験者で部を作りました。第2回大会に出ましたが、東京の大学を見ると、ソフトボールを「専門にやっている」のが驚きでした。私はソフトボールを全く知らなかったもので、みんな野球選手の集まりだろうくらいのイメージでした。それならば私のところもたくさん良い選手がいるから、そうは負けないだろうと思って参加しました。結果は、とんでもなかったです。話になりませんでした。だから、野球のやり方はソフトボールでは絶対に通用しないということを私は悟りまして、一生懸命学生と一

緒に練習しました。決勝に出るまで4年かかりましたね（汗）。

森田●この他に、「創立25周年記念記録要覧」によると、下奥先生ご自身が、「当時は日ソ協をはじめ経費の援助はなく、駒沢を中心とした各商店より広告を取り経費に充当した。広告の中には葬儀店もある有様で、大変であった」と述べられていますが、当時は財政的にも大会や連盟の運営は大変だったでしょうね。

末井●私はチームとしての参加は9回目からで、そこで翌年の姫路での開催を引き受けました。なぜこの話をしたかと言うと、私、当時の会計簿をもう一回見直したんです。そうしたら、60万円の経費で大会運営をしていたのですが、当時の参加チーム料5,000円以外に、東京のチームから1万円ずつの7万円をいただいていることが分かりました。参加費以外に、特別に補助金としてです。

齋藤●それは初めて聞きますね。

末井●連盟や大会の形が出来上がるまでは、このような東京の方々の熱い思いがあったのだと感じます。それがあって今日があるという意味でも紹介させてもらいました。

森田●これも本誌の別頁で整理していますが、チーム登録費は最初のころは2,000円で、選手登録費が200円だったようです。おまけに、連盟の役員は10年間は無報酬でいろいろ動いたと。創立から10年たって値上げがなされるままで、基本的にボランティアとしての大会運営や会議開催だったわけですね。このような経緯と創設に関わった思いがあった当初の10年間で忘れてはならないと改めて感じました。

森田●あと個人的な興味なのですが、この第1回の大会のレベルはどうだったのですか。

吉野●下奥先生ご自身がウインドミルで投げられて、さらに指導に関しても非常にすばらしいものがあるという話を私は何年か後に聞きましたが、既に学生たちはウインドミルで

投げてましたね。あと、中国から来た実業団などのプレイヤーがスリングショットをやっていた影響もありましたね。

末井●大学選手権以前からも、全日本一般男子・女子という大会に大学生チームはどんどん出ていましたよね。その当時でも一般男・女における大学生の力というのは不可欠で、全日本で活躍した人は結構おられたのではないですか。

齋藤●何と言っても下奥先生のところの日本体育大学からは優秀な選手がいましたね。もちろんうちにも。

吉野●うちもピッチャーで、その後に実業団入ったメンバーも多いですね。さらに、あの頃の女子チームは実業団を破って、全日本総合で優勝や準優勝をしたりと、いい成績を上げることができてました。

2 全日本大学ソフトボール連盟の全国への広がり

森田●そこから加盟大学の数はなかなか増えてませんで、20校を超えるには約10年かかったようですね。

齋藤●当初から大学連盟は日本ソフトボール協会の傘下として何とか認められましたが、依然として少ないチーム数ということで形見が狭かった部分に関係者にはありました。

吉野●ソフトボール競技において、今でこそ大学は一定の認知がなされていますが、当時は何と言っても加盟チームが少なかったため、日本協会における位置付けは実際まだまだだったと思いますね。

末井●今チーム数の話が出ましたが、昭和53年度になって男子が31大学となったことを受けて、インカレの地区予選が15回大会からスタートしたんです。女子は21回大会（昭和61年）から予選スタートですね。

一谷●おそらく、10年経って指導者が育っていったということだろうね。昭和41年に第1回大会があって、そこで選手であった人が様

々な現場で指導することで、ソフトボールというものが少しずつ浸透してきて、大学にもソフトボールのクラブが多く出来始めてくるんだと思うね。ちなみに、うちの大学のクラブも51年設立やけど、まさに下奥先生の下を卒業した学生を教員として採用するというのが始まりだったわけで。

齋藤●このような中で、日本ソフトボール協会も大学連盟をしっかりした団体として認知してくれ始めたね。その一つが日本協会の役員である「評議員」に大学連盟から1名選出ということになったことです。

森田●そうして今度は約10年前に、大学連盟から「理事」を出せるようにという専務理事からの話があって、今に至っているわけですね。私も鮮明に記憶しています。今までのお話を伺って、日本協会に役員として参画するということは、下奥先生はじめ諸先輩方の願いであったように感じました。

森田●全日本大学連盟としての事業のメインは先程来から話題になっている「インカレ」だったわけですが、もう一つの目玉として「東西対抗」があったように思います。ところで、東西対抗はどのような経緯でスタートしたのでしょうか。

大内●大学選手権大会を10年弱行ってきたわけだけど、西日本（当時は関西と東海）のチームがなかなか良い成績をあげられない。何とか東京、関東の実力を勉強させてもらわなければという気運が西で高まりました。ちょうどその時に豊田自動織機に艸田さん（元、日本協会副会長・現、刈谷市連盟会長）という方がいらっしゃって、日本のほぼ真ん中の愛知県で引き受けて東西対抗を実施してもいいですよというようなことで、お願いをして始まったわけです。

齋藤●そうですね。僕は1・2・3と3回監督をしましたが、技術の交流と親睦を兼ねて、場所は西の方でやればと言い合ってスター

トしたんじゃないかな。各チームからのキャプテンと副キャプテンの2名ずつを集めてチームを作って、試合に臨んだ覚えがあります。大内●要するに、東京、関東との力があつたので、西的には何とか勉強したい、吸収したいというのが主な目的でした。

吉野●それに加えて、大学連盟で東西対抗という話のそもそもは、ただ大学生が自チームのインカレでの成績だけではなく、卒業してからも大学ソフトボール界でプレイしたという「誇れる証（あかし）」みたいなものを付けさせてやりたいという思いもありましたね。私は、「選ばれて東西対抗に出たよ！」というね。それで、バレーボールやバスケットといった他種目の企画も参考にしての、東西対抗ではなかったですかね。

末井●いま吉野先生が言われたことがきっかけで、証明書を発行しようということになったのを思い出しました。

大内●役員も学生も当初から自己負担の部分はあったけれど、最初の頃にはいい感じで進みましたよね。ところが、回を重ねるうちに、時代の変化なのか学生堅気というのか、東西対抗も変わってしまっていて……。しかし、企画自体には大きな意味がありました。また、何か形をかえて是非あのような趣旨のものができればいいなあと思います。

森田●ところで、1992年第27回の香川でのインカレから「文部大臣杯(現、文部科学大臣杯)」という冠が付きましたが、この点についてどなたか。

大内●これは松田岩男先生に大変お骨折りをいただきました。当時、中京大学学長であった先生に学連会長をお願いしておりましたが、先生が先頭に立って日本体育協会を通して文部省にお願いし、大臣杯の授与が決まりました。しかし、何ととっても、その前年2月に出張中のボストンで暴漢に襲われて凶弾に倒れたのは無念でなりません。

3 未来に向かうこれからの大学連盟

森田●最後に、多くの経験をされてます先生方から、今後の大学連盟の展望についてお話を伺えればと思います。大学連盟には、競技レベルの向上はもちろん、日本のソフトボールの普及・発展への貢献というもあります。また、学連における学生の活動等も含めて、お願いします。

末井●最近色々とネットで見えるんですが、全日本学連の情報発信が非常に素晴らしいですよ。インカレの情報などツイッターやFacebookなど充実しています。広報の水谷先生が中心になっていらっしゃるのだと思いますが、学生役員の力も大きいんでしょう。これからは「学生の関わり」が大きなキーワードになる気がします。ちなみに、全日本学連で初めて学生役員の存在が意識されたのが、平成7年の市川さん（東京学芸大）だったように記憶しています。彼女が会議で「学生として出来ることはないですか」といった前向きな発言をされて以来、少しずつ変わってきました。それから10年程経って私が理事長の時代に、インカレの開・閉会式で学生委員長が宣言をしたりというようになりました。

森田●学生の関わりが飛躍的に進んだのは、22年度の学生委員長である石井新菜さん（専修大学）以降だと思います。彼女が大会期間中に、学連の教職員役員の表／裏での動きや苦労と一緒に経験する中で、「連盟や協会の人たちはこんな思いでやってくれている。じゃあ、学生ができる／学生にしかできないことは何かを具体的に考えます。」と言ってくれまして、新たな発想（「学生」や「見る人」の視点での情報発・受信）で卒業してからも学連に関わって現役学生をリードしてくれました。本当にありがたいです。新たな発想に基づいて実際に動くというのは、教職員の役員だけでは決してできなかったことです。

齋藤●50年経過した今、学生たちも先輩たちが残していった遺産を改めて点検してほしい

ですね。競技的な側面はもちろんだけど、ソフトボールの普及のいう点でどのような貢献をしてきたのかについてね。まずはそれぞれのチームがしっかり振り返りつつ、さらには学連として全体を考えたときにはどうなのかを。それが第1点。2つ目に学生たちに望みたいのは、他の団体との交流、交渉や折衝をしっかりとやるということです。挨拶や礼儀を踏まえつつも、言うべきことはしっかり口頭で表現できることが大学生たる所以だと思います。特に、チームの代表である学連委員、さらにはそれを束ねる学生委員長に期待される部分は大きいです。場合によっては大学連盟の代表として、可能な限り様々な交流や交渉事にも参画を期待したいですね。今までそれをほとんど教職員役員がやってきたわけだけど、そこにも学生が運営にも入って、その現場をしっかりと把握していただきたい。

吉野●ただ、学生役員に任せる部分を大きくしていくと言っても、やはりアドバイザーと言いましょかね、経験豊富な教職員の助言は必要だと思いますよ。それと、これからは長期的な展望にたって、現在の活動を考えていってほしいです。大学の他の競技団体の動きを参考にすることはもちろんですが、日本のソフトボールの普及・発展の中で大学がどのような役割を果たすべきかをいつも視野に入れておいてほしいですね。これは非常に難しいことで、私たちが出来てきたというわけではないですが。

大内●先程来お話がある学生の関わりですが、一つのチームをとっても所属協会等とうまく連絡・調整できていない現実があります。学生主体のチーム運営では、世代交代期での引き継ぎがうまくいかないところがあって、他団体との交渉の際にはそれが弱点になっていたことは事実です。また、そのことが大学連盟全体としての信頼を失うことにもつながっていて、そのためにも教職員役員と学生役員がうまく役割分担をしていく必要があ

るかなと思います。

森田●学連活動への学生の参画という観点では先生方のおっしゃる通りで、学生の自主的・自治的活動という本来の課外活動のあり方からも望ましいと私も思います。さらに現実的にも、教職員役員が減ってきている、いないという深刻な悩みが地区によっては出始めています。その意味では、新たな、斬新な動きや改革をしていかざるを得ないとも思います。

末井●あと、私は「国際交流」というのも学連の大きな成果であり、また新たな展開を期待したい部分です。確か、学連としての一番最初は、1992年の第1回ブラジル遠征ですよね。

大内●この会合の前に吉野先生ともその話で盛り上がったんだけど、私は遠征先での日系ブラジル人の方々との出会いは今でも忘れられないです。

末井●私もです。現地で歓迎、応援してくれた方々とお話する中で、感銘を受けたことは数多くあります。ブラジルの中で生きて行くために「教育」を重視して学校を建てたこと、それと日本人としてのアイデンティティを強くもっていらっしゃることなど。それ以降も女子の海外遠征がオーストラリアをはじめとして活発化しましたが、1992年から男子もニュージーランド遠征が始まりましたね。

吉野●色々なアクシデントもありましたけれども、国際交流事業というのは、学生にとっても我々にとっても大きな意味がありますね。

齋藤●それぞれのお国柄での慣習に「適応」して、プレイはもちろん様々な出来事を受け入れる「寛容さ」というか、「懐の広さ」というか「タフさ」が求められます。しかし、それにしてもブラジルの方々は開会式にしる、レセプションにしる時間的な感覚はほとんどありませんでしたね。(笑)

大内●国際交流の学生にとっての意味は、いろんな形があつていいと思うね。技術交流はもちろんのこと、将来の指導者や教師になる上でのいい刺激になる場合もあるだろうし。ソフトボールだけを学んだというのではなく、ソフトボール通じて大学生に伝えることができる事業だと強く思います。

末井●世界に目を向けてソフトボールを学んで、選手として素晴らしくなることも大事ですが、それ以上に、海外経験の中で例えば語学を学んだり、ビジネスやマネジメントのようなことにも興味を持ったりなど、色々な形で職種を問わず生かせるような経験を提供できる、そういう競技団体、学連になってほしいなとも思います。

一谷●本日は、本当にお忙しい中をお集まりいただき、ありがとうございます。皆さん方のおかげで、全日本学連は50年を無事迎えるという運びとなりました。これからも「ソフトボールを通じた素晴らしい世界観」を指導したり伝えたりしながら、更なる発展を目指したいと思っております。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。



左から、齋藤先生、吉野先生、一谷会長、大内先生、末井先生

第2章 大学ソフトボールの歩み

1966年1月、全日本大学ソフトボール連盟は日本ソフトボール協会による承認のもとに創設された。それ以降今日まで、ソフトボールを愛好する大学生や教職員などを中心に不断の努力と研鑽が重ねられてきた。現在、全日本大学ソフトボール連盟に加盟する大学チーム数は、設立当時の15（男子10、女子5）から男女とも100を超えるまでに拡大した。その背景には、日本ソフトボール協会をはじめ各関係団体からの惜しみない支援と協力があったことはいうまでもない。

この章では、大学ソフトボールのこれまでの普及と発展の過程を、いくつかの項目別に整理する。詳細については、資料「大学連盟50年の歩み・年表」、「主要なソフトボール国際大会」、「大学選手の参加した主要な国際大会・年表」などを参照されたい。

1 画期とその特徴

ここでは、これまでの歩みを時期別に整理し、各時期の特徴をそれぞれ明記する。

① 第1期（1979年まで）：大学ソフトボール競技の生成・普及期

日本のソフトボール競技は、主に太平洋戦争後に国民の中に普及した。このソフトボールの普及とともに組織化が進められた。1949年に日本ソフトボール協会が創設され、同時に日本体育協会に加盟した。その2年後の1951年には、国際ソフトボール連盟（ISF）が設立されている。同年、日本ソフトボール協会はそれに加盟した。また1950年代には、まず女子ソフトボール競技が、その後男子競技が国体種目となった。さらに1960年代に入ると、ルールや審判など競技を行うための諸制度・諸条件が国際的基準に沿って整備され

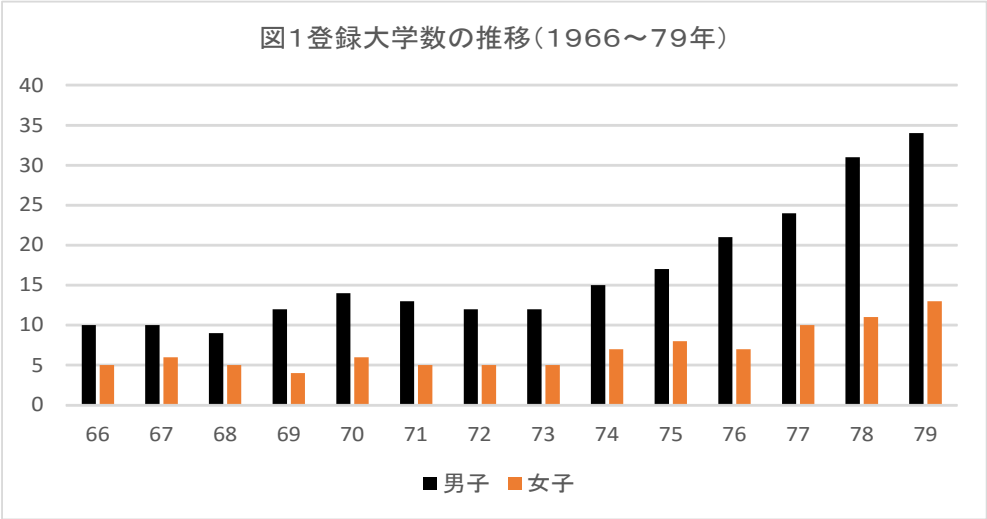
た。1964年東京オリンピックが行われた翌年（1965年）には、アジアソフトボール連盟（ASF）が設立されている。同年には、ソフトボールの国際大会として第1回女子世界選手権大会（メルボルン）が開催され、翌年（1966年）には第1回男子世界選手権大会（メキシコシティ）が開催されるに至った。

こうした状況の中で、大学ソフトボール界でも組織整備の動きが高まった。1965年に、当時日本体育大学でソフトボール・チームの監督・部長だった下奥信也氏は、日本ソフトボール協会に「大学連盟」の必要性を再三にわたり力説したといわれる。その過程で、当時日本体育大学の学長だった栗本義彦氏を会長に下奥氏を理事長とする大学連盟の設立準備を行っている。年末から翌年にかけての話し合いの末、全日本大学ソフトボール連盟の創設が日本ソフトボール協会によって承認された。1966年1月末のことだった。

図1は、この期間での登録大学チーム数の推移を示している。男子は1966年の10から徐々に増え、79年には34へと3倍以上に増えた。女子は、5前後でしばらく推移し、70年代後半から増え出し1979年には13へと増えた。ただ、大学連盟の組織や大会運営などの面では、苦労や試行錯誤の連続だった。

当初は全日本インカレの出場大学は、登録大学チーム数が少なかったこともあり、オープン参加だった。第1回全日本インカレは、1966年11月に東京・駒沢で開催されている。男子（10大学）ではトーナメント方式が、女子（5大学）ではリーグ戦が採用された。財政面では、チーム登録費2,000円、選手登録費200円とした。また、大学連盟役員（教職員）は発足当初から約10年間は無報酬だった。基本的に、ボランティアとしての大会運営、

組織運営に負っていた。



1974年、新たに第1回東西対抗戦が愛知県刈谷市で実施された。1975年には女子の登録大学が8になったため、全日本インカレではリーグ戦からトーナメント方式へと移行した。1976年、大学チームが徐々に増え、大学の大会も広がりを見せる中で、チーム登録費5,000円、選手登録費400円への値上げが行わ

れた。財政的な整備が急がれていた。

最後に、この時期の開催地(下表参照)は、東京と群馬県(14回のうち8回)が中心だった。この背景には、全日本インカレがオープン参加であり、大会運営の協力が得やすい都市・地域に依存する傾向があったのかもしれない。

回	時 期	開催地	回	時 期	開催地	回	時 期	開催地
1	66. 11. 3-5	東京・駒沢	6	71. 8. 27-29	東京・駒沢	11	76. 8. 22-24	広島・呉
2	67. 7. 26-28	東京・駒沢	7	72. 8. 17-19	愛知・豊橋	12	77. 7. 26-28	三重・熊野
3	68. 8. 16-18	群馬・高崎	8	73. 8. 28-30	群馬・草津	13	78. 8. 15-17	山梨・甲府
4	69. 7. 26-28	東京・駒沢	9	74. 8. 24-26	東京・駒沢	14	79. 8. 20-23	群馬・安中
5	70. 11. 13-15	大阪・吹田	10	75. 8. 20-22	兵庫・姫路	* 15回以降すべて夏開催。		

大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ①

三 宅 豊 (日本体育大学1974年3月卒業)

1970年(昭和45年)、新島学園高等学校を卒業した私は、日本体育大学に進学しました。夢は、日本一の投手になる事、そして、志は、後に続くものに少しでも歩みやすい道をつくりたい。「ソフトボールをするのではなく、ソフトボールをつくろう」の思いで大学に進みました。

高校時代、ソフトボールの魅力を語っても、まったく世間では認知さ

れておらず、私は、打者を相手にするのではなく、世間を相手にしてやろうと、ひたすら「速いボール」を投げる事を追求し、「腕を回す投げ方」ウインドミル投法に独学で挑んでいました。

そんな私が、大学時代に追求したものは「コントロール」でした。いかに速いボールを投げて、コースが甘ければ打たれる。また、いかに配球を考えても、そこに投げられなければ組み立ては出来ない。1日、200球から300球。アウトコースに50球、インコースに50球、ライズボールを50球。ドロップを50球。これでもう200球。チェンジアップとカーブを50球。各組み合わせを50球と考えて投げていくとすぐ300球になってしまう。これ以上は肩に負担が来る。だから、次には月日を重ねる。雨の日は、大学の廊下でピロティで投げていました。

試合の思い出としては、インカレでの第6回大会から8回大会まで3連覇。2年生、3年生の時は、同郷群馬県にある高崎経済大学の鈴木投手との決勝戦での投げ合い。4年生の時は、これまた、新島学園高等学校の後輩、浦野投手が投げる中京大学との準決勝での投げ合いがありました。インカレ以外では、国士舘大学の竹中投手と都予選で延長21回を投げ合い、決着が着かず再試合になった試合。

監督さんでは、日体大の下奥信也先生を始め、早稲田大学の角田真一郎先生、中京大学の大内敬哉先生、学習院大学の齋藤滋雄先生、国士舘大学の坂井正郎先生には大変お世話になりました。

そうした先生たちのご努力があって今の大学ソフトボール界の発展があると思います。

全日本大学ソフトボール連盟は、ソフトボール界において重要な存在であります。研究機関として、ソフトボール関連の研究・発信、世界のソフトボールの情報収集などを積極的に行い、フトボール発展の中心的存在になって欲しいと思います。また、教職をとった学生は、教師になって多くのソフトボール選手を育てて欲しいと願います。全日本大学ソフトボール連盟に大いなる期待を抱く者として、今後益々のご発展をお祈り致します。

② 第2期（1980年代）：大学スポーツ競技としての成長期

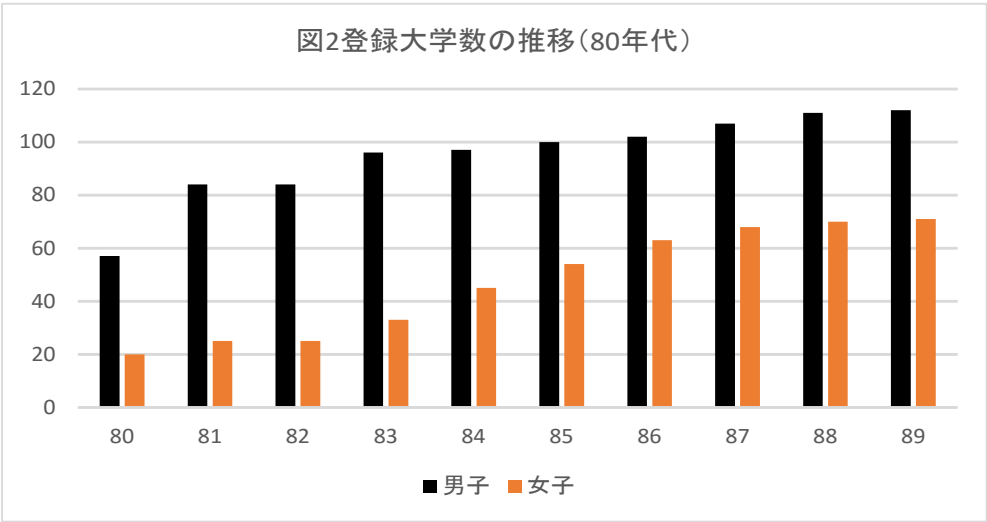
1980年代には、男子、女子とも登録大学数は急速に増えている（図2）。1980年の男子57、女子20から、89年には112、71へと2倍、3倍もの大幅な増え方だった。それにとともに、全日本インカレの大会は、オープン参加から地区大会を勝ち抜いた代表大学チームに

よる大会へと移行することになった。

特に男子では、1980年に登録大学チーム数は57となったため、日本ソフトボール協会の地区割りに準じて大学連盟独自の地区割りが設定された。この年、予選大会を勝ち抜いた28チームが全日本インカレに出場した。女子がこの方式を採用したのは、登録大学チーム数が63になった1986年である。この年、各地

区大会を勝ち抜いた18チームによって、全日本インカレは開かれた（2年後の1988年には18から20に改正された）。これにより、大学ソフトボール競技は、男女とも地区予選大会

・全日本インカレという体制が整った。1987年、全日本インカレに対して日本ソフトボール協会から優勝旗、優勝杯、準優勝杯が授与されることになった。



この時期の特徴は、いくつかの全日本インカレ開催地（全て8月開催）で一般、高校生、中学生など各年齢層を対象にしたソフトボール講習会が行われたことである。この時期の開催地（下表参照）は、関東から東海、北陸、中国、四国、九州まで広範囲に広がっており、普及活動の一環として行われた。大学生のソフトボール競技大会を全国各地で知ってもらうとともに、この競技の楽しさや技術をその

地域のいろんな層に伝達・普及していこうという積極的な試みだった。具体的事例として、第17回大会(1982)の大牟田で約300人が、第20回大会(1985)の坂出では約130人が、第21回大会(1986)の下呂町他では約100人が講習会を受けている。そこでは、大学連盟の役員を中心に講師陣が編成され、それぞれの講習分野を担当した。

回	開催地	回	開催地	回	開催地	回	開催地	回	開催地
15	石川・金沢	17	福岡・大牟田	19	静岡・浜松	21	岐阜・下呂他	23	福岡・大川
16	山口・宇部	18	東京・昭島	20	香川・坂出	22	山口・宇部	24	千葉・千葉

1980年代におけるこのような競技スポーツとしての成長は、財政体質の向上を通じて強力に支えられていた。1982年、チーム登録費はそれまでの5,000円から1万円に、選手登録費は400円から500円に値上げされた。この改

定によって、大学連盟の財政基盤は登録大学チーム数の急速な増加とともに強化された。それが、全日本インカレの大会運営や様々な講習・普及活動などに活用されるとともに、組織力の向上に役立てられた。

大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ②

清水 正（日本体育大学1985年3月卒業）

私は1985年（昭和60年）に大学を卒業するまでの1981年（昭和58年）から1984年（昭和59年）の4年間を日本体育大学ソフトボール部に在籍していた。

男子選手としては体も小さく、足も特別速いわけでもなく、とにかく大した選手ではなかった。

私自身、大学時代に活躍したとかチームの勝利に貢献したという記憶がまったくといっていいほどないのである。ただ言えることは、ソフトボールが好きで、勝負が好きで、選手としてソフトボールができてさえいれば、それで幸せだったような気がする。それ故に、レギュラーを掴むため、チームの勝利に貢献するために、自分なりにひたむきな努力をしていたのは事実である。

私は高校から投手として期待されながら大学へ進学したものの、1年生の終盤に左膝を故障し手術にまで至ってしまった。その後の経過も良くなく、投手継続を断念し野手へ転向することとなる。しかし、そこは日本一の大学、簡単に転向できるレベルではない。内野手レベルにおいて対応できるすべもなく、それでも様々なポジションを転々とし、2年の秋にようやく外野手としてポジションを頂いた。しかし、レギュラー選手としてはまだまだ程遠く、毎日毎日全体練習後に外野から本塁への送球練習を夢中になってやっていたことを思い出す。やっとレギュラーを頂けたのは3年からだった。

それでも私は運がいいのか、いつも周りの人に恵まれて、助けられて、在籍した4年間は全日本インカレを4連覇することができたのである。これは私の同級生はもとより、先輩後輩に素晴らしい選手が多く、その人たちの活躍による結果であり、それでも私にとっては一生の実績として残ったのである。これがソフトボールであり、チーム競技なのである。周りの仲間に勝たせてもらっていることを決して忘れてはならないのである。

現在私は、大学女子チームの監督として指導にあたっている。その傍ら、小・中・高校生の指導もおこなっているが、コーチングをする上で、間違いなくこの大学時代の経験、様々なポジションを転々とし、もがき苦しんだ経験が生きているのは間違いない。

2008年北京オリンピックで日本が金メダルを取り盛り上がったものの、正式種目から外れ、一気に熱が冷めてしまってから今年で7年、競技スポーツの土台である小・中学生の競技人口も減少の一途をたどっているさなか、2020年東京オリンピックで開催種目となり大変嬉

しく思う反面、またもや一過性のもので終わってしまうのではないかという危惧も感じている。未来永劫ソフトボールが発展するように、この復活を機に日本協会のみならず大学連盟も成すべきことがあるのではないだろうか。

池 田 紀 子（園田学園女子大学1986年3月卒業）

全日本大学ソフトボール連盟創立50周年をお慶び申し上げます。

私も、大学卒業から数えて早30年を数えます。今思えば、現在のように多くの大学がソフトボール部を有していた訳ではありませんでした。私が所属していた園田学園女子大学も今年は創部38年を迎えたので、私の入学時ではちょうど初めての卒業生と入れ替えの年です。そう考えれば、まだまだ歴史のない時代にがむしゃらにボールを追っていたんだと、感慨深く思います。

さて、その頃の思い出と言えば、全国で戦うことのできる、高校とは違った質の良い練習をしていたということです。私自身インターハイには一度も出場したことはなく、全国がどういったものかも曖昧で大学に入りました。しかし、練習が大変充実しており、何もかもが新鮮で楽しかったことを覚えています。苦しい時もありましたが、思い返せばその経験があったからこそ、今の自分があり、大学ソフトボールを教え子に経験してほしいと考えています。

後になりましたが、現在の私は高校で国語教諭として教鞭を執りソフトボールの指導にあたっています。母校にもお世話になることも多くあります。夢を持って大学ソフトボールの門をたたき、多くの生徒が巣立っていきました。少しずつ大人に成長させてくれる大学ソフトボール。戻ってくる卒業生たちの背中が大きく見えることに、少しではありますが誇りが持てる自分がいます。

ところで、思い出をもう一つ考えました。沢山の中から文字にするにはなかなか絞れません。その中で、園田学園女子大学インカレ初優勝のことを少し書かせて頂きます。あの時は今の時代には考えられないジnkスを抱えて戦っていました。真夏の大変暑い中、一度もユニホームを洗わなかったり、毎日同じ動きをしていたり。決勝戦では、後攻だった園田のマウンドにハトが降りてきました。何を根拠にと笑ってしまいましたが、「勝てる。」とその気になっていました。気持ちが大切だと感じた大会でした。しかし、その優勝があったからこそ、日本代表として選んでいただくことができました。その時のロサンゼルスオリンピックでは公開競技として世界大会が開催されました。そこで対戦し、お互いライバルとして戦ったのは現全日本を率いる宇津木麗華さんでした。ソフトボールを通じて、いろいろなご縁を頂き感謝の気持ちを忘れてはいけな

いと改めて感じます。

終わりになりますが、オリンピックが2020年に東京で開催されること
が決まりそうです。その輝かしい舞台でもう一度、晴れやかな笑顔が見
 られることを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

③ 第3期（1990年代）：オリンピック競技
 種目の採用と大学ソフトボール競技の発展
 期

80年代後半から、ソフトボールをオリンピ
 ック種目にしようとする動きが国際的に高ま
 ってきた。そうしたなかで、1991年女子ソフ
 トボール競技は「96年アトランタ・オリンピ
 ック」の正式種目として採用されることが決
 定した。大学ソフトボールは、女子ソフトボ
 ール競技がオリンピック競技種目として活動
 するという新たな局面に影響され刺激され
 て、さらなる発展を遂げていく。これが、こ
 の時期の特徴である。

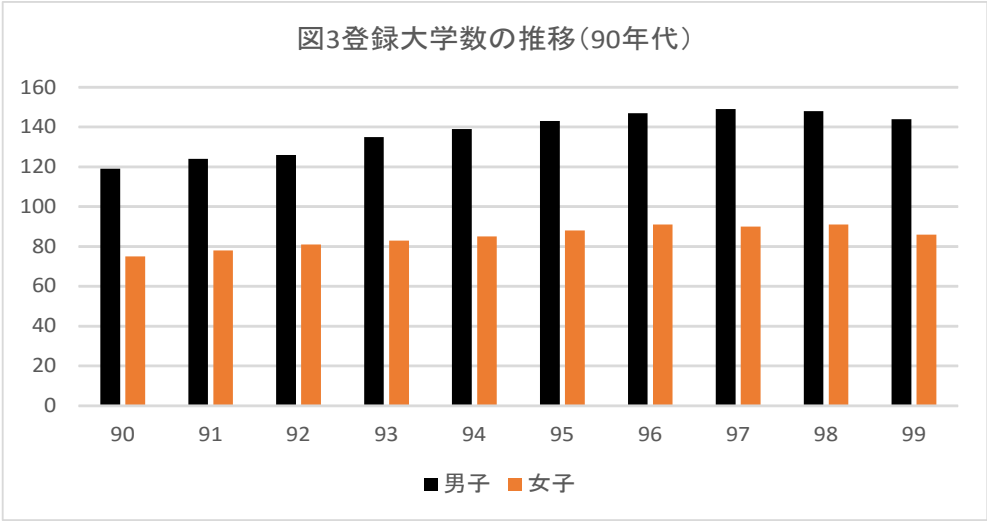
まず大学連盟の組織面では、1990年に大学
 連盟規約が大幅に改定され整備された。翌19
 91年には、全日本インカレの出場大学数は男
 子32、女子24へと拡大変更された。さらに、
 1992年には全日本インカレで文部科学大臣杯
 が授与されることになり、大学ソフトボール
 は名実ともに大学スポーツ競技界での地位を
 確立した。なお、文部科学大臣杯の授与につ
 いては、ボストンで凶弾に倒れた当時の松田
 岩男会長の尽力があったことを忘れてはなら
 ない。

1994年には、大学チーム登録費は1万円か
 ら3万円へ、選手登録費は500円から1,000円
 へと値上げされた。これにより、1990年代に
 おける新たな事業展開のための財政基盤が強
 化された。翌1995年には、第1回全日本女子
 短期大学大会が開催された。

広報活動面では、1997年に大学連盟の機関
 誌「ウインドミル」が新たに創刊された。こ

れは、大学ソフトボールの競技力や組織運営
 力の向上を包括的に目指していた。具体的
 には、全日本インカレを中心とした大学大会報
 告、各地区間の相互の情報交流、ソフトボ
 ール競技力向上、地域スポーツ活動との連携な
 どに関する研究調査そして大学選手に関連し
 た各種大会の記録の整理などを目的にしてい
 た。こうした大学ソフトボールにおける組織
 体制の整備が進むなかで、大学登録チーム数
 は、1990年の男子119女子75から1999年には
 144、86へと着実に増えた（図3）。

この時期を特徴づけるものは、国際大会へ
 の大学選手の参加が増えたこと、そして大学
 連盟独自の国際交流活動が新たに創設され
 たことである。資料「国際大会への大学選手
 の参加」などをみると、まず国際大会への大
 学選手の参加は、1990年代には日本ソフト
 ボール協会が派遣する各カテゴリーの国際
 大会の増加とともに大きく増えてくる。今
 回資料で上げたものだけでも、14の国際大
 会・試合に参加している。そのうち、女子
 が9あり、全体の約3分の2を占めている。
 「96アトランタ・オリンピック」や「00
 シドニー・オリンピック」を目指した日本
 代表チームの育成と選手強化策は、日本の
 ソフトボール競技力向上のいわば本流だっ
 た。この本流に、様々なカテゴリーの大
 会や選手育成・強化が合流し、ソフトボ
 ールのさらなる普及が実現する体制にな
 っていた。このシステムに、大学選手だ
 けでなく、大学連盟関連の指導者も、様
 々な形でかかわってきた。1999年の第7
 回アジア女子選手権大会には東京女子体
 育大学チ



ームが出場したことに象徴されるように、日本ソフトボール協会と全日本大学連盟の連携は従来以上に進んだ。

他方、大学連盟自身、独自の国際交流事業を始めた。1992年、大学連盟役員をスタッフに大学女子選抜チームを初めて編成し、8月ブラジルのサンパウロ他で国際交流試合、交流事業活動を行った。この2年後の1994年8、9月には、ブラジル女子チームを日本に迎えた。各地で、地域大学選抜チームや単独大学チームとの対戦が組まれ、多くの交流活動が展開された。1995年の12月20日から96年の1月5日にかけて、今度は日本からブラジルへの2回目の女子大学選抜チームによる遠征が行われた。大学連盟独自の国際交流事業は、大学生の成長を目的とした企画も実施されていた。そのことが、女子大学生にとって非常に有意義なものになっていた。ただ残念ながら、このブラジルとの交流は諸般の事情によ

り、その後停止状態になった。

こうした貴重な経験を踏まえて、男子大学選手を対象にした国際交流事業が新たに実施された。それが、1998年から始まる大学男子選抜チームのニュージーランド遠征である。同年2月5日から16日までのこの遠征では、ニュージーランドの大会に試合参加したり、現地にホームステイすることで生活文化を学び、様々な交流を深める企画・内容が盛り込まれていた。この事業は、その後も継続されていった。

この時期の全日本インカレは、東北から九州まで各地区別に開催されている（下表参照）。ただ、男女の会場が別になっているのが6回ある。なかでも、第29回大会では、男女の会場が同一地区のなかのそれぞれ別の県になっている。また、第30回大会は男女それぞれ別の地区で開催された唯一の例である。

回	開催地	回	開催地	回	開催地	回	開催地	回	開催地
25	石川 (男) 野々市 (女) 金沢	27	香川 (男) 観音寺 (女) 坂出	29	(男) 群馬・前橋 (女) 神奈川・相模原	31	山口・宇部	33	三重 (男)伊勢 (女)磯部
26	愛知・豊田	28	山口・宇部	30	(男) 福井・福井 (女) 広島・御調	32	鹿児島・桜島	34	宮城・(男)矢本 (女) 女川

大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ③

儀 保 信 虎（沖縄国際大学1997年3月卒業）

全日本大学ソフトボール連盟創立50周年おめでとうございます。

私が大学生時代というのは20数年前のことですので、多くを記憶している訳ではありませんが、何か在学生の皆さんの参考になればという思いで、私が在籍していた沖縄国際大学ソフトボール部がどのように活動していたか、私がどのようなことを学ぶことができたか等を紹介したいと思います。

当時を振り返ると、沖縄国際大学ソフトボール部は部員も少なく、専用の練習場もない状況で、1・2年生の車にはマシンなどの用具が常に積み込まれており、それを毎日、その日の練習会場に運んで練習していました。沖縄県出身者のみで構成していたチームでしたが、そのような状況下においても、全国のエリートが集まる他県の大学に負けてたまるかという思いで、必死に練習に打ち込んだものでした。その成果として、全日本大学男子ソフトボール選手権大会、第29、30回大会で優勝することができたことは私自身誇りに思っていますし、熱心に指導していただいた顧問の先生や当時の日本トップレベルの実力を誇った先輩方の存在に感謝しています。また、ソフトボール部は県内企業の皆様方やその他多くの県民の皆様方に県外遠征の費用へのご寄付、ご協力をいただいていた。そのご恩は忘れることはできません。この経験はスポーツや仕事の面でも私の中で活かされており、「ソフトボールの楽しさ」、「目標を持つ大切さ」、「チームが一つになる素晴らしさ」、「人の温かさ」などを、教え子に伝え続けていきたいと思っています。

私はこれまで、ソフトボールの投手をしていく中で、計画的なトレーニングとコンディショニングの大切さを学びましたが、社会人になれば仕事が第一になり、生活の中に練習の時間をいかに組み込んでいくかという難しさを痛感しています。私の周りには仕事を理由にソフトボールから離れていく人も少なくありません。学生時代には自覚していませんでしたが、社会人と比較して、学生は自由に使える時間が多く、色々なことに取り組むことができると思います。在学生の皆さんには多くのことに挑戦し、メリハリのある有意義な大学生活を送って欲しいと思います。そうすることによって培った力は、仕事と趣味の両立を助け、充実した生活を送る力になると思います。今後もソフトボールを愛する仲間が増えていくことを願っています。

最後になりますが、全日本大学ソフトボール連盟の益々のご活躍・ご発展を祈念申し上げます。

大 木 彰 人（中京大学1997年3月卒業）

“はいもしもし敬球寮でございます“寮の電話を3コール以内に出ないといけないのです。私が親元を離れてソフトボールをするようになった大学生活の始まりです。毎日が新鮮でなりませんでした。言葉づかいにはじまって日々の生活態度など、序列など全く無い高校時代にはありえないことだらけの毎日でした。高校では、キャプテンを任せられエースで4番。1人では勝てない事を知りました。この時点で私は、全国大会の経験も無くただの部活動程度でした。

しかし、ここで縁あって、ある高校の先生に“ジュニアの世界選手権があるから選考会に出てみないか”とお誘いがあったのです。何で私が・・・という半信半疑な思いで選考会に行ったわけですが、思ったとおり、全国で活躍している高校生がたくさん来ていました。

スピーディーな動きに豪快なバッティング、話をしても全国で勝っていくための練習方法などを聞かされ衝撃を受けたのです。選考会の休憩時間になると同じユニホームを着た生徒たちが集まってワイワイしているのを横目に見ながら、反骨精神を前面に出して、なりふり構わず投げた事を思い出します。

そんな縁も後押しとなり中京大学に進学する事になったのですが、色々な面で勉強させてもらう場になるのです。先輩方とすれ違う際には、直立して挨拶して一礼をするのは当たり前。当時は、全員が寮生活をしており、特に1年生は当番で、練習を休んで食事の買出し、朝夕の食事の準備、早朝から寮の清掃、1日中電話番、夜遅くまで洗濯と毎日があっという間に過ぎていきました。

また、寮の部屋も数が限られているため、私の部屋は四畳半に2人で生活していました。ただ、この1年間を乗り越えることで、同級生とは強い信頼関係が築けたのも事実で、今でも思い出話でお酒がすすみます。そんな大学生活も終盤に迎えたころ、実業団チームの監督に今度も世界選手権の選考会の誘いがあったのです。ここで、また衝撃を受けるのです。球が速いだけではだめで、緩急をつけることの大切さ、1試合を見据えたゲームプランなど社会人らしい洗礼されたプレーの数々でした。

この選考会で、お誘いがあって高知県の土佐闘犬センターに入部することになったのですが、ここでは、勝ち続ける事の苦しみ、勝って当たり前というプレッシャーなど11年間高知県にお世話になり貴重な経験をさせていただきました。この時期の話は尽きませんので別の機会にしたいと思います。

人生には浮き沈みがあり、いいタイミングでいい人に出会ってその場でどれだけ自分がパフォーマンスできるかということ、大切なのは、沈んだ時にどうするかということ。挫折や屈辱、怪我などで沈んだ時にどうするか、自分で考えアドバイスを受けながら、試行錯誤して、挑戦や

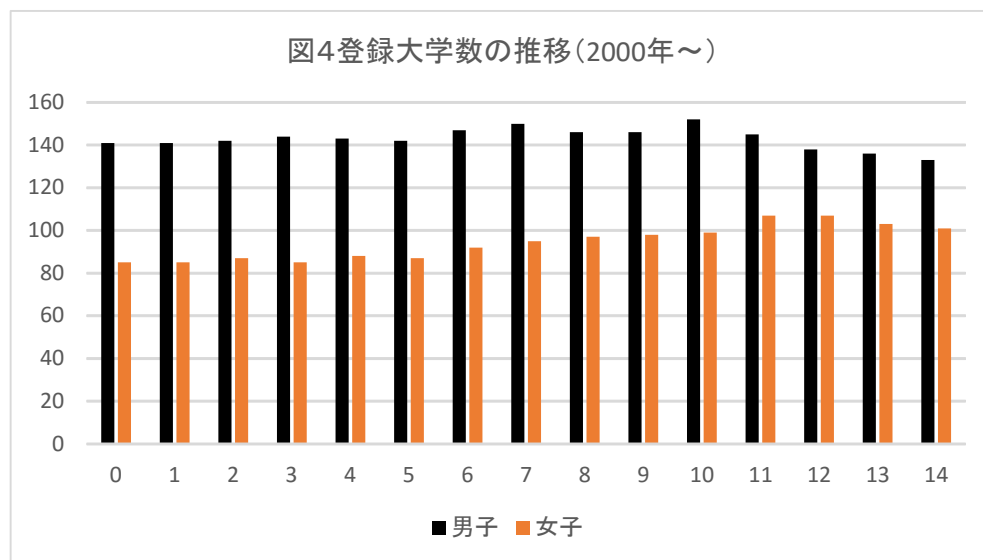
乗り越えるときの苦労や工夫、乗り越えた後の優越感みたいなもので成長して大きくなれるのだと思います。このことは、ソフトボールにかかわらず、仕事をする姿勢、ひとつの事に取り組む姿勢や、人にアドバイスをするとき私の大切にしていることです。

最後に、たくさん飲ませて頂いた先輩方ありがとうございましたそしてたくさん飲ませた後輩の皆さんごめんなさい。皆様方の益々のご繁栄とご活躍をご祈念申し上げて締めくくりとさせていただきます。

④ 第4期（2000年代～）：大学ソフトボールのさらなる国内的・国際的展開期

1990年代以降、オリンピックを頂点とした国際大会への参加とトップ選手の技術力向上、そのもとでのソフトボールの国民的普及という日本ソフトボール協会のスタンスは、2000年代以降も基本的に変っていない。ただ、2012年のロンドン・オリンピック以降、ソフトボールは正式種目から外れてしまった。とはいうものの、2020年の東京オリンピックでは「復活」という希望は残されている。

この時期、全日本大学連盟は組織運営体制をさらに強化するなかで、国内的取り組みや国際的取り組みをいっそう前進させた。これが、この時期の特徴である。まず、2000年以降の登録大学チーム数をみると（図4）、男子は2010年の152をピークとしながら、全体としては140前後で推移している。女子は、2011、12年の107をピークに高い水準を保っている。明らかに1990年代よりも一段階高い水準にある。



こうした状況のなかで、大学連盟は一部の大会のスクラップ・アンド・ビルド策を実施した。それは、大学経営を取り巻く環境の変化などを反映したものでもあった。まず2000

年、全日本大学東西対抗戦が27回目で終了した。翌2001年には、全日本女子短期大学大会が7回目で終了した。これに代わって、国内的取り組みが強化された。特に、これまで秋

季大会・リーグの行われていなかった地区（関東、中国、九州）でも、秋季大会が2001年に実施されることになった。これで、大学連盟加盟の全9地区で、地区を土台とした春季大会、秋季大会が確立した。

新たな取り組みとして、各地区で開催されているが、参加チームはその地区にこだわらずその枠を越えて広がっている大会を、全日本大学連盟は積極的に後援することになった。2000年、まず阪神学生女子オープンや「峠のまち」Matsuida Cupを後援した。2002年には、東海オープン、大学女子学生in八幡浜を後援した。その後も新たな大会の後援は続き、2014年3月現在12の大会を後援している。

広報活動面の新たな取り組みとして、2000年から大学連盟公式のホームページを立ち上げた。これによって、各地区の大会や西日本大会、東日本大会、全日本インカレの各種情報や結果をいち早く伝達できるようになった。2006年からは、全日本インカレの開・閉会式に学生委員が参加するようになった。また2011年には、インカレ広報員会のもとのtwitterによる試合速報や大学連盟ホームページでのインカレ特設サイトが開設された。学生委員による多面的な大会運営が展開されるようになった。

日本ソフトボール協会との関連でいえば、2004年4月末井理事長が役員選任規定の第6条により日本ソフトボール協会の理事に就任した。これは、大学連盟役員の初めて理事就任だった。この間の大学ソフトボール界の普及と発展のための活動が評価されたものといえよう。また、2012年には、全日本インカレの女子出場数が24から32に増えた。

国際的取り組みでも大きな進展がみられた（資料「国際大会への大学選手の参加」参照）。まず女子については、大学連盟による大学女子選抜チームのオーストラリア遠征が2000年に実施された。その後、2003年の第8回アジア女子選手権大会、2004年の第3回アジア女

子ジュニア選手権大会、2004年の第1回世界女子大学選手権大会、2005年のオーストラリアとの国際強化試合、2006年の世界女子大学選手権大会、2007年のユニバシアード競技大会、2009年のワールドゲームズ2009 in高雄、2010年の台湾遠征、2011年のアジアパシフィック選手権大会、2012、13、14年の第1、2、3回東アジアカップ、2015年の第5回アジア女子ジュニア選手権大会など、ほぼ毎年のように大学女子選抜チームが編成され国際試合に参加した。

男子でまず特筆されるべきことは、大学男子選抜チームが2007年の国際大会（アメリカンチャレンジシリーズ）に初めて日本代表として出場したことである（資料「国際大会への大学選手の参加」参照）。これは、大学連盟にとって長年の念願だった。また、大学男子選抜チームのニュージーランド遠征については、2000年代に入ってから着実に実施された。2002年の第2回から2014年の第6回まで、当初の基本的スタイルを維持しながら継続して実施されている。

その他に、日本ソフトボール協会による世界ジュニア選手大会への派遣では、男女とも多くの大学選手が出場している。他方、シドニー・オリンピックや各種の国際大会には現役学生選手あるいは大学出身選手が出場し活躍している。高等教育機関としての大学教育を基礎に競技力向上とともに国際的文化交流を大学選手は体験している。こうした国際的人材育成とともに、多くの大学選手が様々な分野で社会的に活躍し貢献することが、今後ますます期待されている。

最後に、全日本インカレは、1990年代と同様に九州から東北まで各地区で開催されている。特に、第47回大会から出場大学チーム数は男女とも各32（合計64）になった。その大会運営は、多数の会場確保と大規模な選手数の宿泊、試合数の確実な消化、多くの審判員・記録員の確保などの面で、新しい次元に入

っている。ソフトボール競技にかかわる諸般の事情を考慮するとき、これからは全日本インカレの充実化に向けて、いろんな工夫を考える必要があるかもしれない。

回	開催地	回	開催地	回	開催地	回	開催地
35	香川・丸亀	39	静岡・富士宮	43	宮城・(男) 東松島 (女) 女川	47	埼玉・(男) 坂戸 (女) 毛呂山
36	茨城・(男) 下妻 (女) 古河	40	群馬・安中	44	宮崎・宮崎	48	大阪・(男) 大阪 (女) 交野
37	京都・宇治	41	愛知・豊橋	45	富山・富山	49	岩手・花巻
38	山口・宇部	42	京都・(男) 舞鶴 (女) 福知山	46	山口・(男) 宇部 (女) 下関	50	三重・(男) 磯部 (女) 伊勢

大学ソフトボールの思い出と将来への期待 ④

杉 田 剛（日本体育大学2002年3月卒業）

全日本大学ソフトボール連盟創立50周年を迎えられたことに、敬意を表し、心からお祝いたします。

私は平成10年4月に、日本体育大学男子ソフトボール部に入部しました。同級生は4名と非常に少なく、不安な思いでいたことを思い出します。

しかし、4年間のインカレでは、指導者、先輩、下級生、同級生に恵まれ、3度の日本一という成績を収めることができました。特に4年生の時には、主将という立場でプレッシャーがかかる中、少ない同級生達と、勝つためにどうすればよいのかを意見を出し合い、試行錯誤を繰り返しながら様々なことに取り組みました。その結果がインカレ優勝という最高の結果に結びついたことは大学時代のよき思い出です。今でも、その過程で取り組んできたことを活かしながら指導をしています。

また、在学中には、多くの貴重な経験を積むことができました。基礎練習、練習計画、戦術など、勝つために必要なことや、挨拶、言葉遣い、先輩との接し方、気配り・目配りの大切さ、時間の厳守、道具整備と整理整頓など競技とは別に、社会人として生きるために必要なことを学ぶことができました。

大学4年間を振り返り、多くの人と出会い、囲まれ、生かされてきたことを感じています。学生生活で出会ったすべての方々のお陰で、大変充実したものとなりました。

私は現在、大分県の高等学校に勤務しています。大学4年間の経験が、

今の私自身の教師生活での基礎となっていることは間違いありません。ソフトボール部の顧問として勝利にこだわりつつ、人間形成の場としての指導をしています。ソフトボールを楽しいと感じ、生涯続けたいと思う生徒を少しでも増やすことが私の役割だと思っています。

大学生の皆さんには、今後、指導者や競技者など様々な立場で魅力を伝える担い手となって活躍することを期待します。皆さんのソフトボールへの熱い思いこそが将来、競技が飛躍的に発展するために必要な力だと私は確信しています。

最後に、全日本大学ソフトボール連盟の、今後、益々のご発展を心よりお祈りいたします。

渡 邊 華 月（園田学園女子大学2008年3月卒業）

私の長いソフトボール人生の中で、大学時代の4年間を思い出すことは決して困難なことではなく、今も鮮明な記憶として蘇る。

大学スポーツの魅力はなんといっても「仲間との絆」にあると思う。4年間共に過ごした仲間と戦う時間がどんなことよりも大事な時間に思える。監督・コーチとの深い繋がり、先輩後輩という縦の繋がり、かけがえのない同期という横の繋がり、それらすべての繋がりが絆となり誰も予想だにしない素晴らしい結果を生み出す。大学スポーツの1番の魅力ではないだろうか。

大学4年生の夏、私たちの全日本大学女子ソフトボール大会は、京都府の福知山市で行われた。夏の暑さ、白土の照り返し、仲間の汗・・・あの時の情景は今でもはっきりと覚えている。

3年生のインカレの敗北から1年間、インカレ優勝の瞬間だけを思い描いて過ごしていた私は、決勝戦最後のバッターを三振に打ち取った瞬間、ホームベース上で泣き崩れ、力尽き、マウンドでの歓喜の輪に入ることが出来なかった。後輩ピッチャーの元へ走って抱き合う…みんなが駆け寄る・・・仲間の笑顔…想像していた優勝の瞬間とはとてもかけ離れたものではあったが、そのことさえも今となっては、忘れる事のできない最高の思い出である。

「勝つことで全てが報われる、この瞬間は何ものにも変えられない」と、本当のソフトボールの魅力を教えてくれたのは、あの瞬間であったことに間違いはないし、今も尚その魅力に取り憑かれていることも間違いはない。

トヨタ自動車に入社し、今年で8年目になる。6月から8月までの3ヶ月間で行われているアメリカのプロリーグ（NPF: National Pro Fast pitch）に私は2度参加させていただいた。アメリカの大学界のシーズ

ンは6月がファイナルのため、全米1位を争った大学4年生にとってはまさに、心も体も最高の状態での参戦になる。そのような学生たちがチームのベテランに混じり、引けを取らずに各チームの中心となって活躍する姿を見ていると、アメリカの大学界のレベルの高さを痛感する。また、大学ソフトボールとはいえ、試合のほとんどを全米放映することで、多くのファンを獲得するところは、まさに“スポーツ大国アメリカ”と言えるのではないだろうか。

近年、日本でも大学ソフトボール界から企業への新卒入社が増え、即戦力として活躍している選手が多く見られる。とても喜ばしく、またとても誇りに思う。

ソフトボールを中学・高校の「学校教育」として学び、選手としても自らプレーし、教育の一環としてソフトボールと関わっている時間は、とても貴重で有意義なものだ。そのような学生の存在もまた、日本リーグにとってとても大きな存在のように感じる。1人でも多くの学生が、企業に入社し、日本リーグで活躍することが、後輩たちへの刺激となり、更にはいい目標となるのではないか。私自身もまた、日本リーグで活躍することで大学界への恩返しができるよう、今後も愚直にソフトボールと向き合っていきたい。

2 全日本大学東西対抗戦、全日本女子短期大学大会

これらの大会の記録は、学連機関誌 **ウイン ドミル**（第9号）の「40周年記念号」に掲載 されている。50年の歩みを振り返る意味で、再度ここに掲載する。

① 全日本大学東西対抗戦の記録

回	年	男 子	女 子	開 催 地
1	1974	○東軍 3－0 西軍	東軍 0－1 西軍○	愛知県刈谷市
2	75	○東軍 8－0 西軍	○東軍 2－0 西軍	愛知県刈谷市
3	76	○東軍 1－0 西軍	○東軍 2－0 西軍	東 京 都
4	77	○東軍 1－0 西軍	○東軍 9－0 西軍	静岡県藤枝市
5	78	○東軍 4－2 西軍	○東軍 1－0 西軍	大阪府吹田市
6	79	○東軍 4－0 西軍	○東軍 1－0 西軍	東 京 都
7	1980	東軍 0－2 西軍○	○東軍 2－1 西軍	兵庫県尼崎市
8	81	東軍 2－3 西軍○	○東軍 1－0 西軍	千葉県千葉市
9	82	○東軍 7－4 西軍	○東軍 1－0 西軍	兵庫県尼崎市
10	83	東軍 0－2 西軍○	○東軍 1－0 西軍	東 京 都
11	84	東軍 0－1 西軍○	○東軍 1－0 西軍	愛知県豊田市
12	85	○東軍 1－0 西軍	○東軍 2－0 西軍	埼玉県川口市
13	86	東軍 0－3 西軍○	○東軍 1－0 西軍	兵庫県尼崎市
14	87	東軍 1－2 西軍○	東軍 0－1 西軍○	神奈川県平塚市

15	88	○東軍 9－4 西軍	○東軍 1－0 西軍	愛知県豊田市
16	89	○東軍 1－0 西軍	○東軍 1－0 西軍	福島県郡山市
17	1990	○東軍 1－0 西軍	○東軍 4－0 西軍	兵庫県姫路市
18	91	○東軍 2－1 西軍	○東軍 1－0 西軍	東京都
19	92	○東軍 2－1 西軍	東軍 2－3 西軍○	香川県坂出市
20	93	東軍 1－3 西軍○	東軍 0－1 西軍○	神奈川県相模原市
21	94	東軍 0－5 西軍○	○東軍 3－0 西軍	愛知県豊田市
22	95	東軍 1－2 西軍○	○東軍 3－1 西軍	滋賀県長浜市
23	96	東軍 2－3 西軍○	○東軍 1－0 西軍	滋賀県長浜市
24	97	東軍 2－5 西軍○	○東軍 3－2 西軍	滋賀県長浜市
25	98	○東軍 5－3 西軍	○東軍 11－0 西軍	滋賀県長浜市
26	99	東軍 3－5 西軍○	○東軍 1－0 西軍	滋賀県長浜市
27	2000	東軍 1－7 西軍○	○東軍 3－2 西軍	兵庫県西宮市
通算成績		東軍の14勝13敗	東軍の23勝4敗	

② 全日本女子短期大学ソフトボール大会の記録

回	開催日	会場	大会成績		参加数
1	H7. 9. 2・3	学習院大学	優勝 準優勝 第3位 第3位	淑徳短期大学 東京女子体育短期大学 鳥取女子短期大学 関西外国語大学短期大学部	15
2	H8. 8. 29・30	学習院大学	優勝 準優勝 第3位	東京女子体育短期大学 淑徳短期大学 関西外国語大学短期大学部	15
3	H9. 8. 29・30	日本体育大学	優勝 準優勝 第3位 第3位	大阪国際女子短期大学 鳥取女子短期大学 東海女子短期大学 大阪成蹊女子短期大学	17
4	H10. 8. 20・23	日本体育大学	優勝 準優勝 第3位 第3位	大阪国際女子短期大学 東海女子短期大学 関西外国語大学短期大学部 大阪成蹊女子短期大学	15
5	H11. 8. 20・22	日本体育大学	優勝 準優勝 第3位 第3位	大阪国際女子短期大学 愛媛女子短期大学 関西外国語大学短期大学部 東海女子短期大学	12
6	H12. 8. 18・20	明星大学	優勝 準優勝 第3位 第3位	淑徳短期大学 大阪国際女子短期大学 関西外国語大学短期大学部 大谷女子短期大学	11
7	H13. 8. 24・25	明星大学	優勝 準優勝 第3位	淑徳短期大学 大阪国際女子短期大学 愛媛女子短期大学	7

優勝：淑徳短期大学3回、大阪国際女子短期大学3回、東京女子体育短期大学3回。

3 国際大会への参加

大学男子の国際交流のあゆみと今後の課題

理事 吉 末 和 也（関西大学）

I 全日本大学ソフトボール連盟 大学男子の国際交流事業の経緯

全日本大学ソフトボール連盟男子の国際交流は、今から17年前の1998年に遡り、事業が始まるまでの経緯は、以下のとおりである。1990年に関西学生ソフトボール連盟（会長一谷宣宏氏）が学校法人園田学園を母体として運営している日本オセアニア協会（会長一谷宣宏氏）とタイアップし、ニュージーランドソフトボール協会（専務理事 ジョン・ボイル氏）を窓口として女子の相互交流がはじまった。1990年2月に関西学生ソフトボール連盟女子選抜チームをニュージーランドに派遣し、そこから2年ごとに相互交流を実施した。1992年、1996年にはニュージーランドの女子クラブチームを受入れ交流試合、交歓会、ホームステイプログラムなどを実施した。1994年には、関西学生ソフトボール連盟女子選抜チームを派遣し現地トーナメントに参加するなど、関西学生ソフトボール連盟とニュージーランドソフトボール協会との間で積極的な国際交流事業が行われていた。

その後、関西学生ソフトボール連盟会長の一谷宣宏氏が全日本大学ソフトボール連盟の副会長に就任されたが、当時、全日本大学ソフトボール連盟においては、女子学生は、大学連盟の選抜チームで国際大会に出場する機会があったが、男子学生は、大学連盟として参加できる国際大会や交流事業が一切なかった。そこで一谷氏の発案で、男子学生に国際交流の機会を提供するために、関西学生ソフトボール連盟（女子）と日本オセアニア交流協会のタイアップ事業で行っていたニュージーランドとの国際交流事業を全日本大学ソフト

ボール連盟の男子国際交流事業に移行し、男子選抜チームをニュージーランドに派遣してはどうかという提案があり、理事会で承認されることになった。

そこで、当時、学校法人園田学園の事務職員であり、日本オセアニア協会の事務を兼務していた吉末（現関西大学職員・同大学ソフトボール部監督）は、全日本大学ソフトボール連盟の理事（国際交流担当）に就任し、男子の国際交流事業を推進することになった。

そして、ニュージーランドソフトボール協会役員で日本との親交の深かったレスター・ボールドウィン氏に大学男子選抜チームのニュージーランド遠征の話を持ちかけ、受入れが了承され、1998年2月に第1回全日本大学ソフトボール連盟男子選抜チームニュージーランド遠征が実現することになったのである。

II ニュージーランド遠征の概要

1. 目的

ニュージーランド遠征は、全日本大学ソフトボール連盟加盟男子大学から選手を選抜し、世界のソフトボールでもっともレベルが高いといわれているニュージーランドを訪問し、交流試合、ホームステイを通じて現地での人的交流・親善を深め、ソフトボールの技術向上を目指すものである。これにより、大学の枠を越えた学生交流の充実、国際交流及び相互理解を深めることを目的とする。

2. 事業内容

① 事前オリエンテーションの実施

団員紹介、大学代表としての心構え、遠征

の概要説明、ニュージーランド国の説明、旅行の手続き、用具分担、ホームステイの過ごし方等

- ② 親善試合及びトーナメント試合（10試合程度）
- ③ ニュージーランド代表選手のソフトボールクリニックの開催
 - ・マーク・ソレンソン等の代表選手によるクリニック
- ④ ティー・ボール大会（5歳～8歳）、ルーキーリーグ（9歳～12歳などの試合見学）、ジュニアチームの指導
- ⑤ ホームステイプログラムの実施
 - ・選手は、現地チームの家庭でホームステイを体験
 - ・ホームステイ家族が集まっての交歓パーティーの開催
- ⑥ 異文化体験プログラムの実施
 - マラエ（マオリ族の集会所）での宿泊、現地チームとの交歓会、観光（マオリ村の訪問、土ボタル観察、ティカポ湖観光、ロトルア観光、カヤック体験、植物園、博物館訪問など）
- ⑦ ニュージーランドソフトボール協会、ハットバレー市、日本領事館等への表敬訪問
- ⑧ 遠征報告会、遠征報告書の作成

Ⅲ ニュージーランド遠征の実績

1998年から2014年まで以下の6回のニュージーランド遠征事業を実施し、127名の学生が参加した。

第1回大学男子選抜チームニュージーランド遠征（1998年2月5日～16日）

主な訪問地：オークランド

スタッフ：5名 参加学生：25名

大会：ディーン・シットーナメント

第2回大学男子選抜チームニュージーランド遠征（2002年2月7日～18日）

主な訪問地：ウエリントン、ロトルア、オークランド

スタッフ：6 参加学生：21名

大会：親善試合（ウエリントン、オークランド）

第3回大学男子選抜チームニュージーランド遠征（2006年2月7日～18日）

主な訪問地：マヌアツ、ロトルア、タウランガ、オークランド

スタッフ：6名 参加学生：20名

大会：親善試合（4都市）

第4回大学男子選抜チームニュージーランド遠征（2009年2月12日～22日）

主な訪問地：ウエリントン、ホークスベイ、オークランド

スタッフ：5名 参加学生：22名

大会：親善試合（ウエリントン、オークランド）

第5回大学男子選抜チームニュージーランド遠征（2012年2月12日～24日）

主な訪問地：ウエリントン、オークランド

スタッフ：5名 参加学生：22名

大会：ナショナル・ファーストピッチトーナメント（5位）

第6回大学男子選抜チームニュージーランド遠征（2014年2月9日～21日）

主な訪問地：クライストチャーチ、オークランド

スタッフ：4名 参加学生：17名

大会：ナショナル・ファーストピッチトーナメント（7位）

Ⅳ 事業評価

第1回から第6回までの遠征で合計127名の選手をニュージーランドに派遣したが、参加した学生は、世界のトップレベルのソフトボールに触れ、ホームステイや現地チームとの交歓会などを通して、地元住民の温かいホスピタリティのもと、人的交流を図ることができた。また、平均12日間という海外遠征で寝食を共にし、心をつにして戦うことで加盟大学から集まった学生間の絆が生まれ、普

段の生活では味わうことのできない感動を得て帰国していることは、学生の遠征報告書の中から読み取ることができる。

第1回遠征では、ニュージーランドのトップレベルのトーナメント試合であるディーン・シック・トーナメントに参加し、全敗してしまうという苦い経験をしたが、第5回遠征では、ニュージーランドの各地区の代表チームが参加するナショナル・ファーストピッチトーナメントに参加し、日本チームは5位という戦績を収めることができ、日本の大学男子のレベルが徐々に上がってきていると評価することができる。

参加した学生は、帰国後も単身でニュージーランドを訪問し、現地クラブチームでプレーしたり、大学卒業後は、日本リーグに所属し日本代表選手として活躍したりする選手も増えている。

また、卒業後は、中・高等学校や大学の教職員としてソフトボール部の指導にあたっている者もあり、この海外遠征の経験で得たことを次の世代に伝え、現場で生かしてくれることが期待できる。

V 今後の課題

大学男子国際交流事業の課題としては以下の点が挙げられる。

(1) スタッフの負担増

この遠征は、まさに「手づくり」であり、現地協会との交渉から、募集・選考・オリエンテーション、旅行会社との交渉、現地での引率まで、遠征にかかる準備から実施まで数名のスタッフでこなす必要があり、スタッフの負担が大きい。また、遠征中に有事が発生した場合に動くことのできるスタッフ（通訳など）が不足しているが、予算との兼ね合いもあり課題として積み残している。

(2) 選考方法の見直し、全体オリエンテーション、合同練習・合宿などの必要性

第1回から第6回の遠征まで、全日本大学

ソフトボール連盟の加盟校から参加希望者を募り、遠征担当スタッフ及び連盟役員で書類選考を行い、参加選手を決定してきたが、ニュージーランドのトップレベルで互角に戦うには、大学のトップレベルの選手を選抜できるように選考方法を見直す時期に来ている。また、参加選手は、地区に分けてオリエンテーションを実施しており、出国する空港で初めて全員と顔を合わせることになるので、遠征前に一同に会してのオリエンテーションや合同練習が必要であることは認識しているが、連盟予算と参加学生の経済的負担の都合上、実現されていない。

(3) 遠征先でのスタッフ・選手の負担増

(1) と重なる部分もあるが、航空運賃の値上がり、燃料サーチャージの負担、現地の物価上昇などの要因が重なり、遠征費用が膨らんでしまうので、総額費用を抑制するためには、現地活動費を削減せざるを得ない状況にある。そこで、遠征の宿泊先での食事は、朝・夕ともに自炊にして、日本から炊飯器を持込んだりしている。こうしたやり方は、選手同士の横のつながりを深めるという効果も期待できるところもあるが、役員、選手の負担が大きすぎることも問題であると認識している。トーナメントに入ると試合が夜遅く（PM9時程度）まで行われることもあるが、役員・選手は、宿舎に戻ってから食料を買出し、調理をすることになる。また、選手は、そこからユニホームの洗濯などがあるため、就寝できるのは深夜になるケースも散見された。異国での慣れない環境の中で学生、役員ともに負担が大きすぎるので健康管理、安全管理の側面からも改善すべき課題であると考えている。

VI 将来展望

第1回遠征がはじまってから17年の年月が経とうとしているが、第1回遠征（1998年）と第6回遠征（2014年）を為替で比較すると

第1回遠征時は1NZ\$60円台であったが、第6回遠征では、1NZ\$90円台となり、経済情勢だけでもかなり変化している。今後も同事業を継続させることを考えると、上述の課題解決を含めて、選手の選考方法、遠征プログラムの内容、予算措置などの事業計画全般にわたって見直す時期にきていると考える。また、グローバル化が進展する中で、学生にソフトボールを通じて国際感覚を身に付けさせることや今後のソフトボールの普及と発展を考えると、選抜メンバーでの海外遠征を企画すること以外にも、JAICA（国際協力機構）と連携し、学生を一定期間途上国に派遣することや計画的に海外からチームを招聘することなどが考えられよう。

さらに大学連盟が主催する大会に海外遠征で得たノウハウ等を大会運営に生かし、大会をより充実したものにしようとするれば、全日本大学選手権大会の試合方式の見直しと会場を聖地化する方向性を模索することが望ましいと考えられる。ニュージーランドの主要な大会は、予選リーグと決勝トーナメントが組まれている。また、下の写真のように会場のバックネットの一部に強化ガラスがはめ込まれ、後ろから観戦すると投手とバッターとの力と力の勝負をよりリアルに体感できたり、

試合会場でコメンテーターが試合の実況を放送したり大会を盛り上げる工夫が随所に見られる。

大学連盟が主催する大会も国内外で開催されるソフトボール大会のノウハウを吸収し、ハード面とソフト面を計画的に充実させていくことを考えると持ちまわり開催よりも会場をある程度固定的に運用していく方が、大学ソフトボールの魅力づくりにもつながっていくと考えられる。

最後に、大学連盟の国際大会への参加や今後の国際交流事業の発展的な展開を考えると、ソフトボールに精通し、語学（英語）運用能力に優れた人材を発掘していくことも重要であると考えられる。



Fraser Ball Park（ニュージーランド、ハット・バレイ市）

全日本大学ソフトボール連盟の女子選抜チームの国際大会への参加

全日本大学ソフトボール連盟の女子選抜チームの国際大会への参加は、記録をみると1992年のブラジル遠征が初めてのようである。それ以前は、日本ソフトボール協会からの海外派遣で、1972年女子大学ワールドシリーズ、1985年ハーレムソフトボールウィークワール

副理事長 久保田 豊 司(大阪国際大学)

ドゲームズ、1985年ハワイ大学招待試合、1986年第2回セランゴール国際チャンピオンシップが記録されている(全日本大学ソフトボール連盟創立30周年記念誌より)。

- ・1992年：第1回ブラジル遠征
- ・1995年：第2回ブラジル遠征

- ・2000年：オーストラリア遠征
- ・2003年：第8回アジア女子選手権大会※¹
- ・2004年：第1回世界女子大学ソフトボール選手権大会（アメリカ：プラントシティー）
- ・2004年：第3回アジア女子ジュニアソフトボール選手権大会（韓国：仁川）
- ・2006年：第2回世界女子大学ソフトボール選手権大会（台湾：台南）
- ・2007年：第24回ユニバーシアード競技大会（タイ：バンコク）
- ・2009年：第8回ワールドゲームズin高雄（台湾：高雄）※²
- ・2010年：第3回世界女子大学ソフトボール選手権大会※³
- ・2010年：台湾遠征
- ・2011年：シンガポール遠征
- ・2012年：第1回東アジアカップ（韓国：大邱）
- ・2013年：第2回東アジアカップ（日本：岐阜県揖斐川町）
- ・2014年：第3回東アジアカップ（中国：広東）

※1：SARS（重症急性呼吸器症候群）流行に伴い開催延期となり、日本代表して編成された大学生選抜チームは幻となる。

※2：第2のオリンピックともいわれ、オリンピック競技種目に採用されてない種目の総合競技大会であり、夏季オリンピック競技大会の翌年に開催される。

※3：参加国の不足により開催中止となり、台湾遠征を実施する。

今回のテーマから、大学連盟の海外遠征を振り返ってみると、そこには長い道のりを得て実現された経緯があった。これからの時代を担う学生たちに、「国際社会を経験させたい」・「異文化を体験させたい」・「国際交流を肌で感じさせたい」等、指導者の強い思いが感じ取れた。2回実施されたブラジル遠征報告書からは、学生たちは指導者の強い思い

以上に、異文化体験・異文化交流が実感できたようである。また、遠征の体験を糧として「今後も一生懸命頑張りたい」「この経験を生かしていきたい」等の感想が多くみられた。これが、国際化の第一の波である。

次に、第二の波は海外遠征から国際大会への参加である。ターニングポイントは、女子のソフトボール競技が1996年アトランタオリンピックから正式種目に採用されたことが最も大きな要因であろう。大学連盟も各種国際大会に参加し、大学女子の日本代表チームは、FISU主催の競技別世界選手権が実施された第1回世界女子大学ソフトボール選手権大会（2004／アメリカ・プラントシティー）・第2回大会（2006／台湾・台南）・第24回ユニバーシアード競技大会（2007／タイ・バンコク）の世界大会において全て3位銅メダルの結果を残している。そして、大学女子日本代表チームは、ついに第8回ワールドゲームズ2009 in高雄の大会で念願の金メダルを獲得したのである。この期間、筆者は大学女子の日本代表チームの監督・コーチとして、また日本ソフトボール協会の強化委員として大学女子日本代表チームに関わっており、ワールドゲームズのファイナル終了後に、当時の大学連盟理事長の兵庫県立大学末井先生、日本ソフトボール協会女子強化委員長の東京女子体育大学吉野先生と、これまで歩んできた国際大会への思いが筆者の頭の中を過ぎったことを今でも鮮明に覚えている。

●第1回世界大学女子ソフトボール選手権大会

団 長：戸津 孝（日本ソフトボール協会）
副団長：末井健作（兵庫県立大学、全日本大学ソフトボール連盟理事長）

ヘッドコーチ：吉野みね子（東京女子体育大学）

コーチ：久保田豊司（大阪国際大学）

細田きみ子（東京女子体育大学）
 総務：藤井まり子（日本ソフトボール協会）
 トレーナー：金城充知（日本ソフトボール協会）
 帯同審判員：鎌田恵雄（日本ソフトボール協会）
 投手：金尾 和美（日本体育大学）
 五島 麻美（日本体育大学）
 後藤真理子（淑徳大学）
 松村 歩（大阪国際女子大学）
 中村 祐子（東京女子体育大学）
 捕手：小森 由香（日本体育大学）
 鮫島 憂子（園田学園女子大学）
 藤崎由紀子（東北福祉大学）
 内野手：小幡 麻由（日本体育大学）
 鈴木 紅美（日本体育大学）
 鈴木 優子（中京大学）
 酒井かおり（東京女子体育大学）
 竹野 友貴（東京女子体育大学）
 宮下 絵美（東京女子体育大学）
 外野手：古渡 美奈（東京女子体育大学）
 道音 貴子（東京女子体育大学）
 白井 沙織（日本体育大学）

●第2回世界大学女子ソフトボール選手権大会

団長：甲佐清久（日本ソフトボール協会）
 副団長：末井健作（兵庫県立大学、全日本大学ソフトボール連盟理事長）
 ヘッドコーチ：舟山健一（東北福祉大学）
 コーチ：久保田豊司（大阪国際大学）
 総務：木田京子（園田学園女子大学）
 トレーナー：鈴野智子（グローバルスポーツ医学研究所）
 帯同審判員：押野稔（日本ソフトボール協会）
 投手：藤原麻起子（東北福祉大学）
 上村さつき（大阪大谷大学）
 竹川 裕香（福岡大学）
 成田 春菜（富士大学）
 山口 憲子（園田学園女子大学）
 捕手：鹿島 唯（日本体育大学）

村中 梢（東北福祉大学）
 内野手：鈴木 紅美（日本体育大学）
 高橋あゆみ（日本体育大学）
 池原 恵（園田学園女子大学）
 小柳 薫（東京女子体育大学）
 加藤 恵理（東北福祉大学）
 内田千恵美（早稲田大学）
 外野手：中野 久美（東京女子体育大学）
 西川 友理（東京女子体育大学）
 平林真由子（園田学園女子大学）
 舟木千恵（大阪国際大学）

●第24回ユニバーシアード競技大会（2007／バンコク）

チームリーダー：末井健作（兵庫県立大学、全日本大学ソフトボール連盟理事長）
 ヘッドコーチ：久保田豊司（大阪国際大学）
 コーチ：舟山健一（東北福祉大学）
 木田京子（園田学園女子大学）
 総務：藤井まり子（日本ソフトボール協会）
 トレーナー：篠崎仁美（日立製作所）
 ドクター：山下義則（香川県白鳥病院附属津田診療所）
 投手：高橋 真弓（東北福祉大学）
 上村さつき（大阪大谷大学）
 重藤恵理佳（日本体育大学）
 山口 憲子（園田学園女子大学）
 捕手：鹿島 唯（日本体育大学）
 渡邊 華月（園田学園女子大学）
 内野手：高橋あゆみ（日本体育大学）
 池原 恵（園田学園女子大学）
 森田 涼（園田学園女子大学）
 小柳 薫（東京女子体育大学）
 加藤 恵理（東北福祉大学）
 井上 愛（東北福祉大学）
 佐々木 瞳（富士大学）
 外野手：城戸絵理沙（東京女子体育大学）
 森 さやか（東京女子体育大学）
 亀本 伊純（龍谷大学）
 岡本 由香（大阪国際大学）

●第8回ワールドゲームズ2009 in 高雄
ヘッドコーチ：久保田豊司（大阪国際大学）
コーチ：舟山健一（東北福祉大学）
木田京子（園田学園女子大学）
総務：人見いずみ（淑徳大学）
トレーナー：種田祥子（日本協会）
投手：長南 友子（東北福祉大学）
重藤恵理佳（日本体育大学）
西岡 里恵（園田学園女子大学）
捕手：石田 奈々（東北福祉大学）
岡田 佳織（山梨学院大学）
内野手：小柳 薫（東京女子体育大学）
西川 友理（東京女子体育大学）
井上 愛（東北福祉大学）
粕張 舞（東北福祉大学）
谷池 紫穂（園田学園女子大学）
森田 涼（園田学園女子大学）
外野手：森 さやか（東京女子体育大学）
田邊 奈那（環太平洋大学）
浜渦 聡美（環太平洋大学）
大村英利佳（大阪国際大学）

さらに、第三の波は日本ソフトボール協会と連携しての、オリンピック種目復活に向けての取り組みである。東アジアカップは、日本、中国、台湾、韓国の4ヶ国が参加して行われる国際大会として、オリンピック・アジア競技大会等と同じように、総合競技大会として開催されている東アジア競技大会でのソフトボール競技実施をめざし創設された大会である。また、東アジアからオリンピック競技復帰へのムーブメントを起こすことも狙いの一つであった。第1回大会は、各国がナショナルチームで参加する中で優勝を勝ち取り、初代チャンピオンとなった。第2回大会は日本で開催されたため、日本代表と大学女子の日本代表が出場し、大会取り決めにて日本の2チームのうち上位チームのみが順位に反映されることとなり、大学女子日本代表は日本代表に惜敗し予選2位の成績であったが

順位がつかずとなった。日本代表の上野投手相手の0-1のスコアは、世界でもトップレベルの力を有していることを証明した戦いでもあった。第3回大会は、各国のナショナルチームを撃破し、再び東アジアの頂点に立ち2年ぶり2度目の優勝を飾った。

●第1回東アジアカップ

団長：高橋伸次（高崎経済大学、全日本大学ソフトボール連盟理事長）

ヘッドコーチ：利根川勇（日本体育大学）
コーチ：但尾哲哉（神戸親和女子大学）
コーチ兼総務：三科真澄（東京国際大学）
トレーナー：大石益代（公財）日本協会
帯同審判：濱田良雄（公財）日本協会
投手：泉礼 花（園田学園女子大学）

長谷川朋子（中京大学）
平原かすみ（東京女子体育大学）
三木綾菜（日本体育大学）

捕手：澤井 美佑（日本体育大学）
妹山 玲奈（山梨学院大学）
内野手：岩見 香枝（日本体育大学）

日相馬満利（日本体育大学）
二階堂夏帆（日本体育大学）
山本紗耶加（東北福祉大学）
山本絵梨奈（東京女子体育大学）
亀井 愛梨（園田学園女子大学）
古澤 春菜（園田学園女子大学）

外野手：塚本 智名（中京大学）
永溝 早紀（環太平洋大学）
長谷川千尋（鈴鹿国際大学）
舛田妃美呼（山梨学院大学）

●第2回東アジアカップ

ヘッドコーチ：木田京子（園田学園女子大学）
コーチ：佐藤理恵（東京女子体育大学）
コーチ兼総務：二瓶雄樹（中京大学）
トレーナー：大石益代（公財）日本協会
投手：泉礼 花（園田学園女子大学）
井本 妃里（東京国際大学）
長谷川朋子（中京大学）

平原かすみ（東京女子体育大学）

捕 手：清原 奈侑（園田学園女子大学）

澤井 美佑（日本体育大学）

内野手：岩 嵯 楓（山梨学院大学）

岩見 香枝（日本体育大学）

二階堂夏帆（日本体育大学）

松畑 美希（日本体育大学）

中川なおみ（園田学園女子大学）

古澤 春菜（園田学園女子大学）

山本絵梨奈（東京女子体育大学）

外野手：川村可奈子（園田学園女子大学）

塚本 智名（中京大学）

土肥 里奈（山梨学院大学）

長谷川千尋（鈴鹿国際大学）

●第3回東アジアカップ

団 長：高橋伸次（高崎経済大学、全日本大学ソフトボール連盟理事長）

ヘッドコーチ：清水 正（山梨学院大学）

コーチ：長澤淑恵（城西大学）

コーチ兼総務：伊藤幸子（トヨタ自動車／中京大学）

トレーナー：末広美保（月ノ浦整体院）

帯同審判員：千葉敬徳（公財）日本協会

投 手：秋元 菜穂（東京女子体育大学）

池田 美樹（園田学園女子大学）

岡本 奈々（日本体育大学）

海部 栞菜（環太平洋大学）

酒井 彩好（山梨学院大学）

捕 手：平川 穂波（中京大学）

森田紀代美（山梨学院大学）

内野手：榎本 千波（城西大学）

亀井 愛梨（園田学園女子大学）

古澤 春菜（園田学園女子大学）

松畑 美希（日本体育大学）

山根すずか（東京女子体育大学）

山本絵梨奈（東京女子体育大学）

外野手：鈴木 茜（山梨学院大学）

田中 瑠莉（園田学園女子大学）

塚本 智名（中京大学）

村上ほのか（山梨学院大学）

スポーツは、勝負にこだわる「競争的要素」と、楽しく身体を動かす「遊戯的要素」とを本質的に持っており、この両極端な要素がスポーツを成立させる条件でもある。また、スポーツは単に勝敗を競うことだけでなく、そこから学び、人間の成長の糧とできることから、スポーツが文化として発展してきた歴史がある。

大学連盟として第四の波を起こすには、国際化に対応ができる競技的側面と教育的側面の位置づけを構築すること、すなわち、そのキーワードとして「継続と強化」・「情報と科学」・「協力と強化」・「連携と調整」・「育成と経験」・「教育と普及」が挙げられる。近年、大学卒業後に日本リーグチームに就職して、ソフトボールを継続し1年目からリーグで活躍している選手も多くみられ、国際大会の参加による競技的側面の効果は計り知れないものがある。一方、教育的側面の価値は、何によって計れるのであろう。ここで第1回ブラジル遠征報告書から、大内団長の言葉を紹介すると「今般の遠征では、本当に心暖まる数々の歓迎を賜りましたが、私はこの感動を決して忘れることなく、今後伯国のみならず、諸外国のチームを受け入れる場合に必要なのは、心のこもった暖かい歓迎であり、決して形式的な儀礼ではいけないことを再認識いたしました。」、この内容は、ソフトボールはキャッチボールが大事なように、人間は人と人とのふれあいから相手のことを思いやる気持ちを持つこと、心遣いが大切であることを示唆しているように思えるのである。経験した者でしか実感できないこと、コミュニケーションから感じ取らなければいけないこと、そこには、教育的価値が溢れているのである。これからの学生は、国際大会、国際交流、大学生活で経験したことを次世代に伝え継ぐ「メッセンジャー」として、幅広く活

躍することであり、また、それぞれの国の文化を知り、人種や民族、国家という枠組みを超えて大勢の人たちと交流を持つことで、「日本のルール」だけでなく「世界のルール」で物事を考えなければいけない必要性を肌で感

じ、ソフトボールの強化、普及・発展のために役立つことではないだろうか。

最後に、本連盟の発展のために、ご指導、ご支援を頂きました関係各位の皆様にご心から感謝を申し上げます。

国際大会参加経験のあるOB・OGの全日本学連への期待

伊 藤 幸 子（中京大学1998年3月卒業）

この度は、全日本大学ソフトボール連盟創立50周年を迎えられ、誠におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。関係者の皆様もさぞお喜びのことと存じます。1966年の創立以来、多くの困難を乗り越え、今日を迎えられたのは、ひとえに連盟関係者の方々の熱い思いによるものだと感じています。この熱い思いをこの先、10年後、20年後も絶やさず続けていかなければと思います。

私は、2008年北京オリンピックに日本代表選手として出場しました。私たち日本代表チームは、苦しい試合が続きましたが、最後まで日本らしく戦い抜くことができました。チームでこのような戦いができたのは、国際大会へ参加させて頂いた時に、「日本のソフトボールが世界中の人たちに愛されている。」と実感することができたからです。私たちにとって大きな自信でした。日本の礼儀正しい姿勢、そしてスピード感あふれるプレー、常に全力疾走する姿を、世界中の人たちが愛してくれていました。この姿勢を大切に伝え続けてくれた指導者の方々や、先輩の方々がいたからこそ、私たちもこの姿勢を学ぶことができ、最後まで自信を持って日本らしく戦い、北京オリンピックでは金メダルを獲得することができたと感じています。

国際大会では、気候や食事等、普段と違った環境の中でプレイをすることになります。こういった環境の違いの中で力を出し切るために、どうすればいいか。個々でよく考えることが大切です。大学でソフトボールを学ぶ学生にも同じことが言えますが、今までと違った環境の中で力を出し切るためにはどうすればいいか、学生は色々な場所で学ぶことができます。チームの中で学ぶことはもちろんですが、グラウンドだけではなく、学校の授業の中、先生との会話の中、寮生活の中、友達との会話の中に、たくさんのヒントがあります。本気になって学ぶことで、やるべきことに気づき、実行することで、それぞれの力を出し切る事が出来るようになります。学生一人ひとりが本気になって学び、日本代表として国際大会で、更に国際社会で活躍することを期待しています。

今後も魅力ある大学ソフトボールにしていくためには、学びの中で学生が必死に習得した心・技・体を、十分に発揮できるように、各地区大会、また歴史ある東日本インカレ、西日本インカレ、全日本インカレの試合環境等を整えていく必要があると考えます。また、観客の方にも楽しんでいただけるような努力をしていきます。

これからも、全日本大学ソフトボール連盟のますますのご発展を心からお祈り致します。

増 淵 まり子（東京女子体育大学2002年3月卒業）

大学ソフトボール連盟創立50周年おめでとうございます。

その長い歴史の中で1998年～2001年の4年間を東京女子体育大学に在籍し、2000年シドニー五輪には大学3年生で出場、銀メダルを獲得しました。20歳で日の丸を背負うということはとても大きな重圧でしたが、実業団の選手だけではなく、大学生でもこれだけできるんだというところを見せられるチャンスだと思いましたし、私自身のプライドもありました。大学を代表して出場するという事、そして大学生の代表として出場するという事、そして全日本の選手である前に東京女子体育大学ソフトボール部のエースであり、今この場にいる事が出来るのも自分のチームがあってこそであるという感謝の気持ち、そんな色々な想いを胸にシドニー五輪のマウンドへ立ちました。そう思う事が出来たのも、そう思わせてくれる大学のチームメイトに恵まれたからだと思っています。部活の時間外である昼休みに快くピッチングを受けてくれたり、休みの日でも練習を手伝ってくれたり、時にはグラウンドで本気で喧嘩したりと、本気で向き合ってくれる仲間がいたからこそだと思っています。

大学4年間で世界選手権や様々な国際大会に出場してきましたが、やはり私が一番思い出に残るのは大学でのチームメイトとの思い出であり、それが私自身を成長させてくれる種であったのだと思います。目標であった全日本大学選手権4連覇を達成しましたが、今感じることは、優勝したからといってその結果が今に活きているわけではないという事。それよりも、その目標に向かってチームメイトと本気で向き合えたこと、このプロセスこそが私自身が得た何よりも大きな財産であったと思っています。

大学は実業団とは違いプロではありません。だからこそ自発的に行動することの大切さを学ぶ事ができる大切な学び舎であると思っています。

人は出会いから始まると言われています。大学ソフトボールというスポーツに出会えたことで素晴らしい人生を歩める人が少しでも増えるよう、大学ソフトボール界を支えられるよう、微力ではありますが尽力していきたいと思っています。

最後に、この大学ソフトボール連盟がこの節目を機により一層の輝きをはなちながら発展されますよう期待しております。

中 島 幸 紀（早稲田大学2006年3月卒業）

『大学生活4年間の中で、印象に強いソフトボールにおける思い出は何ですか？』と尋ねられたら、間違いなく2005年9月5日群馬の安中で開催されたインカレであろう。1～3年時の大会までのインカレでは、優勝候補にあげられながら惜敗し、悔し涙で大会を終えていた。中学、高校と共に過ごした同級生でもある新井主将を中心に、早稲田大学ソフトボール部40周年という節目の年に、初優勝を是が非でも僕らの代で目標達成しようと挑んだ。インカレ5試合では今までの鬱憤を晴らすかのように計49得点をあげ、終わってみれば圧倒的勝利だった。大会前から下馬評では断トツの優勝候補と言われ、裏を返せば勝って当たり前というプレッシャーと日々戦っていた。思いよこせば大学2年生の時、当時最強チームと言われていた日体大に私自身が決勝で投げたが敗れ、準優勝という結果に終わった。大会直前まで、決勝宿敵日体と対戦した場合、4年生の石橋先輩と2年生である私とどちらを先発させるか、監督を含めスタッフ一同、決勝戦当日の明け方まで悩みに悩んでいたらしい。みんなの期待を背負い、満を持して臨んだ決勝戦。最後の最後まで、先輩とエースの座を競い合っていたせいかわからないが、大会中、ずっと調子が上がらずにいた。それでも、勝たないと申し訳ないという気持ち一心で投げ続けていた。2本のホームランを打たれ、完敗し、当時のキャプテン佐川さんと石橋先輩に泣きながら、『絶対にインカレでこの悔しさを晴らし優勝をします』と約束した。そして、月日は経ち、両親をはじめ、今まで早稲田大学ソフトボール部を支えてきてくださった吉村総監督、先輩方、同じ目標を掲げ日々一生懸命にともに戦ってくれたチームメイト達に深く感謝の意を持ちながら、最終インカレに臨んだ。決勝では、代打、守備交代等で4年生全員が同じフィールドに立ち、全員出場を果たすことができた。このメンバーで決勝のグラウンドに立ち、勝つことができ本当に嬉しかった。大好きなメンバーで大好きなソフトボールをすることができ、幸せ者であった。

社会人になる前の貴重な大学生活。年々、運動部を含む課外活動に参加する学生の割合は次第に減少し、文武両道するには相当の努力が必要となってくるであろうと思います。そうした状況の中でも、オリンピック復活を機にソフトボールという競技がますます発展していくことを願っております。

松 田 光（京都産業大学2009年 3 月卒業）

私はこれまで幾つかの国際大会に参加させていただきました。その中で私が感じたことについて書かせていただきます。

まず、現在日本チームは世界選手権で4大会連続で5位という順位に甘んじています。世界3強と言われるNZ、オーストラリア、カナダの3ヶ国に加え、中南米のベネズエラ、アルゼンチン、ドミニカが力をつけてきており、私はこのままでは日本の世界的順位も今後どんどん落ちてきてしまうと危惧しています。

その理由は各国のトッププレイヤー達は北半球、南半球のどこかで所属チームを変え、常にソフトボールをやっているのに対し、日本の選手は日本国内でしかプレイをしていないのが現状なので、他国に比べ圧倒的に情報、そして相手に対しての慣れという部分が足りないというのが現状だからです。

日本国内では120キロを超えるピッチャーは速いと言われますが世界のトップになると130キロ超えはざらで140キロ投げるピッチャーもいます。その時に必要になってくるのが130キロを超える球に対しての経験があるかないかで対応が変わってきます。世界のバッターは体が日本人より大きく、腕が長くパワーがあるという身体的な差をよく言われますが、私が日本と1番違うと思うのはフォアザチームの精神だと思います。NZのチーム作りを例にあげますと、代表メンバーが決まったらまず監督、コーチを含め、みんなで山に行き、キャンプを行います。キャンプをというのもソフトボールの何かをする訳ではなく、テントを張り、自炊をし生活を共にすることで仲間になり、家族になろう。団結力ができないとソフトボールを握らないという私達のイメージとはちょっと違うようなチーム作りをしています。

その経験という部分が世界で日本が勝てない原因に直結していると私は感じています。

社会人になると、仕事とソフトボールの両立が難しい部分が出てくるで、時間の融通が利きやすい大学生のうちにどんどん海外に出て日本以外のソフトボールというものを学んで視野を広げ、世界のトッププレイヤーに近づき、追いつき、追い越していけるような選手になり世界選手権でメダルを獲得できるような選手になってもらいたいと思います。

高 橋 速 水（日本体育大学2010年 3 月卒業）

私の国際大会参加は、高校1年時のオーストラリア遠征から始まりました。当時のオーストラリアの選手の中には、現在オーストラリアのエースであるアダム・フォーカードがいて彼の投球を見て衝撃を受けまし

た。この時、日本と世界の差を痛感しました。高校2年時でも、ソフトボール大国であるニュージーランドへ行き、高校3年時は、カナダで世界ジュニア選手権大会があり決勝はオーストラリアに負けて準優勝で終わりました。高校時代、大学時代、社会人になっても国際大会に参加させてもらい様々な経験ができました。

国際大会、海外遠征に参加した選手にしかわからない国際試合特有の審判のジャッジ、グラウンド状況、相手投手の投げ方、スピード・変化球のキレ、相手打者の打ち方、守り方など日本との違いに、いかに少ない期間で適応できるかが必要な能力になります。また、国際大会では、必ずアナウンスがあり、イニングの間には音楽が流れ、テレビ放映があり、観客はグラウンドにある店で、飲み物や食べ物を購入しスタンドで食べながら観戦しています。ホームランや良いプレーが出ると、国を超えて声援を送ってくれます。また、海外では、各クラブチームが主催し、参加チームから参加費を募り、優勝チームに賞金を出している大会もあります。

大学時代は、ジュニアのメンバーの多くが学生で選手みんなが各チームの核となって活躍してて、各リーグ戦、各種大会のレベルが高く勝ち抜く事が至難でした。この頃から、大学JAPANの海外遠征が始まり、アメリカの大会やニュージーランドでの大会に参加し大学生のレベルは向上したと思います。遠征も同じ選手が行くことも大事ですが、できるだけ多くの選手に国際大会や海外遠征を経験してもらい、各チームに持ち帰って、伝えていく事がとても大事になると思います。現在でも年に1回はニュージーランド等に遠征を行っていることは日本のソフトボール界に良い影響を与えています。

国際大会、海外遠征、に参加することで精神的、肉体的にも鍛えることができます。できることなら毎年海外遠征を行ってほしいです。世界ではソフトボールの普及・発展のために様々な大会を行っているため、大会に参加するなど、また日本でも国際大会を行う必要があります。

現在は、大学へ行きソフトボールを行う生徒が減少しているような気がします。全日本大学ソフトボール連盟のサイトも今よりもっと発展させ、各大学の宣伝、ソフトボール部の発信をSNSなどで行い、少しでも多くの人に見てもらい、会場へ足を運んでもらうことが大事だと思います。今後のますますのご発展を祈念いたします。



4 ソフトボール競技の変遷 ～ルール改正からみた競技の改良と変遷～

① 主なルール改正（下表）

年	事 項
1971	アマチュア規定の改訂。金属バット検定の開始。
1976	延長戦(14回)で勝敗が決しない場合引き分け抽選(9人による抽選)方式を採用 金属バット販売にSGマーク貼付を義務化
1978	ランナーがベースに達しようとしているとき、野手は必ずベースの前縁の一部を空けなければならない。
1980	延長2回(9回)で決着がつかない場合は9人による抽選方式 DH制、再出場制を採用
1981	打者のヘルメット着用が義務化
1985	インサイドプロテクターの採用。審判・捕手のマスクにスロートガード着用義務化 タイブレーク制採用
1987	打者・走者・捕手のヘルメット着用義務化
1994	ISF基準の新革ボール検定(いわゆる飛ぶボール;平成7年度公式使用・決定)
1997	一塁ベースをダブルベースに
2002	外野フェンス距離(ISF):女子220フィート(67.06m)、男子250フィート(76.20m) 投手板から本塁までの距離:女子43フィート(13.11m)
2003	ベンチ入り25名、5回得点差10点コールド制を採用。DP/指名選手制を採用
2005	5回得点差7点コールド制を採用
2007	監督・主将会議を監督会議に改定。
2010	試合球をイエローボールに改定。
2013	得点差コールドゲームの改正:3回15点、4回10点、5回以降7点。故意四球制の採用
2014	大会時での公認指導者資格証明書の携行義務化
2015	テンポラリーランナー制を採用

② ルール改正によるソフトボール競技の改良点

ルール改正の基本的な特徴は、大きくは3つある。まず第一は、安全面での改良である。ここには、用具・防具の改良から競技プレイ中での安全確保までが含まれている。例えば、金属バットの検定、ヘルメット、プロテクター、スロートガードなどの着用である。また、競技プレイにかかわっては「ベースの前縁の一部を空ける」(1978年)、ダブルベース(1997年)さらには指導者資格制度などがある。

第二は、試合時間の改良(短縮)である。例えば、7回同点後の引き分け時での決着方

式、タイブレーク制(1985年)がある。また、2003年からはコールド制の改良が継続的に進められた。現在、3回、4回、5回にそれぞれ得点差が規定されている。競技プレイにかかわっては、故意四球(2013年)やテンポラリーランナー制(2015年)が採用された。

第三は、競技内容の改良である。例えば、DH制や再出場制(1980年)であり、DP/指名選手制(2003年)である。ボールに関しては、ISF基準の新革ボール(いわゆる飛ぶボール)の採用(1994年)があり、それによって2002年には外野フェンスの距離が延長された。また、女子のみ投手板から本塁までの距離が延

長された。ただ、このボールの高反発に対応すべく、2010年にはボールはイエローボールに改定された。

③ 大学ソフトボール競技への影響

先の主要な3つの改良のうち、安全面や試合時間に関する2つの改良は、大学ソフトボール競技そのものに非常に大きな影響を与えたわけではない。むしろ、競技内容にかかわる改良が、試合内容や試合展開に固有の影響を及ぼした。

まず、DHや再出場制、DP/指名選手制については、少ない人数でもソフトボール競技を十分に楽しめるという意味で、多くの人たちにソフトボールを普及しうる効果を持った。また、少ないメンバーでも強いチームをつくれる条件にもなっており、大会参加チームの一定の競技レベルの引き上げ条件にもなっている。人数の少ないチームでも、選手の活用次第では試合展開に一定の影響を及ぼしうる。ただ、試合内容・展開が大きく変わったというわけではない。

むしろ、ボールやバットの改良、それにもなう外野フェンスまでの距離の延長さらには投手板・本塁間の距離の延長が、試合展開や試合内容に大きな影響を及ぼした。特に、高反発のボールと高反発の金属バットの使用は、まず投手に打球が直撃するといった安全面での問題を引き起こした。その結果、投手の守備力が新たに注目されることになった。次に、従来の外野フェンス距離では、特に男

子を中心にホームラン数が増加した。その対応策として、外野フェンスの距離は延長された。その結果、内野手と外野手の間に落ちるいわゆるポテンヒットが増えるとともに、レフト、ライトのフェンス沿い打球を中心に三塁打が増えた。左中間、右中間越えの打球では、ランニングホームランのケースも出ている。これは、特に大学男子選手のスピード豊かな走塁に起因しており、大学ソフトボール競技の特徴といえよう。

こうした影響以外に、大学女子ソフトボールについては、投手板・本塁間の距離が約1m延長されたことによる影響が出ている。この距離の延長分、よりスピードボールを投げる技術、打者の手元でのボールの変化をより効果的に活用する方法などが問われている。また、投手の守備面では、バンドを含めた投手前における守備範囲の広さとその俊敏性が新たに求められている。詳細は、舟山健一氏の「技術指導」(『ソフトボール・マガジン』2015No.469)を参照されたい。

2016年以降、従来の高反発バットは使用禁止になる(ISF国際大会ではすでに使用禁止になっている)。このため、低反発バットの使用はホームラン数を減らすことが予想される。ただ、こうした改正が、試合での二塁打、三塁打にどのような影響を及ぼすのか、試合展開に別の新たな影響をもたらすのかなど、不確定な部分は多い。いずれにしても、新たな技術的対応が求められるかもしれない。

5 各地区の50年の歩みと地区における後援大会

大学連盟創立50周年に添えて ―北海道・東北地区の現状と課題―

常任理事 大塚 健 樹(盛岡大学)

2015年度現在での加盟チームは、男子が北海道大学・北翔大学・弘前大学・八戸工業大

学・盛岡大学・東北大学・宮城教育大学・仙台大学・福島大学・日大工学部の10チーム、女子が北翔大学・弘前大学・富士大学・東北福祉大学・宮城教育大学・宮城学院大学・仙台大学の7チームとなっている。なお、2014年度まで加盟していた女子の盛岡大学が岩手大学との合同チームとなり2015年度は登録しなかった。加盟するチーム数は、ここ数年1～2の増減はあるものの、それほど変動なくきた。しかし、チームの内情を見ると、男子では数チームに、女子では富士大学・東北福祉大学を除く各チームが、部員数の減少に悩み、チームを存続させるために四苦八苦している状況となってきた。

北海道・東北地区のレベルアップと魅力づくりのために、多くの大会を開催し、活性化させていきたいとは思っているのだが、本地区はとにかく広く、集まって頻繁に大会を開くことが困難な環境にある。それを解決するために、ブロックごとに大会を開催していた時期もあったが、チームの所在地に偏りがで

き、継続が困難になったという経緯がある。そうした状況もあって、男子は、全国では初戦を勝ち上がることが困難であり、東日本大会でもは、ベスト8に勝ち上がれるかどうかという状況で、レベルの低下が著しい。

女子は、東北福祉大学が全国制覇をした時期もあったが、近年、競った試合はするが、全国で1回戦を勝ち上がることが厳しい状況になってきた。

このような状況を打破する妙案を今のところ持ち合わせていないが、各チームが積極的に、他の地区で行われているオープン大会に参加したり、練習試合を組むなどして、多くの試合経験を積むことが望まれる。そのことが結果的には北海道・東北地区の底上げになる。幸い、50周年を記念して、51回大会は、男女とも全国に出場できるチームが1つつ増えた。このことを契機に、内向きと言われる東北人気質を払拭し、各チームが外に出てチーム力の向上に努めるよう働きかけていきたい。

関東学生関係大会のここ10年を振り返る

常任理事 清水 正（山梨学院大学）

関東男子の勢力を過去10年間に絞り、振り返ってみる。詳細については次ページの表2-1. を参照していただきたい。

春季・秋季両I部リーグ戦において、国際武道大学が通算（ここ10年間）10勝と群を抜いているのがわかる。そのあとに、城西大学の5勝、関東学園が2勝、1勝で高崎経済大学、東京理科大学、文教大学と続いている。インカレの予選を兼ねた関東学生選手権大会においては、リーグ戦上位校に加え、東海大学がここ数年ベスト4に名乗りを上げており、今後の躍進が期待される。

しかし、東京都を含める関東大学選手権大会ならびに東日本大学選手権大会となると、東京都加盟大学に押され、両大会を通じて、決勝進出を果たしたことはあるものの、単独優勝は成し得ていない。それが、全日本大学選手権大会となると、その東京勢に加え、近畿勢と東海勢、さらには九州勢にまで押され、ここ10年間に一度もベスト4に進出できていないことがわかる。半世紀の節目にあたり、関東男子の全日本大学選手権大会での今後の活躍を期待したい。

一方女子は、表2-2. に詳細を示したが、こ

表2-1. ここ10年間の関東地区男子の大会成績

男 子			平成18年 (2006)	平成19年 (2007)	平成20年 (2008)	平成21年 (2009)	平成22年 (2010)	平成23年 (2011)	平成24年 (2012)	平成25年 (2013)	平成26年 (2014)	平成27年 (2015)
春季 リーグ 戦	Ⅰ部	優 勝	国際武道	国際武道	国際武道	国際武道	関東学園	東京理科	城 西	国際武道	城 西	城 西
		準優勝	東京理科	関東学園	関東学園	城 西	高崎経済	高崎経済	高崎経済	城 西	国際武道	国際武道
		3 位	城 西	東京理科	東 海	関東学園	東京理科	関東学園	国際武道	東 海	関東学園	東 海
	Ⅱ部	優 勝	文 教	茨 城	茨 城	筑 波	国際武道	千 葉	千 葉	東京理科	千 葉	関東学園
		準優勝	埼 玉	山梨学院	千 葉	千 葉	埼 玉	中央学院	文 教	茨 城	高崎経済	文 教
		3 位	都留文科	都留文科	都留文科	埼 玉	筑 波	文 教	中央学院	山梨学院	山梨学院	山梨学院
	Ⅲ部	優 勝	関東学園	日大生物	筑 波	山梨学院	中央学院	茨 城	茨 城	東京国際	埼 玉	筑 波
		準優勝	城西国際	城西国際	芝浦工業	芝浦工業	日大生物	日大生産	日大生物	日大生物	文 教	茨 城
		3 位	中央学院	芝浦工業	城西国際	日大生産	芝浦工業	筑 波	筑 波	埼 玉	筑 波	日大生物
秋季 リーグ 戦	Ⅰ部	優 勝	国際武道	国際武道	国際武道	文 教	関東学園	高崎経済	国際武道	城 西	城 西	際武道
		準優勝	東京理科	関東学園	東京理科	城 西	城 西	城 西	城 西	東京理科	国際武道	城 西
		3 位	城 西	高崎経済	東 海	東京理科	高崎経済	東 海	高崎経済	国際武道	東 海	東 海
	Ⅱ部	優 勝	関東学園	千 葉	千 葉	埼 玉	埼 玉	埼 玉	茨 城	都留文科	高崎経済	関東学園
		準優勝	埼 玉	日大生物	茨 城	筑 波	文 教	千 葉	都留文科	高崎経済	山梨学院	文 教
		3 位	都留文科	都留文科	都留文科	山梨学院	千 葉	中央学院	中央学院	茨 城	東京国際	東京国際
	Ⅲ部	優 勝	茨 城	筑 波	筑 波	中央学院	都留文科	茨 城	東京国際	埼 玉	文 教	茨 城
		準優勝	日大生物	中央学院	日大生物	芝浦工業	日大生物	筑 波	埼 玉	日大生物	日大生物	都留文科
		3 位	東京国際	芝浦工業	芝浦工業	都留文科	茨 城	日大生物	日大生産	文 教	日大生産	日大生物
関東 学生	優 勝		国際武道		関東学園	国際武道		高崎経済	国際武道	東 海	城 西	
	準優勝	国際武道	関東学園	国際武道	高崎経済	東京理科	千 葉 城 西 関東学園	東 海	城 西	国際武道	国際武道	
	3 位	城 西 東京理科	茨 城 城 西	関東学園	国際武道 城 西	城 西 高崎経済		茨 城 国際武道	関東学園 東 海	城 西 千 葉	高崎経済 東 海	
関東 大学	優 勝	国士舘	日本体育 早 稲 田	日本体育	日本体育	国士舘	日本体育	早 稲 田	国 士 舘	日本体育	国 士 舘	
	準優勝	国際武道		早 稲 田	関東学園	関東学園	早 稲 田	国 士 舘	東 海	城 西	早 稲 田	
	3 位	学 習 院 早 稲 田	国 士 舘 中 央	国 士 舘 関東学園	城 西 桜 美 林	高崎経済 早 稲 田	国 士 舘 国際武道	日本体育 東京理科	早 稲 田 城 西	国 士 舘 早 稲 田	日本体育 城 西	
東 日本 大学	優 勝	日本体育	早 稲 田	日本体育		早 稲 田	早 稲 田	早 稲 田	早 稲 田	日本体育	日本体育	
	準優勝	国 士 舘	国際武道	早 稲 田	日本体育 関東学園 高崎経済	国際武道	国 士 舘	日本体育	日本体育	国際武道	国 士 舘	
	3 位	早 稲 田 国際武道	日本体育 国 士 舘	東京理科 国際武道	早 稲 田	関東学園 日本体育	城 西 東京理科	高崎経済 国際武道	国 士 舘 学 習 院	早 稲 田 東 海	早 稲 田 国際武道	
全 日本 大学	優 勝	国 士 舘	国 士 舘	日本体育	日本体育	環太平洋	中京学院	早 稲 田	早 稲 田	早 稲 田	立 命 舘 日本体育 中 京 福 岡	
	準優勝	中京学院	日本体育	国 士 舘	福 岡	同 志 社	同 志 社	神戸学院	同 志 社	環太平洋		
	3 位	京都産業 神戸学院	広島修道 中 京	熊本学園 京都産業	早 稲 田 同 志 社	関 西 中 京	中 京 神戸学院	中 京 九州共立	日本体育 高知工科	神戸学院 関 西		

表2-2. ここ10年間の関東地区女子の大会成績

女子			平成18年 (2006)	平成19年 (2007)	平成20年 (2008)	平成21年 (2009)	平成22年 (2010)	平成23年 (2011)	平成24年 (2012)	平成25年 (2013)	平成26年 (2014)	平成27年 (2015)
春季 リーグ戦	Ⅰ部	優勝	淑徳	清和	東海	淑徳	山梨学院	城西	淑徳	東京国際	城西	山梨学院
		準優勝	城西	城西	淑徳	山梨学院	淑徳	山梨学院	山梨学院	山梨学院	山梨学院	東京国際
		3位	清和	淑徳	清和	東海	城西	関東学園	城西	城西	東京国際	城西
	Ⅱ部	優勝	国際武道	城西国際	城西国際	清和	清和	東京国際	東海	東海	新島学園	国際武道
		準優勝	城西国際	関東学園	筑波	筑波	順天堂	国際武道	城西国際	新島学園	清和	西国際
		3位	関東学園	筑波	国際武道	新島学園	新島学園	新島学園	国際武道	城西国際	国際武道	清和
	Ⅲ部	優勝			山梨学院	文教	東京国際	筑波	筑波	文教	千葉	白鷗
		準優勝			埼玉	埼玉	国際武道	千葉	茨城	千葉	順天堂	筑波
		3位			茨城	茨城	埼玉	茨城	千葉	茨城	茨城	千葉
秋季 リーグ戦	Ⅰ部	優勝	淑徳	東海	淑徳	山梨学院	山梨学院	山梨学院	山梨学院	城西	山梨学院	山梨学院
		準優勝	新島学園	城西	関東学園	淑徳	関東学園	淑徳	東京国際	東京国際	東京国際	城西
		3位	城西	清和	城西国際	城西	城西	西	西	東学園	西	京国際
	Ⅱ部	優勝	順天堂	関東学園	山梨学院	清和	東京国際	清和	東海	清和	東海	清和
		準優勝	埼玉	国際武道	新島学園	筑波	新島学園	新島学園	国際武道	国際武道	清和	文教
		3位	城西国際	順天堂	国際武道	新島学園	城西国際	国際武道	新島学園	新島学園	国際武道	城西国際
	Ⅲ部	優勝			文教	順天堂	国際武道	筑波	文教	文教	順天堂	千葉
		準優勝			埼玉	埼玉	文教	茨城	茨城	千葉	筑波	筑波
		3位			相模女子	茨城	千葉	千葉	埼玉	埼玉	茨城	白鷗
関東学生	優勝	淑徳 新島学園 清和 城西	淑徳	城西国際 城西 清和 淑徳 城西	淑徳	淑徳	城西	山梨学院 淑徳 城西 東京国際	山梨学院	城西	山梨学院	
	準優勝		淑徳		淑徳	淑徳	東京国際		東京国際	東京国際		
	3位		淑徳		淑徳	淑徳	東京国際		関東学園 城西	関東学園 山梨学院	城西 東海	
関東大学	優勝	東女体	東女体 日本体育	日本体育	早稲田	早稲田	日本体育	早稲田	東京富士	東京富士	東京富士	
	準優勝	早稲田		東女体	日本体育	東女体	東女体	東女体	日本体育	日本体育	東京国際	
	3位	日女体 城西	新島学園 淑徳	関東学園 山梨学院	淑徳 東海	東海 日本体育	淑徳 山梨学院	山梨学院 国士舘	東海 山梨学院	東京国際 東女体	山梨学院 東女体	
東日本大学	優勝	東北福祉	日女体	日本体育	日本体育	日本体育	日本体育	東女体	山梨学院	日本体育	東京富士	
	準優勝	淑徳	早稲田	東女体	富士	東女体	城西	日女体	東京富士	東京富士	山梨学院	
	3位	日女体 富士	富士 松本	淑徳 東北福祉	東女体 東北福祉	東北福祉 富士	東京国際 東女体	山梨学院 東京富士	東北福祉 東京国際	東女体 東海	日本体育 早稲田	
全日本大学	優勝	早稲田	園田学園	東北福祉	東北福祉	東女体	園田学園	園田学園	中京	東京国際	中京 東海学園 東京富士 日本体育	
	準優勝	日本体育	大阪国際	大阪国際	日本体育	武庫川	鈴鹿国際	東女体	園田学園	日本体育		
	3位	福岡 淑徳	大阪大谷 東北福祉	日女体 東女体	立命館 園田学園	東北福祉 鈴鹿国際	日本体育 早稲田	日本体育 東海学園	大阪国際 環太平洋	東京富士 園田学園		

の10年間を振り返って特筆すべきは、それまでの上位校とは大きく入れ替わったことである。平成20年に山梨学院大学が創部され、続いて平成22年に東京国際大学の創部と続き、一気に関東女子の上位校の顔ぶれが変わったのである。ここ10年間の記録を見ると、春季・秋季両I部リーグ戦において、山梨学院大学が通算8勝となり、I部リーグ戦最多優勝記録の淑徳大学と並んだのである。続いて、淑徳大学が5勝、城西大学が3勝、東海大学が2勝、1勝で清和大学、東京国際大学と続いている。また、そのあとに城西国際大学も着実に力を付けてきており上位進出が期待される。

続いて、インカレの予選を兼ねた関東学生選手権大会においても、I部リーグ戦上位校による優勝争いが繰り広げられている。次に、

東京都を含める関東大学選手権大会においては、東京都加盟大学に押され、ここ10年のうち本年度に東京国際大学が決勝進出を果たしたものの、それ以外の単独優勝は成し得ていない。また、東日本大学選手権大会においては、平成25年に山梨学院大学が優勝を果たしたが、それ以外関東勢の優勝はない。さらに、全日本大学選手権大会となると、強力な東京勢に加え、近畿勢と東海勢が強く、平成26年に東京国際大学が創部5年目にして見事に優勝を果たしたものの、その1回だけある。

しかし、関東女子の競技レベルはこの10年間で飛躍的に成長してきているのは事実である。全日本大学ソフトボール連盟創立50周年の節目を迎え、全日本大学選手権大会での上位常連校を目指して、更なる飛躍を期待する。

「峠のまち」Matsuida Cup男女大学ソフトボール強化大会の歩み

関東地区 高 橋 伸 次（高崎経済大学）

「峠のまち」Matsuida Cupの前身は、男子8チームによる「北関東甲信8大学リーグ」である。まずは、この大会の誕生について触れなければならない。

1980年代当時、関東地区の中でも茨城県、群馬県、山梨県には男子チームが2つずつと少なく（茨城大学、筑波大学／群馬大学、高崎経済大学／都留文科大学、山梨学院大学）、それに加え、今日のような交通網が発達していない地理的な条件等もあり、各チームは、とりわけ県外チームとの対外試合の機会をもつことに苦慮していた。それは、1993年（平成5）年に独立するまで関東地区に併合されていた北信越地区の信州大学や長野大学にとっても同様の悩みであった。

そういった中、当時唯一の教員であった山

梨学院大学の岡田万嗣氏から、春先の強化を目的に4県8チームによるリーグ戦が提案され、茨城県内の会場を皮切りに「北関東甲信8大学リーグ」が1987年（昭和62）から開始された。以降、4県持ち回りで学生主体の運営が1998年（平成10）まで続くことになる。

まだ関東地区で春季リーグ戦が実施されていない時代。2日間で4試合を経験できるこの強化大会は、各チームにとってインカレ予選をにらんだ貴重なものとなり、1995年（平成7）からは10チームを集める大会となっていた。しかしながら、そもそも正式な競技団体としての組織をもっていなかったため、毎年の会場の確保や審判の派遣要請などに苦労が絶えなかった。そういったことから、より運営のし易い会場の定置化と大会事務局の

設置を求める声が大きくなっていった。

そうした折、1997年（平成9）の長野新幹線開通にともない横川－軽井沢間が廃線となる。「峠の釜めし」で有名な横川も信越本線の終着駅となってしまったため、これまでのような人の流れを期待することができなくなり、当地の松井田町（現在は安中市）にとっては憂慮すべき事態となっていた。

そこで1998年（平成10）年、安中市協会の三好忠夫理事長（現在は副会長）の仲介で松井田町に大会の誘致をお願いしたところ、チーム宿舎を町営の国民宿舎にすることを条件に快く会場等の提供をしてくれることになり、翌年に試験開催をすることが決定する。そして2000年（平成12）、女子6チームを加えて正式に「峠のまち」Matsuida Cup 男女大学強化大会がスタートする。

現在は、群馬県協会および安中市協会の主管のもと年間の定例行事としても組み込まれ、関東をはじめ北信越や東北地区からも参加する、男女8チームずつ16チームが集う大会となっている。またこの中から、毎年インカレに約半数のチームが出場するようになり、底辺の拡大とレベルアップという本大会の役割は十分に果たされているといえよう。

今後も、大学連盟へのチームや選手の登録数が減少傾向にあるなか、本大会はより一層、ソフトボール競技への身近な出会いの場、あるいは地域活性の装置として機能していかなければならないと考える。

最後に、本大会の始まりから今日まで支えてくださった岡田氏が、残念ながら2015年（平成27）6月に突然ご逝去されました。心からご冥福をお祈りいたします。 合掌。

北信越地区 これまでの歩みと今後の課題

副理事長 岩 間 英 明（松本大学）

北信越地区大学ソフトボール連盟は、平成3年富山大学の黒田重靖先生（北信越地区、前全日本大学ソフトボール連盟北信越地区常任理事）のご尽力により立ち上げられ、今日に至っています。そこで、記念誌発刊にあたり黒田先生に草創期からの歩みを記して頂きました。

〔黒田重靖先生のご寄稿文〕

全日本大学ソフトボール連盟50周年を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げます。この機会に北信越地区の大会の略歴について述べさせていただきます。

1）北信越地区大会（「北信越地区大学男子女子ソフトボール選手権大会」）について

北信越地区は平成2年まで関東地区に組み

込まれていて試合は全て関東学連が主催する大会で行われていました。試合は関東で行われるため必ず関東まで遠征しなくてはなりませんでした。特に雨で延期になると滞在費用が嵩み雨にならないように遠征時にはよくテルテル坊主を作って下げて晴れるよう祈ったものでした。そうこうしている間に、我々の不便さを感じて戴いた当時の大学連の水野理事長から「男子が3チームになれば北信越地区として独立させても良い」との意向が示されました。それまでは、女子は3チームでしたが男子は長野大学と信州大学のみでした。そこで富山大学に男子部を作って3チームとして独立すべく急遽学生を集めて何とか男子ソフトボール部を結成しました。それでよう

やく男子、女子それぞれ3チームとなり北信越地区として独立できました。発足の時には水野理事長さんに来て戴きお祝いをしてもらいました。当初は何しろ全て手作りで場所の確保や、審判員、記録員などの要請は何処にすればよいのやら全く分からない状態で富山県のソフトボール協会の方に直接お願いして大会を行っていました。2年位そうこうしていた時に、これを見かねた当時の北信越ソフトボール協会の大久保理事長さん（福井）の薦めで北信越地区の協会に加盟させていただけることになりました。平成4年から北信越地区ソフトボール協会による大会の運営が始まり大会回数を数えることとなりました。発足以降男子は上記の3大学に加え福井大学、金沢大学、石川県立大学、富山国際大学、福井県立大学等が加盟し、女子は発足当時の富山大学、上越教育大学、信州大学に加えて金沢大学、福井大学、長野大学、飯田女子短期大学、松本大学、金沢学院大学が加盟しましたが、参加大学は年によって出入りがあります。平均すると男女それぞれ5～7大学となっております。インカレ予選を兼ねた「北信越地区大学男子女子ソフトボール選手権大会」はすでに23回（北信越ソフトボール協会との共催としては21回）を重ねるまでに歴史を刻んでおります。

2) 北信越大学男子、女子新人戦について

実際に北信越地区内で試合をするようになると、『大学同士での試合数が少ないので何とか試合数を増やしてほしい。』という学生からの声が聞こえるようになりました。また、他地区を見ても秋にリーグ戦や新人戦が行われていることから、北信越地区大会から2年ほど遅れて定期戦として「北信越大学男子・女子新人ソフトボール選手権大会」を開催することしました。当初は6回まで富山県ソフトボール協会の御世話で行いました。それ以後（7回目から）北信越協会でも運営して戴き北信越地区各県の持ち回りで開催されるよう

になりました。

北信越地区の最大の特徴は他地区と比べて、国公立大学の比率が高いことにあります。それは選手獲得に大きな影響を及ぼしており、部員の獲得すらままならないという大学も少なくありません。また、部活動の運営に教職員が関与している大学は女子の3大学のみで、その他は全てのチームが学生の自主運営という状況です。特に男子は全チームが教職員が関与していないため、大会運営は協会役員の皆様にかかなりの部分をお願いしているというのが現実です。そのため、私立大学が数多く加盟している他の地区と比べると地区全体の実力的なレベルという点では大きな隔たりがあると言わざるを得ません。

そこで、北信越地区大学ソフトボールの活性化を図るためには、各大学が連携して活動するような環境整備が必要であると考え、平成25年度より新年度シーズンの開幕を控えた2月に富山大学で「北信越地区大学ソフトボール連盟連絡協議会」を開催しています。これまで大会以外では各大学が一堂に会して顔を合わせる事がなかったのですが、各大学の代表者が集まり、各チームの課題や大会、連盟の運営について意見交換をしています。ここで出された意見に基づき、男子の北信越選抜チームによる他地区への遠征試合の実施や、女子の国公立大学だけのオープンゲーム（私立大学が運営）、あるいはこれまでトーナメント方式で実施していた大会をリーグ戦方式に変更して各チームの試合数を増やす。といった具体的な活動が展開されるようになってきました。

登録選手数、加盟校数の減少など、北信越地区大学ソフトボール連盟の今後は決して明るいとは言えないかもしれません。しかし、各大学間でさらに連携をしていこうという機運の高まりや、小学生や中学生といったジュニア層の指導に大学が積極的に関わっている

状況は必ずしも連盟の今後が暗いことばかりではないことを示しているように思います。大学という立場から北信越地区のソフトボー

ルを後押ししていけるような活動を今後も模索していきたいと考えています。

北信越地区の後援大会の歩みと今後の課題

副理事長 岩 間 英 明（松本大学）

北信越地区では「北信越地区大学男子女子オープン大会」「HAKUBA CUP 大学女子ソフトボール大会」の2つの後援会大会を開催し、北信越地区における大学ソフトボールそのものの活性化や地区全体のレベル向上、あるいはソフトボールを通じた地域貢献や地域の活性化を目指しています。

北信越地区大学男子女子オープン大会は前全日本大学ソフトボール連盟北信越地区常任理事であった黒田重靖先生の働きかけによって、北信越協会の全面的なバックアップにより運営されています。黒田先生にその歩みを記して頂きました。

〔黒田重靖先生のご寄稿文〕

1. 北信越地区大学男子女子オープン大会

北信越地区の独立から10年くらいたった頃に全日本大学連盟では大学東西対抗大会が諸般の事情から中止となり、それに代わるものとして地方の活性化等を目的に各地区でオープン大会を開催するように方針が出されました。それに応じて、各地区でオープン大会が開催されるようになりました。その一環として北信越地区もオープン大会の開設に向けて全日本大学連盟、北信越協会に働きかけて開催にこぎつけました。これも北信越協会で運営してもらうことになり、今年は北信越大学オープン大会も本年2015年には12回を数え、参加大学も北信越に加え、遠くは岩手、盛岡、兵庫、神奈川、愛知からも参加していただき、

男子10チーム、女子10チームとなり活発になっております。これは大学間の技術や人の交流を深めるのに役立つのみならず、北信越地区の皆さんに一流の良いプレーを見せて戴くことは観覧してもらっている小中学生、高校生にとっての競技力の向上や意識の高揚に大きく寄与するものと思います。また試合も交流試合として出来るだけ多くの試合が出来るよう協会に協力をしてもらっています。

北信越大学連盟の各大会の運営費は全日本大学連盟からの補助金、北信越地区協会の補助金、参加大学の参加料、及び主催県の援助によって運営されています。各大会はこのように大学連、北信越協会に支えられております。

学生が楽しくソフトボールが出来るようお世話戴いております全日本大学連盟の益々の発展とソフトボール競技が盛んになることを祈念します。

2. HAKUBA CUP 大学女子ソフトボール大会

「HAKUBA CUP 大学女子ソフトボール大会」は、2008年白馬村のグリーンシーズン（夏期シーズン）の活性化を図るため『白馬村に日本リーグに参戦できる女子チームを作れないか』という相談を受けたことに始まります。実際、リーグに参加できるようなチームを作るには財政面や地域性などの問題があり、かなり難しい状況であることを伝えました。その中で大学チームによる大会の開催なら可能

性はあるということで、翌2009年から大学生の大会としては珍しい地域住民の有志による実行委員会が主催し、地域住民と参加大学の学生と一緒に大会運営をしていく“手作りの大会”がスタートしました。大会はインカレ出場校にとってはインカレの前哨戦、インカレ出場を逃したチームにとっては新チームのスタートという2つの異なった性格を併せ持たせるため、インカレ前の時期に開催することになりました。8校でスタートした大会は、第5回大会の2013年度から全日本学連の後援大会となり、2015年第7回大会では16校の参加を得るまでに大きく成長してきています。

また、大会直後のインカレでは参加校の中から優勝をはじめ上位入賞校が出てくるようなレベルの高い試合が展開されるようになる一方、新チームで大会に臨むチームは選手人数の関係で合同チームとして試合をするなど、スポーツの多様な価値観を尊重する学生ならではの大会として定着してきています。さらに、2014年11月最大震度6弱を記録した長野県神城断層地震は、白馬村にも大きな被害をもたらしましたが、歴代の大会参加校20校がいち早く義援金を送るなど、ソフトボールを通じた地域の方との交流も年々深まっています。

北信越地区という小さな組織が2つの後援大会を開催できる背景には、北信越ソフトボール協会、北信越各県ソフトボール協会のご理解ならびに物心両面に渡る支援あります。それは、協会と大学連の良好な関係を示しているとも言え、今更ながらこうした基礎を培ってくださった黒田先生の功績は大変大きなものです。

それだけに、今後これらの大会を継続発展させていくために、北信越地区の大学の後援会大会参加を一層推し進め、北信越地区の大学が大会運営に積極的に関わる必要があります。そしてさらには、各大学のソフトボール部員が大学卒業後、選手、指導者、審判・記録といった大会役員などのそれぞれの立場で活躍していくことが理想だと考えています。北信越地区のソフトボール発展のために、大学ができる最も大きな貢献はこうした人材の輩出ですし、それが自然にできるようなシステムを考えていかなければならないと思います。まず、その手始めに各大学で指導者、審判員、公式記録員の資格取得に取り組み始めました。資格取得費用など解決しなければならない問題は多いですが、今後の課題として地道に取り組んでいきたいと考えています。

東京地区50年の歩み ～東京地区の現況～

常任理事 筒井 崇 護（日本体育大学）

この度、全日本大学ソフトボール連盟が、50周年を迎えられたことを衷心よりお祝い申し上げます。

1966年（S41年）、東京都駒沢オリンピック公園で第1回大会が開催され、昨年の50回大会まで、東京地区の男子、女子それぞれ36

回の優勝を果たし、また東京地区同士の決勝戦は、男子12回、女子24回を数えております。まさに大学ソフトボール界を牽引してきたといっても過言ではありません。

現在、本連盟は、男子21大学、女子19大学の約1000名の学生が登録しており、最も歴史

ある大学連盟であると同時に、競技レベルの高いリーグ戦を春季・秋季リーグ戦に分けて開催しております。今春で48回目の春季リーグ戦を迎えますが、これまでにオリンピックや世界選手権をはじめとする日本代表選手を多く輩出しながら、競技の普及発展をはじめ競技力の向上に努めてまいりました。

近年、少子高齢化が顕著に進み、大学を取り巻く環境も大きく変化しております。教育の充実が就職が最優先となり、どの大学も学生数の確保に奔走し、入試制度の多様化や推薦制度などの拡充により、様々な特色ある大学が林立している状況です。

こうした大学を取り巻く環境の変化を受け、本連盟もこれまでのような歩みは、そのスピードを減速させているのが現状です。

しかしながら、2020年東京オリンピックに

おいてソフトボールが正式種目に復活すれば、再度ソフトボール界にとっての好機が到来します。その際に、ソフトボール界がこれまで以上に発展できるように、関係者含め大いに努力する必要があります。

本連盟は、まさにその先頭を走るべく、これまで以上に取り組みを強化し、抜本的に組織改革をしなければならないと考えております。その為にも、ソフトボールへの真摯な取り組みを今後も大学生たちに大いに期待するところでございます。

末筆ながら、本連盟活動に深いご理解と全面的なご支援を賜りました、全日本大学ソフトボール連盟の会長をはじめ、連盟役員の皆様方に心より感謝申し上げ、改めて厚く御礼申し上げます。

東海地区の価値を創造する新たな取り組み

常任理事 二 瓶 雄 樹（中京大学）

大学選手権50回の歴史の中で、東海地区男子では中京大学が優勝3回、準優勝5回、中京学院大学が優勝1回、準優勝1回、女子は中京女子大学（現、至学館大学）が優勝1回、中京大学が優勝1回、東海女子大学（現、東海学院大学）が準優勝1回、東海学園大学が準優勝1回、鈴鹿国際大学（現、鈴鹿大学）が準優勝1回を数えている。男子で4回、女子で2回と少数の優勝回数が物語るように、大学ソフトボール界における、東海地区の競技レベルはまだまだ後進の地域であることは否定できない。しかし、昨年の第50回大会では、男子ベスト8・女子ベスト4の半数を東海地区のチームが占めた。近年、力を付けつつあることも事実である。

一方、その人気度についてみると、平

成26年春季女子リーグ戦時（2014年）のアンケート調査によれば、一日の観客数は多い時で約200名程度、そのうち半数が選手の保護者・ご家族であることがわかっている。約300名の選手登録数があることから、選手数よりも観客数は少なく、またその大半は身内の存在であることが伺える。男子に至っては、正確な数字は把握されていないが、より少数の観客数であるのが現状である。

このような現状を打破するため、近年、「リーグ活性化」と題して、様々な取り組みを実施している。その根幹を成しているのが、学連委員が主体的に活動する「ユニット制」である。「ユニット」とは、特定の目的のために働くチームの中の小さなチームを指しており、各チームから派遣された学連委員は以下

のいずれかの「ユニット」に所属している。

- ①インターネット広報：Facebook、TwitterなどのSNSの管理運営
- ②プログラム・ポスター：顔写真入りカラープログラム、リーグ開催ポスターなどの作成
- ③メディア／風紀健全化：各メディアへ結果の連絡、身だしなみなど風紀の取り締まり
- ④スポンサー／マーケティング：広告スポンサー獲得活動、リーグ戦時のアンケート調査
- ⑤運営：監督会議、開閉会式の運営

この「ユニット制」により、不足しがちであったマンパワーを補足する（徐々にではあるが）だけではなく、新たな価値を創造することに繋がっている。今後、先輩から後輩へスムーズに仕事内容が受け継げられれば、さらなる発展が期待できるだろう（試合ごとの担当校、記録員派遣も別に実施している）。そして、「競技力向上」の面では、新規主催大会やリーグ戦試合数の増枠を実現した。新規主催大会は、全日本学連の後援を受け、平成20年から実施している藤原初男杯全国大学女子実業団大学選抜大会がある。これは、秋季（11月後半）に行われ、東西から選抜大学4チームずつ、計8チームと東海地区の実業団チーム4チーム、そこに東海地区秋季リーグ上位4校を選抜し、ハイレベルな16チームによるリーグ戦を開催している。試合数に関しては、平成25年度春季女子リーグ戦から、女子一部リーグに限りそれまでの総当り1回

制から総当り2回制へと増枠し、約1ヶ月間の白熱した戦いを実現し、「競技力向上」に大きく貢献している。さらにこのリーグ戦では、個人表彰において各メーカーから物品のご提供をいただき、選手への表彰を行っている。選手のモチベーションに大きく貢献することはもちろんのこと、協賛メーカーの露出も増やしWin-Winの関係を構築している。加えて、女子に限ってであるが「ゆるキャライベント」や「オリンピックによる始球式」、「球場外での飲食店の誘致」などソフトボール以外の観客満足度の向上も同時に推進している。

このような流れの中で、平成27年度（2015年度）から（株）中京テレビ様に特別協賛をいただき、「中京テレビ杯」として春季・秋季リーグ戦が実施されている。表彰の充実はもとより、テレビやインターネットでの露出も多くなり、大きな影響を与えていただいている。中京テレビ杯平成27年度第66回東海地区女子秋季リーグ戦では、最終日の2試合を初のインターネットにおけるライブ配信が実施された。カメラ5台、アナウンサー、解説者付きのライブ配信は、“プロ野球中継”さながらの迫力で、さらなる東海地区の価値向上に寄与したことは疑いようがないだろう。次の10年そして50年に向けて、東海地区が名実共に大学界を牽引する一片を担えるよう、今後も新たな価値を創造し続け、成熟させていかなければならない。

大学ソフトボール東海オープンの歩みと課題

理事 水谷 博（元、至学館大学）

東海オープンとは前理事長の末井先生の各地区での研修大会の開催をという呼びかけに応

じ、2002年3月に始まった。当初は、トヨタ自動車・デンソー・豊田自動織機・東海理化

の各社からの協賛を得て、大会名に第1回のみであったが、「全国大学」の文字を入れて高校野球の春のセンバツのような大会を目指した。また、インカレのような一髪勝負の大会ではなく、2日間に予選リーグと順位決定トーナメントで1チーム1日2試合をソフトボール専用球場のある安城市総合運動公園で行い、施設と記録の充実した大会を目指した。

1会場に6球場という施設の関係で、参加チームは男女各12チームであったが、北は宮城県、西は福岡・大分県の大学からも参加をいただいた。申込が多数の場合には選抜に苦慮し、東海地区に涙をのんでもらうこともあった。春のリーグ戦直前の大会であり、各チームともその課題解決に向けての熱い戦いが繰り広げられた。また、ルールの大きな変更があった年には、初めてそれが適応される公式戦であったことからいろいろな試みも行われた。時には、投手の20秒ルールと打者の10秒ルールをネット裏の運営員にストップウォッチを持たせて厳密に適応するということも実験的に行われた。これらに対して、愛知県協会の審判部にも積極的なご協力をいただいる。また、大会の運営には出場できない東海地区のチームがあたり、全国の強豪チームの試合を目の当たりにして刺激を受けている。

しかし、2006年に起きたリーマンショック

の影響でトヨタ系列各社からの協賛が得られなくなり、2010年の第9回大会から「トヨタ・デンソー・豊田織機・東海理化杯」の冠を外さざるを得なくなった。さらに、安城市総合運動公園ソフトボール場での男子の試合が防球ネットの低さから禁止になり、第10回から男子は豊田市での開催になった。

春のこの時期にオープン大会を行うことは、東海地区のチームに刺激を与えるばかりでなく、特に男子と春のリーグ戦が行われていない地区のチームにとっては大いに意義があると思われる。以前とは異なって、3月に在学生オリエンテーションを行い、4月1日に入学式を行うのが一般的になった現在、非常に短くなってしまった春休みに日程を確保して大会に参加するのは困難なこととなったが、何とか継続したいと考えている。大会の性格については、安城のソフトボール場が改修工事のために来年から2年間使用できないため、この間にじっくりと検討しなければならない。女子の大会については、前年度のインカレに出場できなかったチームや選手が参加してインカレを目指すチームの大会にすることなどが現在考えられている。全国の皆様からご意見をいただき、東海学連内のマーケティングUnitで議論を行い結論を得たいと思っている。ご意見をいただきたく存じます。

近畿地区（男子）50年の歩み

常任理事（男子）森 田 啓 之（兵庫教育大学）

全日本大学ソフトボール連盟の規約では「近畿地区」と称されるが、実質的に近畿地区大学のソフトボールを担ってきたのは、「関西学生ソフトボール連盟」（以下、関西学連）である。以下、関西学連のこれまでを振り返

ってみたい。なお、関西学連は男子と女子で運営形態が異なるので、ここでは男子の活動を中心に述べることにする。

まず、関西学連の歴史は、全日本大学ソフトボール連盟発足（昭和40年、第1回全日本

大学選手権は翌年41年）から3年後の、昭和43年（1968）に遡る。そして、翌44年（1969）から春季リーグ戦がスタートする。それ以前は、故・島田三千男先生率いる関西大学が第1回から全日本大学選手権に参加し、続いて同志社大学が加わったという程度で、関西男子のソフトボール熱はまだまだであった。そのような中、全国の動きを知る島田先生が関西学連設立に大きく関わられたことは言うまでもない。関西学連設立当初、男子は前記2大学に京都大学を加えた3大学であり、第1回のリーグ戦は、女子数チームとともに大阪成蹊女子短期大学グラウンド（当時、島田先生と同じく顧問を熱心にされていた吉岡先生のお世話で）にて行われた。昭和49年には末井健作先生率いる姫路工業大学（現在は兵庫県立大学）が加盟したが、まだ5チーム程度であった。その後、昭和55年（1980）の第12回大会では飛躍的に加盟チームが増加して3部制をひくこととなり、以降、加盟チームは順調に増加し、25チーム前後で推移をしてきた。ちなみに、今年度は29大学と全国で最も加盟大学が多いことは関西学連が活発にリーグ戦を展開してきたことの証、成果であり、誇ってもよい部分と思っている。

役員の方に目を移すと、学連会長は一谷定之丞（園田学園女子大学理事長）先生に長く務めていただいた後、同じく学園理事長である一谷宣宏会長に現在までお世話になっている。また、実務をつかさどる理事長・副理事長については、島田先生、末井先生の後は、私、森田が平成5年頃から主に男子担当として今日に至っている。

さて、関西学連の特徴として2つ目に誇るべきは、その運営が加盟チーム中の基幹大学学連委員（今年度は、関西大学、立命館大学、大阪大学、神戸大学、同志社大学）によってほとんどなされていることである。彼らは、諸会議の設定・運営やグラウンド確保、さらには試合の無い日にも責任者として会場入り

と、本来ならば自分たちのプレイだけに集中したいところを、学連執行部役員として様々な作業をしてくれている。なかでも、関西大学の学連委員は男子学連が創設されて以来、途絶えることなく、事務部長（いわゆる学生委員長）と事務次長を務めてくれている。全チームとの様々なやりとりは大変な苦勞と面倒を伴うことは容易に想像できる。残念ながら男子チームには継続的に関わる監督や指導者は少なく、まさに彼らや諸先輩方が自分たち学生で苦勞しながら学連を運営し、リーグを実施してきたのである。私は教職員の責任者として肩書きはあるものの、彼らが困った時にアドバイスをする程度である。「関西リーグの歴史は、自分たちでグラウンドを確保し、審判の手配を含めて協会との交渉（依頼・折衝）をやってきた積み重ねである！」と言ってよいし、その点は全国に胸を張っていると思う。もちろん、登録を含めた会計的な部分では、学生たちでは至らない部分もあり、それを今日まで支えてきてくれたのは、関西リーグOBの金村明德氏（昭和55年卒）と西田達生氏（昭和58年卒）である。お二人とも仕事を持ちながらも卒業後ずっと事務局として学生を支えてきてくれたからこそ、今日がある。心から感謝申し上げたい。また、審判や記録については大阪ソフトボール協会のご指導とご支援を抜きに語ることはできない。多くの社会人の方々に大阪府下全域から会場である万博公園まで時間とお金をかけて来ていただいて、学生たちがプレイする環境を整えて下さったことにお礼を申し上げるとともに、これからも宜しく願いたい。

さて、全国における関西地区としての戦績であるが、一谷定之丞会長がかつて「関西から男女とも大学日本一を！」と役員や選手に熱く語られたと聞かすが、男子は全日本インカレでの初優勝が第28回大会（平成5年）と長くかかった（女子は昭和58年の第18回大会で初めて園田学園女子大学が優勝）。ただ、以

降は、今日まで全日本においては「西の雄」として関西リーグから選出されたチームは活躍を続けている。個人的なレベルに目を移しても、関西リーグでプレイした選手は全日本代表にも多く選ばれ活躍していることは周知の事実であろう。投手に限ってみても、最近では松田光選手（京都産業大学）、中村健二選手（大阪経済法科大学）、少し遡って馬場選手（京都産業大学）、天野選手（京都産業大学）、飯田選手（神戸学院大学）と素晴らしい投手がリーグ戦でしのぎを削ってきたのである（なお、大学名は在籍時のもの）。

最後になるが、来年度から関西学連男子は、30年以上にわたって使用させていただいた万博公園スポーツ広場からリーグ戦の拠点を移すこととなる。大阪協会、並びに泉南市のご支援により、「なみはやグラウンド」と「サザンスタジアム」で競技できることとなったのである。これまでとは異なることもあり、戸惑うことも多くあるかもしれないが、これを関西学連男子が一層飛躍するいい機会として、学生はもとより教職員や監督も新たな気持ちで取り組みながら、まずは28年度第48回春季リーグ戦に向かいたいと考えている。

近畿地区（女子）50年の歩み

副理事長 久保田 豊 司(大阪国際大学)

関西学生ソフトボール連盟は、昭和43年に創設され、翌年に記念すべき第1回大会が開催された。参加大学は、大阪成蹊女子短期大学と武庫川女子大学である。以後、昭和56年頃から加盟大学が急速に増加し、現在では、23大学がリーグ戦に参加している。設立時は大阪成蹊女子短期大学のグラウンドを男女同時開催で使用していたが、昭和55年の春季リーグ戦から女子事務局を設け、日程・会場とも別々に運営をしている。試合は、学生の本分である「学業とソフトボールの両立」という観点から、休日に日程を組んできた。

発足当初から加盟大学は、全日本・西日本インカレにおいて優秀な成績を残しており、全日本インカレでは、第3回大会において大阪成蹊女子短期大学が3位、その後も加盟チームが準優勝、3位と続き、第18回大会では園田学園女子大学が、第19回大会では大阪成蹊女子短期大学が優勝している。西日本インカレにおいては、園田学園女子大学の15回を

筆頭に、35回の優勝を加盟大学が勝ち取っている。

運営面では、この十数年さまざまな改革を行ってきた。もちろん主役は学生である。「たくさんの選手が頑張っているから、最優秀打撃賞（首位打者）と最優秀投手賞（防御率1位）以外にもう少しリーグ戦での賞を多く出せませんか？」これが改革のきっかけであり、私が副理事長となった2年目のことであった。学生からの提案を具現化するために、月に1回のペースで学生会議を持ち、そこで積極的に意見を出しあい3年をかけて現在のリーグ運営の基礎を築いた。それは、学生の創意工夫による開会式や閉会式、表彰制度、秋季リーグ戦終了後の卒業年度生によるドッジボールなどは、各大学・選手間の交流を一層深め学生の満足度を高めるものとなった。

また、女子学連はリーグ改革の他に、阪神学生女子ソフトボールオープン大会を平成12年に10チームの参加でスタートをさせた。以

前より3月のプレ・ゲーム期（鍛錬期）に、ゲーム数を確保するために各チームが苦勞するとの意見から実現した大会である。運営は当時の園田学園女子大学監督の板谷先生、武庫川女子大学部長の中村先生、神戸親和女子大学部長の但尾先生を中心に行ってきた。大会の目的は、日ごろ試合機会の少ないチームと対戦し、お互いの競技力を向上させるとともに、交流を深めることであつた。最初の頃は近畿地区を中心とした大学が集まり大会を行っていたが、今では全国からの参加がある。各チームは1日に2～3試合をこなし、部員数の多い大学は2チームに分けて参加するなど、それぞれのニーズに合った試合が実現できるのが魅力である。この阪神学生女子ソフトボールオープン大会をモデルに、各地区においてもオープン大会や研修大会が実施されるようになった。今後は競技力の向上だけで

なく、加盟大学全チームが満足できるような各種大会を計画し実現することが急務な課題と認識している。

このように、女子学連の運営は、自分たちの好きなソフトボールについて、自分たちの思いや考えをもちより、創意工夫しながら自分たちの手で企画・運営をしてきた。学生主体による運営が選手のモチベーションを高め、一つの結果として、競技力ではここ数年をみると西日本インカレの優勝大学は殆どが近畿地区代表であり、全日本インカレにおいても優勝、準優勝の結果を勝ち取っている。また、大学間を越えた交流が、学生一人一人の人間性を高める結果にもつながっている。最後に、これからも学生諸君には、激動する社会、多様化する価値観に対応できる学連主体の伝統ある運営を続け、学生スポーツのあるべき姿を追求して欲しいと願っている。

全国国公立大学オープン大会の歩みと現況

常任理事(男子) 森 田 啓 之(兵庫教育大学)

全日本大学選手権大会（インカレ）以外に、学連加盟チームが「地区を越えて対戦、交流できるものを」という趣旨で始まったオープン大会。私は近畿地区の代表として、「同じような環境で日頃練習している、国公立の大学が集まってプレイする場を設けたい」と考えた。それが、「全国国公立オープン大会」であつた。というのも、他の種目では「全国国公立大学」・「全国教育系学大学」・「全国医学系大学・学部」というように、同じ性質・規模の大学が集まって試合（試し合い）をすることはよく見られ、ソフトボール競技においても国公立大学が集まって試合をすることは全日本インカレとはまた異なった学生ス

ポーツとしての意義があると考えたからである。もちろん、現実面として多くの国公立大学は全日本インカレに出場できていないため、全国規模の遠征を伴った試合を経験させてやりたいという思いもあつた。

そのような考えのもと、第1回大会は平成16年3月27～29日の3日間で開催することを決定した（第2回目以降はホスト役の学生の疲労も考慮して2日間の会期にしている）。なお、4月開始のシーズン直前であるため、No.1を決めるのではなく、可能な限り多くのチームとの試合を経験するという趣旨のもと、敢えてランダムな対戦形式での実施とした。会場は、兵庫教育大学のソフトボール場、

ラグビー・サッカー場、それに陸上競技場内のフィールドで3面、さらに大学のある加東市の市民グラウンドを3～4面借用して、合計6～7面で実施している。第1回目は2月に全日本学連HPに掲載するという遅い広報となってしまう、チームが果たして集まるのかどうか心配であったが、最終的には、男子12チーム、女子4チームと初回にしては大成功であった。特に、東からは高崎経済大学と東京大学、西からは佐賀大学の参加があった。現在は、「全国国公立大学オープン大会」と銘打っているものの、第1回は「国公立大学オープン大会」程度でと考えたくらいであり、このように遠路からの参加をいただいてホスト役（大会は、宿舎斡旋、会場作り、弁当手配、送迎まですべて兵庫教育大学ソフト部の学生が行っている）として、当時の学生とともに私も大いに喜んだことを覚えている。特に、好評であったのは、安い参加料で希望すれば最大で3日間で6試合もゲームをできたことである。遠征に出かけての試合は学生にとって意義深い、残念ながら一般的な大会では1試合で終わりというチームも少なくない。そこで、まずは可能な限り多くのチームとの対戦をと考えたのが始まりであった。

次年度以降は広報（HPへの掲載等）を早くしたこと、さらには口コミの評判もあって、年々参加チームは増加し、昨年度の第12回大会（平成27年3月）は男子21チーム、女子9チームの参加であった。北は茨城県の筑波大学、南は沖縄県の名桜大学からというように、まさに全国各地から兵庫に参集してくれており、残念ながらいくつかの男子チームには参加を断らざるを得なかったとも学生から聞いている。まさに、名前通り「全国大会」に成長したと言っても過言ではないレベルで、ま

た、この中から毎年数チームが全日本インカレに出場、活躍もしており、うれしい限りである。特に、男子については参加チームからの要望を受けて、5年程前からチームをブロックに分けて初日を予選、二日目を順位決定戦というスタイルを取っている。

その他に、この大会の特徴を述べるならば、学生による「手作りの大会」であること、そこは誇りたい部分でもある。兵庫教育大学の学生が企画・運営の中心であることは先に述べたが、当日の試合会場では、主審のみ公式審判にお願いし、塁審及び記録やグラウンド整備は決められた当番大学が交代で行っている。様々な予期せぬことにも各大学の学生が柔軟に対応してくれており、それ自体が大会をいい雰囲気に行っていると思われる。参加チームの学生に感謝したい。また、初日の夕刻には、体育館等の室内で交流会（お菓子等での談笑）を企画・実施している。試合（グラウンドの中）だけでなく、グラウンドの外での「交流」はスポーツ社会学的にも注目されている通りで、限られた時間であるが学生たちは試合とは異なる顔で「ソフトボールを愛好する仲間と楽しんで」、色々な話をしている。手前味噌ではあるが、このような大会が全国各地でいくつか設定できれば、大学ソフトボールの裾野ももっと広がるのではないかと感じている。

最後に、今これを書きながら今年3月の大会申込状況について学生と話をしている。「今年はどんな新たな出会いがあるのか」を楽しみにして学生ともども準備を進めているところである。何年先まで継続できるか分からないが、可能な限り本学で開催していけたらと考えているので、今後も変わらぬ関係各位のご理解、ご支援、ご協力をお願いしたい。



中国地区大学ソフトボールの50年史

常任理事 逢坂 秀樹（鳥取短期大学）

中国地区が全日本大学ソフトボール連盟（以下、「全日本大学連盟」）に加盟したのは、昭和51年である。この年に、第11回全日本大学ソフトボール選手権大会（以下、全日本大学選手権大会）が、広島県呉市で開催され広島大学と広島修道大学の2大学が出場した。全日本大学連盟への加盟は、連盟発足10年後のことで男子のみの加盟であった。女子はこれに遅れること5年後の昭和56年で、それまで女子は中国地区に一チームしかなく、全日本大学選手権大会の地区予選は中・四国・九州の3地区によるものであった。この全日本大学選手権大会の予選会に出場したのが鳥取女子短期大学（現、鳥取短期大学）で、予選を勝ち上がり中国地区から初めて全日本大学選手権大会への出場を果たした。その3年後に、中国地区で男女による全日本大学選手権大会の合同予選会が広島修道大学で開催され、中国地区大学連盟としてのスタートを切った。

中国地区大学連盟の初代常任理事は萩尾健甫先生（当時、広島修道大学）が務められ、地元広島県をはじめ中国地区の大学に声をかけられ普及に尽力された。一方では全日本大学、西日本大学の大会を開催し、地区の発展と技術力の向上にも貢献された。

中国地区の大学ソフトボールの歴史は、昭和51年に開催された第11回全日本大学選手権大会を機に始まり、昭和58年には男女合同による全日本大学選手権大会の地区予選が開催された。男子は広島修道大学と広島経済大学

が、女子では鳥取女子短期大学が出場権を獲得し、第18回全日本大学選手権大会に出場した。広島修道大学は、第15回・16回・17回と3年連続3位決定戦で勝利をおさめ、全日本大学選手権大会3年連続3位となり、中国地区の歴史に花を添えている。女子では鳥取女子短期大学が第19回大会での第3位決定戦進出が唯一の上位進出であった。その後は、男女ともに低迷期を迎え、西日本大学選手権大会での上位進出はあったが全日本大学での上位進出はなく、平成19年の第42回大会で広島修道大学が第3位になるまで20年以上の間上位進出はなかった。

平成13年の秋に「大学間並びに選手間の交流と親睦、そして競技力の向上を図る」ことを目的として、第1回中国地区大学ソフトボール選手権大会を新設し、全日本大学選手権大会地区予戦後に具体的な目標がなかった大学に、年間を通じて活動目標が持てるよう秋季大会を開催した。

中国地区の新たな一ページは、環太平洋大学（男・女）の加盟から始まった。環太平洋大学の男子は平成19年度に全日本大学連盟に加入して以降、短期間で実力を備え第45回大会では初優勝に輝き、第49回大会では準優勝を果たした。また女子は、第48回大会で環太平洋大学が3位入賞を果たした。今後は男女ともに環太平洋大学が中国地区大学のリーダーとして、そして大学ソフトボール界を代表する大学として、競技力向上と発展に寄与してくれるものと期待している。

全日本大学ソフトボール選手権大会での主な成績

男子	第15回S55	広島修道大学（3位）	第16回S56	広島修道大学（3位）
	第17回S57	広島修道大学（3位）	第19回S59	広島修道大学（3位）
	第20回S60	広島修道大学（B4）	第42回H19	広島修道大学（3位）
	第45回H22	環太平洋大学（優勝）	第49回H26	環太平洋大学（準優勝）
女子	第19回S59	鳥取女子短期大学（B4）	第48回H25	環太平洋大学（3位）

四国地区の歩みと今後の課題

常任理事 宮 尾 直 海（環太平洋大学短期大学部）

全日本大学ソフトボール連盟創立50周年、おめでとうございます。

連盟創立50周年にあたり、四国地区の歩みと今後の課題を述べさせていただきます。私が四国地区の常任理事になったのは、平成19年4月からで、当初は、四国学院大学の故、中平順先生（元全日本学連副会長）が四国地区の大学ソフトボールを立ち上げられました。その後平成9年までは、徳島文理大学の

川田健司先生が常任理事をされ、四国地区大学連盟を統括されていたそうです。平成9年に愛媛女子短期大学ソフトボール部が創部され、監督の山本孔一先生が平成10年から平成18年まで四国地区の常任理事となられ、私に引き継がれました。

当時の資料等がほとんどなく、私の在任期間中の記録のみを掲載させていただきます。

<加盟大学>

年度	男子	女子
平成16年度	愛媛大学、香川大学、高知大学、高知工科大学、四国大学、四国学院大学、徳島大学、松山大学	愛媛女子短期大学、香川大学、四国大学、四国学院大学
平成17年度	同上	同上
平成18年度	同上	同上
平成19年度	同上	愛媛女子短期大学、香川大学、四国大学
平成20年度	同上	同上
平成21年度	愛媛大学、香川大学、高知大学、高知工科大学、四国学院大学、松山大学	同上
平成22年度	同上	同上
平成23年度	愛媛大学、香川大学、高知工科大学、高知大学、四国学院大学、四国大学、松山大学、徳島大学	愛媛女子短期大学、香川大学、四国大学、四国学院大学
平成24年度	同上	環太平洋大学短期大学部、香川大学、四国大学
平成25年度	愛媛大学、香川大学、高知工科大学、高知大学、四国大学、松山大学、徳島大学	環太平洋大学短期大学部、香川大学、四国大学、松山東雲大学
平成26年度	同上	環太平洋大学短期大学部、香川大学、四国大学
平成27年度	同上	同上

平成19、20年度は四国学院大学が部員不足のため3チームとなるが、21年度は登録をしてきた。しかし四国大学が部員不足のため3チームとなる。

男子においても、平成21年度に四国大学が部員不足を理由に登録をせず、また、徳島大学で選手の登録違反が発覚し、徳島県ソフトボール協会から1年間すべての大会への出場

停止という重い処分を受け、6チームという危機的状況となった。

23年度は、男子の徳島大学が復帰し8チーム、女子も四国学院大学が復帰し4チームとなる。

25年度は、女子に松山東雲大学が新規加盟し4チームとなったが、大学連盟への登録は1年のみであった。しかし、四国地区大学総体へは参加しているので、引き続き加盟登録を呼びかけていきたい。

表を見てもわかるように、この10年間で、男子は7～8チーム、女子は3～4チームで増えていない。四国地区は4県で大学数も少なく、少子化により学生数も減少している。また、優秀な選手が関西地区の大学へ流出し、

部員確保が大変困難な状況である。

今後の課題としては、優秀選手の流出を防ぐため、四国地区の競技力を向上させること。登録チーム数をこれ以上減少させないための大会等の試合方法や試合数を増やすなど改善していくこと。大会等の開催や試合結果、記録等の広報活動にも力を入れていく必要がある。

四国地区大学連盟も多くの方々に支えられ今日までできました。これからも未来へ大きく発展していくことを期待します。

最後になりましたが、全日本大学ソフトボール連盟のますますのご発展を心から祈念申し上げますとともに、ご尽力いただきました関係各位へ感謝申し上げます。

九州地区大学ソフトボール連盟の今 ～先輩から後輩へ～

常任理事 濱 貴 一（熊本学園大学）

九州地区では、例年、九州ソフトボール協会との共催大会とし文部科学大臣杯全日本大学ソフトボール選手権大会と西日本大学選手権大会の出場権をかけた『春季大会』、2001年からスタートした各大学新チームになって戦う『秋季大会』の2大会をメインに活動が行われています。

まず春季大会ですが、今年で第34回を迎え、各大学の選手、マネージャー、応援者の多くが訪れた鹿児島県南九州市知覧町で今年も開催されました。男子16大学、女子5大学の参加チーム数で、男子がやや減少傾向にはあります。そのような現状で各大学がなんとか各々のチーム事情を乗り越え、九州地区の春季大会の聖地となりつつある知覧平和公園多目的球場に集結し、全国出場を目指し大会を盛り上げてくれています。各大学4年生最後の大会となるため、4年生の学生たちの思い出

深い球場・会場となり、後輩たちにこの春季大会の伝統・伝説が脈々と引き継がれているのを実感しています。ここでご紹介しています南九州市知覧町は、先の太平洋戦争末期本土最南端の特攻基地のあった所であり、国家危急を救う大義のもと、若くして殉じた特攻隊の遺品や悲惨な傷跡を残す戦跡を通じて、後世に平和の尊さを語り継いでいる地。このことは市長より開会式でもご挨拶でお話をいただいています。この教育的な背景も春季大会で、学生たちはこのことに触れ、さらに南九州市のご支援もあり、各大学の新生には隣接する南九州市知覧特攻平和会館の来館をご招待いただき、学習する機会も得ています。九州地区の春季大会は、このように熱い大会が聖地で繰り広げられています。

次に秋季大会ですが、今年で第15回を迎え、初めて熊本県阿蘇市で開催されました。この

秋季大会は、2000年まで九州地区は春のトーナメント大会のみだったことから、九州地区の競技力向上と学生相互の交流を図るため、当時中野理事長が関係者へ働きかけ、九州ソフトボール協会のご理解と第1回開催地の知覧町のご協力もあって2001年よりスタートした経緯があります。その秋季大会が15回を重ね、春同様に男子16大学、女子5大学が参加しました。秋季大会では出来る限り参加大学が最低2試合はできるよう初戦の敗者同士で交流戦を組み、開催地の協会にご協力いただき大会が行われています。また今回は開会式で、成人式での全国ニュースでも有名な阿蘇市長に、阿蘇山をバックに未来の日本を背負う若者へと大きなエールをしていただきました。そんな中大会終了後は、各大学が会場の撤去作業などを協会の方々と積極的に取り組んでいました。さらに新チーム同士で交流し

ている様子も見ることができました。秋季大会を立ち上げた際の思いは参加する各選手に受け継がれています。そしてこの秋季大会が終われば、また熾烈な全日本代表権争奪の春季大会へと学生たちの活動も向かっていき、九州地区の1年間活動が終わっていきます。九州地区は、他地区のようにリーグ戦など長期での大会開催は厳しい状況ですが、春と秋の大会において、各大学が切磋琢磨し、先輩から後輩へと引き継がれ、大学連盟の活動が衰退することなく行われています。今後は、微力ではありますが、学生たちのソフトボール愛を応援し、九州地区に加盟する大学、選手にとって学生時代の貴重な経験と思い出が出来るように、他方面からの支援をしていきたいと思っています。これからの大学ソフトボールの発展を九州地区からも。

「ちゅーばーリーグ」 ― 春季ソフトボール強化リーグin読谷 ―

ちゅーばーリーグ実行委員会委員長 新 垣 實（沖縄国際大学）

2月から3月にかけて沖縄は温暖である。球春到来の季節である。この時季に、日本と韓国の多くのプロ野球球団が県内各地でキャンプを張る。実業団女子リーグの「ビッグカメラ」、「トヨタ自動織機」や国士舘大学などの大学ソフトボール部も合宿をする。

「ちゅーばーリーグ」は「春季ソフトボール強化リーグin 読谷(よみたん)」の通称である。「ちゅーばー」とは沖縄方言で「強豪」という意味である。「ちゅーばーリーグ実行委員会」主催・琉球新報後援で、各チームの技術力の向上、沖縄県のスポーツ・観光振興、そして読谷村の村おこしを目的に毎年3月の2週目の週末2日間にわたり同村運動広場と多目的広場で開催される。

読谷村は海邦国体でソフトボールの主会場であった。沖縄県内で最も同競技の盛んな地域である。アジア最大の米空軍基地のある嘉手納町の隣村で、村内唯一の高校である読谷高等学校男女ソフトボール部は県内屈指の強豪校である。

第1回ちゅーばーリーグは平成9年の3月に開催され、旭化成、西日本シロアリ、ホシザキ電気、ホンダ技研、宮城県選抜、日本体育大学、福岡大学、沖縄国際大学などいずれも国内の実業団一部リーグや二部、大学リーグなど当時のトップクラスが出場した。しかし、日本経済の斜陽化とともに実業団チームや選抜チームの参加が減少した。近年の大会は大学生チームを中心に開催されている。

平成25年の3月に第19回大会が開催された。今大会から琉球新報とともに九州地区大学ソフトボール連盟が後援団体となり、全日本大学ソフトボール連盟から補助金が出るようになった。国際武道大学、立命館大学、福岡大学、中京大学、城西大学、国士舘大学、熊本学園大学、県内からは、沖縄国際大学、名桜大学、ファーストメディカルが参加し覇を競った。

国士舘大学、熊本学園大学、福岡大学は第1回大会から第19回大会まで連続出場であ

る。第15回大会の開催に際し、実行委員会から3大学に対して感謝状が贈呈された。

なお、ピーチなどの格安航空会社を利用すれば羽田から沖縄まで片道2～3千円で済む。寒い本土で合宿をするより暖かい沖縄で合宿を行うメリットのほうが大きいと思われる。だからこそ多くのプロ野球球団が沖縄でキャンプを行うのである。「ちゅーぱーリーグ」に参加して早い春を満喫していただきたい。

6 ソフトボールの各界から見た大学ソフトボール

創立50周年記念誌に寄せて

(公財)日本ソフトボール協会 藤井 まり子

連盟創立50周年誠におめでとうございます
私が日本体育大学に入学してから、早や36年の月日が経ちました。大学ソフトボール界も随分変わり、その頃は、インカレ優勝と全日本選手権大会に出場することを目標に日夜練習を重ねていました。用具用品の変貌も日進月歩でユニフォームも大変華やかなデザインになり、当時の物とはだいぶ様変わりしました。日本は1996年には五輪出場も果たし、過去4大会には、4名の現役大学生と2人の大学卒業生が五輪で活躍しました。《アトランタ五輪／持田京子・高山樹里（日体大）、藤本佳子（東女体大）、シドニー五輪／増淵まり子（東女体大）、北京五輪／伊藤幸子（中京大卒）、藤本索子（日体大卒）》また、五輪スタッフにも多くの大学関係者が携わっています。私もその一人として、今でも大変貴重な思い出の一つになっております。彼女達の活躍により「いつかは私も・・・と、大学生達は大きな夢を抱き、それまで以上に練習に励

んだことと思います。また、その他に世界大学選手権大会（2004年アメリカ、2006年台湾）ユニバーシアード（2007年タイ）、東アジアカップ（2012年韓国、2013日本、2014年中国）が開催され、学生やスタッフが国際的に活躍できる舞台ができ大きく羽ばたいた時期とも言えます。しかし、その後五輪種目から除外されて10年が経ち、現在は野球と助け合い2020年東京五輪での復帰に向けて活動中です。ソフトボール界全体の為にも復帰を大いに望むところであり、一人でも多くの大学生や大学関係者が、再び五輪で活躍できますよう願っています。

最後になりますが、大学時代や卒業後の様々な体験を、選手・指導者育成、地域貢献、競技普及に、今後も最大限努力して大学関係者皆様と一緒に活かせていけたらと思っております。

全日本大学連盟の益々の発展と関係各位のご活躍を心より祈念申し上げます。

記録が語る大学ソフトボール

(公財)日本ソフトボール協会記録委員会記録副委員長 下 村 征 二

このたびは全日本大学ソフトボール連盟創立50周年を迎えるにあたり心よりお祝い申し上げます。

昭和41年に男子10チームのトーナメント戦、女子5チームのリーグ戦で始まった全日本大学ソフトボール選手権は、その後試合方式等やチーム数の変更を重ね、今年度開催された第50回大会では男女共に32チームのトーナメント戦で開催される大会にまで発展してまいりました。

これも大学連盟の方々の半世紀の長きにわたるご努力の賜物だと思います。

現在、公益財団法人日本ソフトボール協会に現存している記録を紐解いてみますと試合結果は第1回から、スコアカードも古い物では日ソの記録委員会発足前の第13回（昭和53年）に記帳されたスコアカードが残っており、当時のスコアカードを確認してみると記

帳方法や様式の移り変わりや当時の選評等50年の歴史の重みを感じることができます。

ただ、過去の大会の資料は残っておりますが、すべてが揃っているわけではありません。

今後はお互いが連携を取り合い、1つでも多く資料が見つかり正確な大会記録が掲載できるようになればと思います。

後、現在は個人で簡単に情報発信できるようになっており、記録本部が発信する大会結果以外に大学連盟もフェイスブックで情報発信をおこなっておりますので、選手権大会では正しい情報を多くの人に知ってもらえるようお互い頑張っていければと思います。

最後になりましたが、次の50年に向け今まで積み重ねられた数々の記録の中でも今後破られないだろうといわれる記録を破る選手の出現と大学連盟の発展を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

文部科学大臣杯全日本大学選手権大会を開催して

富山県ソフトボール協会理事長 竹 島 正 隆

このたび、全日本大学ソフトボール連盟が創立50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

さて、富山県において、平成22年9月に第45回全日本大学男子・女子選手権大会を開催させていただきました。富山県では毎年9月1日から3日まで「おわら風の盆」が開催され、この期間前後県下の宿泊先が相当混雑しますが、その時期より10日程度後に大会が開催されることになりほっとしていたところ、

全国建築学会の日程と重なっていることが判明、宿舎不足となりました。出場チームの中には宿舎確保に大変苦労をされたチームもあったように聞いております。大会開催にあたっては、宿舎確保の重要性を痛感しました。

大会の方は1日目、2日目と残暑が厳しい日となりましたが順調に大会は進みました。しかし、最終日は午前7時過ぎから雨が降り出し、一時激しい降雨となりました。天気予報では昼ころから晴れの予報も出ていました

ので12時から試合開始としました。幸い10時頃から雨が上がり準決勝を12時から開始し、霊峰立山・剣も姿を現し、日程通り大会を終えることが出来ました。男子は創部4年目の環太平洋大学が初優勝、女子は古豪東京女子体育大学が15回目の優勝で幕を閉じました。

主会場の岩瀬スポーツ公園に男女5球場を配置したことで大会は終始大いに盛り上がりました。男子、女子を同会場で開催することで多くの観戦者を呼び込むことが可能であることがわかりました。

また、大会結果を毎日その日の内にホーム

ページでアップしていましたが、最終日の大会終了後都合により大会結果のアップが出来なくなり、電話での問い合わせでお叱りを受けました。この時はインターネットでの迅速な対応が求められていることと大学の大会への注目度の高さを痛感いたしました。

全日本大学選手権に出場された選手のみさんから多くの指導者や日本代表選手を輩出し、日本ソフトボール界のリーダー的な役割を果たしてきたことは言うまでもありませんが、今後もその役割を担っていただきたいと願っております。

大学ソフトボールに関わっての思い出と将来への期待

関西大学体育会ソフトボール部OB・OG会会長
ミズノ株式会社大阪本社勤務 近藤 晴彦

全日本大学ソフトボール連盟創立50周年、誠におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。

私は1970年に関西大学に入学し、当時ソフトボール同好会に入部致しました。入部きっかけは恩師で当時関西大学体育教授・故岩野次郎先生からの誘いでありました。後で知ったのですが岩野先生は当時ISF（国際ソフトボール連盟）副会長、日本ソフトボール協会副会長という要職であり、又、日本のソフトボールの創始者という方でした。当時から岩野先生の口癖は【ソフトボールが近々オリンピック種目になる】という話でした。現実にはそれから25年間かかりましたが。

インカレは当時加盟大学数が少なかったもので男女共オープン参加でした。私は1970年大阪府吹田市、1971年東京都、1972年愛知県豊橋市、1973年群馬県草津町と4回出場しました。同級生にはソフトボール界の初代スーパースター三宅豊氏<日本体育大学卒、現(公

財)日本ソフトボール協会常務理事・強化本部長>がいました。日本体育大学と当たる前に負けてしまいましたので、対戦は出来ませんでしたがとても早く記憶が残っています。

卒業してミズノ株式会社に入社し、数年後ソフトボール部門を立ち上げました。当時全国的にソフトボールが盛んになって来て大学も男女共急激に増えていきました。私の現役時代は全国に男女共で40チーム位であったと記憶していますが、現在では男女で233大学と隔世の感があります。

1996年アトランタ五輪で初めてソフトボールが参加した折り、ミズノのスタッフとして五輪に出張致しました。ようやく女子ソフトボールもここまで来たかと感慨深く思い、次は男子とその時は思いました。残念ながら北京五輪後ソフトボールは除外されましたが、2020年東京五輪での「復活」が現実味を帯びて来ました。私の夢は、五輪男女揃い踏みで

す。決して遠い夢の話でなく、近い将来現実になると確信しています。

そういった中で今後大学ソフトボールの果たす役割は大きなものと考えます。米国でのファーストピッチは大学がすべてといっても過言ではありません。日本でも更に大学が栄えることが日本のソフトボール界の発展に繋がると考えます。その為にはいろいろ方策があると思いますが、例えばインカレ優勝チームは米国遠征し全米選手権優勝チームとの対抗戦をやるとか。逆に、全米選手権優勝チームを日本に招待して日米対抗戦をやるといったことが日本の大学チームの大きな目標となります。又、そのことが2020年東京五輪、そ

の次の五輪での日本代表チームの強化にも繋がると確信致します。

それからインカレ開催地の固定化です。生涯スポーツと違い競技スポーツはメッカが必要です。ソフトボールの盛んな都市での継続的な開催がメジャー化する近道と考えます。いろいろハードルがあると思いますが、近い将来是非実現して戴きたいと念願しております。

最後に今後益々全日本大学ソフトボール連盟のご発展、ご隆盛と各大学ソフトボール関係者のご健勝、ご多幸を祈念してご挨拶とさせていただきます。

専門誌も魅了されて半世紀

ソフトボール・マガジン編集部編集長 山内 浩 太

このたびは全日本大学ソフトボール連盟設立50周年、誠におめでとうございます。貴連盟や加盟チームの皆様のご協力もあって小誌が成り立っているといっても過言ではありません。この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

小誌発行のスタートは1978年（昭和52年）7月号になります。この創刊号では技術特集「ソフトボールの技術 日本と世界」と題し、日本体育大の下奥信也部長兼監督に10ページに渡って投球技術について解説していただいています。また、同年9月号では第12回全日本大学選手権大会（三重県熊野市開催）のゲームリポートを掲載しています。以降、インカレに関しては昨年の50回大会までの39大会を取材させていただきました。新参加者の私は直近2大会のみの取材ではありますが、選手の皆さんが作り出す“青春群像劇”に心を動かされ、一方でそういう時間をチームメート

たちと過ごせることをうらやましくも思いました。

一球一打に一喜一憂し、結果に楽しく笑い、悔しく涙を流す。社会から大人として認識される大学生がここまで感情をストレートにぶつけて勝敗を競う様子は、われわれマスメディアにとって心揺さぶられる対象でもあります。試合を撮るカメラマンも「高校生や実業団とは違った面白さや迫力がある」と言います。第12回大会からインカレ取材してきた編集部一同がそのように現場で感じ、誌面に反映させてきました。

また、大学のグラウンドに直接お邪魔し、普段の練習模様取材させていただく機会も多々あります。私に限れば小誌編集部へ異動して初めての取材が、愛知県のとある大学でした。右も左も分からない私に対して監督や選手のみなさんが懇切丁寧に教壇くださり大変感謝いたしております。以降も数々の大

学に足を運びましたが、チームによって魅力や特徴がさまざまで、こうしたみなさんの姿を誌面で伝えるのもわれわれの役目だと考えております。

マスメディアとして一線を引いて報道し、提言させていただくことにこれからの50年も変わらず、国内唯一の専門誌としてそこを崩

すわけにはいきません。ただ、大学生選手・チームが生み出す魅力や熱に、立場を越えて引き付けられることもまたこれからの50年も不変でしょう。ますますの発展を心より期待しております。

結びにこのたびの貴連盟50周年、あらためてお慶び申し上げます。

ソフトボールとの関わり方について

元学生委員長 石 井 新 菜（専修大学2011年3月卒業）

現役学生の皆さん、卒業後のヴィジョンをどのように描かれておりますでしょうか。

大学を卒業し、社会で活躍されている卒業生の皆さんは、ソフトボールとの繋がりをどのようにお持ちでしょうか。

当然のことですが、プレイヤーを続けるだけがその道ではございません。指導者やチームの責任者、サポートスタッフといった役割で直接的にチームと関わらなくても、間接的にソフトボールに関わり、貢献することは色々な方法で可能だと思います。また、各々のライフステージに応じて、「出来る時に、出来ることを」是非、行って欲しいと思います。前例などなく、道は見えないかもしれませんが、しかし、積極的にチャレンジして欲しいと思います。なぜなら、私たちは「ソフトボール」という共通言語を持っているからです。

私たちの「ソフトボール環境」はどのようにして、今日を迎えたのでしょうか。何も無いままに、全日本大学連盟は50周年を迎えることはできなかったはずです。インカレも、地区のリーグ戦も、自分のチームも、何も無い0から作り上げたのは「この私だ！」と言える方はごくごく限られた方ではないでしょうか。歴代の先輩方にも、現在を支え、未来への橋渡しをしている現役役員の方々にも感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、こんなことを述べている私は、偉そうなことを言える立場ではございません。東京都大学ソフトボール連盟でリーグ戦や地区のリーグ戦の運営に携わるチャンスをいただき「チームのメンバーとして」以外のソフトボールに携わる視点を持ちました。インカレには学生役員として参加したことが私にとっての「インカレ」です。「トライ&エラー」の精神で、チャレンジさせていただいたことは全てが上手くいったことばかりではありませんし、迷惑をかけたことも多々ありました。周りの方々の温かいサポートに、救われたこと、計り知れません。「ずっとソフトボールに携わり続けること」の難しさも身を持って知りました。

ただただ、私が思うことは、チームで、所属地区の東京で、地区の枠を超えて見せていただいたインカレで、それぞれ思ったこと、感じたこと、「こうなったらもっと良くなる！ソフトボールが輝く！」ということをどれか一つでも実現に近づけること。どんな些細なことであっても、自分が「出来るときには出来ることを」、先輩方、同期の仲間、後輩たちへの「感謝の気持ちは行動で返していきたい」と、その一員でいたこの節目を境に、再度、心に刻みました。あえてお祝いの言葉ではなく、感謝の言葉とさせていただきます。

大学ソフトボールに関わっての思い出と将来への期待

京王観光株式会社神奈川北支店 田 高 直 人

全日本大学ソフトボール連盟創立50周年、心よりお祝い申し上げます。京王観光は各競技ごとに専任担当者を設け大学を中心に大会、遠征、合宿の手配等、多方面から、学生の皆様のサポートをさせて頂いております。競技を愛し、チームの歴史を知り、そのチームの特性やニーズを理解することで、最高の環境をご提供し、最大のパフォーマンスを発揮して頂くことを第一目標に掲げ、日々努力しております。お陰様で近年、多くの大学よりご用命を頂けるようになりました。これは監督始め、学生の皆様からの心温まるご指導、ご助言の賜と改めて厚く御礼申し上げます。

大学ソフトボール界のお手伝いをさせて頂くようになりまして、早いもので10年の月日が経過いたしました。振り返りますと強く魅りますのが、それぞれの年代、それぞれの大学、それぞれの主務学生様のお顔です。チームのことを第一に考え一生懸命ご自分の責務を果たしておられました。昼夜を問わず篤く凝議したことも数えきれません。『勝利を掴み取る』というチーム全員の同じ目標に向かい、監督のお立場、選手のお立場、主務のお立場、様々な責務があたりだと思えます。その中で私は、いつもの瞬間も主務の学生様の

横顔をみて参りました。練習中、試合中、結果が出た瞬間、その眼差しはいつの時もチーム全体を見守るようにみえました。その姿をみておりますと、業者の立場ではありますが、皆様のお仲間に入れて頂いた様な気が致します。同時にソフトボールファンの一人として、携われたことを大変光栄に思います。

お若い学生の皆様が、それぞれのお立場でソフトボールという競技を全うし、様々な経験や感動を積み重ね、それを財産として社会に旅立たれます。私はそんな学生の輝き溢れる大学生活の1ページに携わることが出来るこの仕事をさせて頂き、大きな喜びと張り合いを感じます。この気持ちを胸に、今まで以上に皆様のお役に立てますよう、真心と誠意を持って今後もお手伝いさせていただきます。

豪快で迫力のあるピッチング、スピード感溢れる試合展開、また学校行事や職場のリクリエーション等でも親しみのある、そんな魅力のあるソフトボールという競技を『大学』という無限大の可能性を秘めたフィールドで、さらに繁栄されますことを期待しております。来る2020年、ここ日本で皆様とご一緒に夢を見られますよう、心より願っております。



第3章 未来に向かって

～座談会：大学連盟はこれからどこへいく？～

〔進 行〕 森田 啓之（事務局長／兵庫教育大学）

〔参加者〕 二瓶 雄樹（東海地区常任理事／中京大学）

濱 貴一（九州地区常任理事／熊本学園大学）

伊勢 幸広（高知工科大学）

増淵まり子（淑徳大学）

東 美幸（東海学園大学）

西村真由子（大阪国際大学）

久保田豊司（近畿地区常任理事／大阪国際大学）

高橋 伸次（理事長／高崎経済大学）

水谷 博（理事・記録広報部長／元、至学館大学）

注）（ ）内は、学連職と所属大学

森田（司会）●今日は、座談会「未来に向かって／大学連盟はこれからどこへいく？」にお集り、ありがとうございます。皆さんは主にこれからの学連を担っていく方々ですので、色々と夢を遠慮なく語っていただきたいと思います。話の方向ですが、未来に向かってと考えると、「日本におけるこれからのソフトボール競技の普及や発展」に関することが一番大きく位置づいてくると思います。その中に、われわれ学連のやっていることがどう絡んで、どのように今後展開すべきなのかあたりについて議論いただけたら幸いです。



1 全日本大学選手権大会（全日本インカレ）のありかたと今後

森田●まずは、学連の最高峰の大会である、全日本インカレの今後について先般検討会が持たれたと聞いていますが、そのあたりから話をスタートできればと思います。

二瓶●高橋理事長の指示で、今年度1年間かけて本日の参加メンバー＋αで検討を行ってきました。趣旨は、インカレを活性化（いま

以上に盛り上がるものに）したいということです。結論としてコンクリートされたわけではないですが、3つの観点で議論してきました。1つは対戦方法をどうするかです。トーナメントなのか、リーグ戦なのかですね。また、どのように対戦を決めていくかです。2つ目は時期です。今の時期が妥当なのか、他によい時期はないのかといったことです。最後は場所です。検討委員会としては「聖地化」ということを念頭に置きつつ、その場所をどのように決めていくのかと。



そのなかでも、一番白熱したのは対戦方法です。シード権ということも含めまして、今のフリー抽選による対戦でよいのかなど、多くの意見交換がありました。原案（たたき台）、参加チーム数は現行の32を維持しつつ、予選リーグの上での決勝トーナメントという2段階がいいのではと提案しました。具体的には、4チームの8リーグ設定、4会場使用で1日1試合の予備日含めて4日間。このリーグ戦を9月の中旬あたりに行い、10月の中旬から下旬以降（予備日を含む3日間）に各

リーグからの勝ち上がり2チームで決勝トーナメントを行うというスタイルです。

伊勢●予選リーグをやって、何週間か後に決勝トーナメントを同じ会場でやるという感じですか。



二瓶●会場は別でも構わないとは思っています。ただ、テレビや雑誌といったメディア関係の方に聞くと、その間が1週間だと取材がしにくいと。「インカレを通じて、大学ソフトボールの知名度を上げる」という大きなテーマを考えると、残った16チームにフォーカスを当てて取材してもらうためにも、間は最低でも2週間は必要と考えます。

森田●今のお話を聞くと、その年の大学No.1を決めるには、「一発勝負」ではない形の方法を可能な限り入れ込んでいきたいということですね。

高橋●インカレも最初の頃、女子はチーム数が少ないときには、リーグ戦というのもありましたね。

増淵●4年間インカレに出場した立場からすれば、予選リーグ戦を実施することは1回負ければ終わりではないのでチャンスの拡大にもなりますし、見る側にも色々な大学のソフトボールをよく知ってもらう点では良いことだと思います。その一方で、やはり一発勝負だからこそ、やる側も応援する側もそこに一喜一憂できるところがあるっていう魅力ですよ。どちらがいかについて、実は私はまだ考えが絞れてないんです。



高橋●ご存知の通り、他種目でもインカレをやっています。全国にどれくらい大学チームがあって、その中でインカレには何チーム出ているのか、つまりチームがインカレに出場できる確率をちょっと調べてみました。大学野球の場合は377分の26で6.8%、サッカーは419分の24で5.7%なんですよ。大学ソフトボ

ールはどうかというと、去年の登録では男子が134分の32で23.8%、女子の場合は101分の32なので31.6%で、約3チームに1チームがインカレに出場できています。そこに大学ソフトの良さという特徴がありますね。しかし、「大会の権威」を考えると、出場チーム数を縮小させるということも一つの手ですが、他種目のような割合にすると、男子が9チーム、女子が7チームぐらいになってしまいます。要するに、「多くのチームに出場のチャンスを与えつつ、大会としての権威を高める」ために、予選リーグを踏まえた決勝トーナメントというやり方は、現実面を今は脇に置かなければ、意味のあるやり方だと思います。ただ、増淵さんのように、インカレに出たら「勝つか負けるかで、負けたら終わり」というような緊張感、緊迫感の中で大会に臨むっていうのも学生スポーツとしては大きな意味がある。「今日負けても明日勝てばいいんだとか、一つは負けられるよ。決勝トーナメントを睨んで、この試合はこう戦おう。」みたいなことも出てくるでしょう。リーグ戦をするのであれば、やはりインカレ全体のレベルを上げるためにも出場チーム数の削減を一方では考えておかねばならないと思います。

二瓶●検討委員会でも1年間集まって話をする中で、どのような方法で実施するのかの前には根本的なビジョン、あるいはミッションがどこなのかを明確にしなければならないということでした。概ね共有されたインカレのミッションは3つでした。一つは知名度を上げること、二つには競技力に考慮しつつ高いパフォーマンスが発揮できる、最後には競技人口を増やす・維持することです。その中で色々苦心して出てきた案が先程話をしたものなんです。

高橋●午後の常任理事会では、インカレ会場の「拠点化」のお願いを日本協会にしていけることを議論する予定です。検討会でも議論がなされたようですが、インカレの活性化や学

生の参画を含めると、開催場所についても大きな転換期に来ているとは確かに思います。

森田●リーグ戦というキーワードが出てきていますが、リーグ戦をあまり経験していない九州や四国地区、あるいは男子と女子という観点では、どう思われますか。

濱●そうですね。まあ地区による差があることももちろんですが、さらにと女子と男子の温度差も大きいと思います。今もそうですが、多くの男子



チームは「経済的な負担」が関心事の一つです。新たなやり方を聞きながら、監督としても、おそらく選手も出てみたいとは思いますが、平均的な男子チームにとっては、2段階の戦いは経済的にかなりハードルが高く感じられると思います。九州の大学がどうかって言われると、どんどん力を入れている大学もあるので、それはそれでよろしいかとは思いますが、どうですかね。

伊勢●私自身はチームの監督をしています。四国の中でリーグをというまでは引っ張っていませんし、これからも難しいかなと思っています。ですので、インカレでリーグ戦方式を採用するというのはすごく魅力を感じます。私がいます高知県はご存知の通り、男子でも昔からの名門チームが高校、社会人とありますが、四国全体としてはソフトボール熱っていうのは余り高くない。そこで、大学にまで入ってソフトボールもやる学生がいるかという、正直なかなか厳しい部分があります。ですので、きっかけとして全国を経験する中で、新たな仲間を作るというのは意味があります。特に、大学の男子チームは高校からのソフトボール経験者よりも、野球をやっていたメンバーが多かったりするわけで、提案いただいた全国レベルのリーグ戦でソフトボールの面白さを今以上に体感できれば、社会人になってもプレイを継続したり、さらには彼らの子どももということにもなるかも

しれません。東京ではソフトボールがオリンピックに復帰するかもしれませんが、長い目で考えると、ソフトボールというものを今以上に認知してもらうために思い切ったインカレの改革をするという点には魅力を感じます。

久保田●これまでもインカレに関しては、「前年度優勝・準優勝によるチーム推薦枠をなくす」とか「本当のチャンピオンシップであるためにもフ



リー抽選とする」などいくつかの変更を行ってきました。ただ、長年役員として関わっていると積み上げてきたものは崩しにくいから、そこを土台にいわゆるフルモデルチェンジじゃなくて、マイナーチェンジになってしまっていたと思います。もちろんこれまでのやり方の良さもありますが、それを打破して考えてほしいという期待感が検討部会に対してあったと思います。その意味では、二瓶さんを中心に議論してきたインカレ改革案は、パイロットケース的に各地域の上位だけを集めてNo. 1を決める企画（王座決定戦）としてやってみるというのもありかと個人的には思います。そこにはマスコミにも情報をうまく流しつつですね。

高橋●確かに、50年続いてきたインカレをガラリと変えましょうっていうのも一つの手ですけど、これは結構エネルギーがいります。つい先日まで「プレミア12」という世界野球をやっていましたが、ああいうような形で、16ぐらい各地区の秋のチャンピオンを中心に集めて、どこか1ヶ所で実施するということは、予算を抜きにすれば十分考えられますよね。大学連盟設立50年を契機とした新規事業としてですね。

東●今のお話とさっきの拠点化の話に関して思うことがあります。日本リーグでやった時には、結構各地区に行かせていただきました。その経験からすれば、地域によってはソ

フトボールを会場に来て初めて知るっていう方も多く、認知度を高める上では可能な限り全国で開催することには大きな意味があると思います。ですので、例えばチーム数を減らした形での新たなリーグ戦でやるのを聖地化して、現在のインカレはそのまま動くというのも一つの考え方としてあるのではないのでしょうか。



森田●ここまで全日本インカレのありかたに関連した大会の持ち方が議論されてますが、その趣旨はここ15年近く学連として後援してきた「オープン大会」がそれに近い部分もあると思うのですが、水谷先生、いかがでしょうか。

水谷●前理事長の末井先生から「東海オープン」をやってくれないかというのが、最初だったと思います。末井先生的には、全日本インカレに出場できないチームを集めて、春に大会ができないかという話でしたが、私はそんなチームを集めるのは無理だと思いました。色々な意味で面白くないだろうと。逆に、私は高校野球の春の選抜のようなイメージでやろうと思ったんですが、これも難しかったです。

高橋●現在やっているいくつかのオープン大会は「全日本インカレとは別のねらいを持たせて、かつ地域の枠を越えて活性化もねらう」という趣旨でスタートしたと思います。ただ春先の場合ですと、メンバーが揃わないチームも多く、どうしても人数に余裕のあるチーム中心になってきて、最近はまだ強いチームが集まってさらに力をつけていくようになっています。今後は、オープン大会もそれぞれコンセプトをはっきりさせて展開していかねばならないですね。

二瓶●新規大会の可能性についても、検討会で色々話が出ました。ただ、どのあたりの時期が適切かについては、既に色々な大会や試合が設定されているので、難しいところはあ

りましたね。春先、あるいは秋の終わり等々。

2 大学ソフトボール、並びに大学連盟の責務・課題と展望

森田●私は、「大学ソフトボールは高校とは違う。企業とも違う。」と聞いたりしますが、これ凄く重要なことだと思います。「大学でソフトボールをして何を得させよう（学ばせよう）としているのか」、そこを可能な限り大学で指導する人間は共通理解を持たないといけないと思うんです。ソフトボールに限らず、大学スポーツのあり方が批判的な側面も含めて新聞等で話題になっている昨今、この観点でそれぞれ感じる、思うことについて話をして下さい。

久保田●非常に重要なテーマだと思います。私が考えることを一言で表現すると、「競技性」と「社会性」をどう高めていくかではないかと。「競技性」についてはインカレ含めた大会や試合に向けてという部分ですが、一般的に「社会性」のところをどう高めていくのかについては漠然としたまま指導している場合が多い気がします。チームの指導者はチャンピオンスポーツとして追求することはもちろんですが、それにとどまってしまうから問題が起こることも事実で、大学の間の数年間を踏まえて、「どのような能力を持った人材を社会に送り出そうとするのか」を明確にして日頃から経験させたり、指導したりしなければならないと思います。

森田●具体的な話になりますが、私は幾つかのスポーツ系学部・大学で専門科目の講義をしていて、彼ら彼女たちの発言に驚くことがあります。私の5時間目の講義が終わると、「ああ、きょうはクラブがオフ（休み）！やったあ。」と言ってる子がほとんどなんです。好きでやっているのに、指導者に強制されてクラブをやっているのかなと。しかし、この言葉は今の日本のスポーツやクラブの現状を物語っているのではないかと感じます。最近、スポーツにおいて『自律』・『自立』したプレイヤーの育成がよく叫ばれていますが、

現状は疑問符が付くクラブ運営や指導に出くわすことはありませんかね。

二瓶●ちょうど今、ソフトボールマガジンに私、舟山さん、木田さん、佐藤さんの4人で連載をしています。その中に「チームマネジメント」という部分があります。舟山さんが「管理と自主性のバランス」が常に大事であると経験的にもおっしゃってしまして、私も同感です。自由にやれ！というのではなく、ここはこういうふうにしてやるけど、あとはその具体的中身に関しては任せるとかですね。そういう、管理の中での自主性を促していくということは、マネジメントの世界でも非常に主張されています。最重要キーワードは「自主性」ですが、そこに至らせるまでのプロセスをどう組み立てるかというのは、やはり俯瞰的な目で見ている我々の立ち位置として非常に重要じゃないかと思います。

あと最終的には、単に大学ソフトボールをどうするかではなくて、ソフトボールを通してどうスポーツ社会、あるいは一般社会に貢献する大学生の姿をイメージできるかだと思います。スポーツ文化を醸成するという今日の潮流の中での、大学ソフトボールの立ち位置を明確にしていかなければならないと切に感じます。

濱●私は主に男子学生と関わる中で、色々な大会の運営や裏方のことについて余りにも知らない過ぎるところが気になっています。大学でソフトボールをして、社会人に育てていくことが不可欠だと思います。具体的には、地域とのかかわりをもっと積極的に持つことで、課外活動としての学びにも幅と深みが出ますし、先程来出ていますボランティアのような部分にもつながるのではないかと。私自身もそのあたりに取りかかりながら、学生も頑張ってもらいたいと考えています。

伊勢●私は立ち位置的には母校の職員として後輩たちの指導にかかわっていて、彼らたちに何が残せるかといったときには、先輩たちがやってきたもの（結果や成果）を後輩たち

に引き継いでいく指針に自分自身がなればと思っています。ただ、最近の学生の気質の変化には少し頭を悩ませている部分もあります。主体性と言ったときに、今の彼らにはほばないんですね。おそらく、その主体性が言葉自体イメージもわからない彼ら彼女たちにどう主体性を描かすのかは非常に難しい。ですので、管理というわけではないのですが、「自分たちが案を出せないんだったら、これをしてみなさい。」「これで不満があれば、自分たちで変えなさい。ただ、なぜ変えたいのかを言ってきなさい。」というやりとりを、ここ数年続けています。衝突も結構ありますが、学年が上がって上級生になるにつれて、少しずつ理解する学生も出てきます。色々な苦労や葛藤をする中で、少しずつ学生は気づくのではないだろうかと、絶えず自問自答しながら今携わっているところです。そのためにも、全国レベルでの試合数を増やしたり、社会的な経験を積ませたりすることで、まずは「考え方」・「心」の部分を育てたいと考えています。

西村●私自身は、大学生のときにちゃんと考えてやっていたかは微妙ですが、いま久保田先生と一緒に指導している中では、「スポーツをやっていたら勝手に人間



が良くなる」とか思われがちなんです。現実には学生を見ると、「クラブがあるから授業さぼりたい」という子もいます。ですから、「こんな力をつけて卒業してほしい」ということを大前提にして、その子の様子を見ながら、いちいち怒るのではなくて、失敗も含めて色々経験させながら一步一步成長の後押しをしていくことを心がけています。

あとちょっと全然違う話になりますが、今は行われていない「東西対抗」ですが、出場した立場からも貴重な場だったと思います。色々な経緯があつて無くなったと聞いていますが、その年の東と西のトッププレーヤーが

競い合う場をテレビ中継等が可能であれば行えば、今の学生にも大きな目標、そして成長の場にならないかなと考えます。

東●高校や実業団と、大学は何が違うかと言われると、まず、大学では選手も指導者も、勝利至上主義な部分が大きい高校とは違う関わり方が可能だし必要だと思います。高校は各都道府県一つしか全国大会に出場できないので、狭き門に向かっての競争です。それはそれで意味があると思いますが、その上の大学レベルでは何が違うかを、久保先生が言われた「競技性」と「社会性」で考えてみると、「競技性」の部分は話は簡単で、練習やトレーニングの量にしろ質にしろ、増やしたり深めたりはできます。一方で、「社会性」を考えると大きな課題があると思います。中学、高校とずっと勝利至上主義でやってきた子たちが多い中で、例えばですが、運営に回ることが競技を邪魔するものなのか、あるいは競技レベルが落ちる子がやるものなのか、そういう先入観が強くあると思うんです。かといって、大学やめてからソフトボールを継続する子がどれだけいるかというところと本当に一握りで、逆にその運営の方に敢えてまわった子たちの方が実は他の何かを見つけて社会的にはステップアップしているなんてことも見られます。そういう意味では、大学ではソフトボールについての一面的な捉えを壊しつつ、多面的にソフトボールに見れる、関われる人材を育成すべきではないかと思います。それぞれのチームが所属する学部によって、教育や経営、経済等々、大学にあった多様な活動を展開されるとともに、それらを大学ソフトボール界全体として互いに認め合う雰囲気が出てきてほしいです。

あるいは、地区の学連レベルで統一してモデルケースというか、何かこういったことをやりましょうというの也有りですね。今、東海学連では、学生が主体になってFacebookをやっています。すると、その文章を読んでいると徐々にうまくなっていることが分かりま

す。彼女は将来的に指導者になりたいというのがありますが、その子にとってこの役割はすごくプラスになっていると、私は目の前で感じています。さらに、競技をやりながら運営をやることによって、将来何がやりたいかが見えてくることもあると思います。多くの大人と関わる、例えばテレビ関係の方と関わることで、メディアに興味のない子が、もしかすればその方面に進みたいということになるかもしれません。卒業後のキャリアを意識した指導や関わりが大学ソフトボールでは求められるのではないのでしょうか。

西村●先程話題になっていたインカレですが、その形態をリーグ戦＋トーナメントにすると期間が長期化します。そこで、学生が企画や運営に関われるようなことをしていけば、それも教育的な部分にもなってくるのではと思います。試合に出るということだけでインカレに出るのではなくて、リーグ戦までは少し学生の力を借りながら運営をしていき、トーナメント戦になったときにしっかりした審判さんとかスコアラーをお願いして、大会の価値を高めるとともに、大学生としての教育にもなりうるのではないですかね。

高橋●それに関しては、私も今回の50周年記念誌に少し書かせてもらいました。私は大学連盟選出の日本協会理事ですので、色々な種別の全国大会に行きますけど、どこでもスタッフ不足と高齢化です。審判員も数百人単位で毎年減ってますし、日本協会もそれに頭を抱えています。このような「支える」人材というのを実は大学連盟は余り輩出してこなかったんです。指導者だとか、選手はたくさん輩出してきましたが、これからの大学連盟の責任というか、新たな任務として「支える」人材を世の中に輩出していくことは大事なことだと思います。インカレでは数年前からPRチームとして、選手として出るだけでなく、広報を担当するスタッフとして参加することを少しずつ位置づけてきたんですが、これからは審判員としてインカレに出るとかね。記

録員としてインカレに参画するとかっていうような仕組みができないかなと思っています。これは簡単なことではないですが、これから大学連盟のあり方の1つかなというふうには感じています。

東●例えば、その企画とか運営に関わる学生たちをしっかりと組織化をして、履歴書に書けるくらい重要であると位置づけることができれば、学生の意識も変わりますよね。インカレ優勝したら履歴書に書きますけど、何か運営のほうでもそれくらい書けるような。

森田●年明けにある箱根駅伝はその典型ですね。箱根の学連委員をやっているというのは、企業はプレイヤーとして出ると同じぐらいの価値があると見ていると聞いたことがあります。それだけの様々な社会的経験をしているという評価でしょう。

高橋●もちろん現役の学生だけじゃなくて、OBでもいいと思います。学生時代に養成して卒業してからもインカレに関われるために、連盟で人材バンクみたいなものを作って、日本協会に貢献していくというような形になっていくといいかなと。夢みたいな部分と思われるかもしれませんが。

水谷●同感です。非常に難しいところだと思いますが、本来は大学連盟とすれば、運営役員がいる、審判団もいる、記録員もいる、広報もいるというように、全部備えていることが望ましいです。東海地区では、東海学連主催で記録員の認定講習会をやっているんですけど、審判の講習会も同時に提案したんですけども、記録員については全会一致で賛成でしたが、審判員については全会一致で反対されました。審判員に対する学生の意識を高めていくことは大変です。あと、インカレ運営への学生の参画ですが、これは地区にもよると思います。今年の三重は東海地区だったんですけども、学生役員は一人も貢献できていません。豊橋でやったときは全球場に補助員を付けてやりました。開催地の地区学連の基盤があるかどうかもあるところなんです。

二瓶●学生の主体的活動や参加、さらには新しいソフトボールへの関わりという点で少し紹介させて下さい。東海地区では、ニンジンぶら下げ作戦というものをやっております。これは水谷先生がずっとやられてきたことでもあったんですが、学生の中でユニット制（8つ程の）を組んで活動させています。特に、賞を与える部門が2つあって、一つはベストマネジメント賞、もう一つはベストマーケティング賞です。そういう言葉を履歴書に書いたとしたら、採用を考えている企業的には、記録員とか運営員というよりは目が行くと思うので、マネジメントやマーケティングという文言を使っています。君はマーケティングをやってきたの、それで賞をもらったのかというようなことにもつながるのではないかと思います。今はこの二つの賞を設けてやっています。

これまたちょっとそれるんですが、ファン投票というのもやっています。プログラムを買うと投票権があって、好きな選手に投票できるという仕組みです。そこには審判さんの賞も入っています。審判さんにもモチベーションを持ってもらえたらということで、賞状に加えてちょっとした景品（ブラシくらいですが）を付けたりしています。他の賞もそうですが、特に運営を支える人たちにも光が当たるようにと考えています。

高橋●海外のニュージーランドあたりでは、優勝したチームの表彰はもちろんだけど、アンパイアに何か賞をあげたり、グラウンドキーパーに賞をあげたりということ、最後の表彰式のときに和気あいあいとやってましたよ。家電製品みたいなものを商品として渡したりしてね。

森田●東海地区はここ数年間、いい意味で変わってきてるなあと思います。歴史のある東京や関西も新たに考えていかねばならない部分がありますね。と同時に、一方では地区の活動においても役員とかチーム数は「二極化」してて、今ある地区の再編についても考えざ

るを得ないところまで来ています。地区の活性化という際に、地区をどの単位で考えるかということも今後は検討しなければならないと感じています。

増淵● ちょっと個人的な質問になりますが、全日本インカレでクリニック（技術講習会）とかを開催することは可能なんですか。

森田● かつては、確か15回大会あたりから何年間か実施したことがあるようです。開会式のある日に。

増淵● 今後、そのようなことが可能ならば実施していったはどうでしょうか。日本リーグでもやっていますが、ソフトボールの人口を増やすために、多くの人に知ってもらうためにも。その地区の子どもを対象にすると、大学生側も教えることの楽しさを知るかもしれないですし、子どもたちに関してもクリニックを受けた大学や選手の名前を覚えて応援行こうと思ったりすると思うので、インカレのときに可能であればクリニックを開催するというのもいいかなと考えます。指導者になって今まで7カ月なので、ここで話題になっている「大学で自主性を育てて伸ばす指導」についてはしっかりした答えがありません。ただ、子どもも学生も何かちょっと与えたことがきっかけで、すごく輝くこともあると思うので、その与えるものとは何なのかを考えながら実践しています。

森田● ここ10年以上、学連の「記録・広報」の中心として関わってきて下さった水谷先生、そして関西の女子をリードしてきた久保田先生からも一言お願いします。

水谷● 記録の整理や広報をなぜ始めたかというと、今回50周年ですが、意外に過去の写真等がないんですよ。他の団体や協会、クラブの何10年史を見ると、写真がいっぱい載っているにもかかわらず、何で大学連盟は写真を撮って残してこなかったのかと。組織としてきっちりそういう記録や写真を残していく必要があるのではと思い、そういう意味でも機関誌のウインドミルも発案しました。それで、

私が言いたかったことは東さんが言ってくれたんですが、言葉を変えていうと、スポーツというのは「する」・「みる」・「ささえる」なんでしょうけども、「ささえる」ところの人材育成も含めて、言葉をかえて言うと、「競技性」と「社会性」のところを学連がしっかり目的意識的に担わないといけないと強く感じています。「競技大会だけやっていればいいのではない」ということです。これまでの議論を聞いていると、「インカレーつ変えよう。大会のやり方を変えよう。」と思うと、スポーツの「する」・「みる」・「ささえる」全部に引っかかってきちゃうんですね。したがって、変えていくことは大変な作業ですが、50年をきっかけに若い人のパワーに期待したいところです。特に広報的には、さっき出ていたFacebookやツイッターやホームページがどういうふうになればもっとうまく機能できるのかを考えてほしいです。全日本学連ホームページ上でのFacebookが2年経ちましたが、アクセス数はまだまだです。今後、例えば協賛金をもらおうというときにも、こういう数は重要ですので、若い発想でどんどん変えていってほしいと願っています。

久保田● これまでの議論を聞きながら、インカレ含めた「競技」という観点では活発な意見が出てくるのですが、そのベースとなる学連組織や体制の今後のあり方っていうようなところ、つまり、学生スタッフや教職員スタッフの育成という話になったときには、その基盤が整っていないと感じます。また、男女ともにある意味で大学ソフトボールは「二極化」している現状も否めず、大学全体を見渡して考えると、トップの意識だけを高めていくのではなくて、やはりそれを支えている多くの大学がそれぞれでどのような形で活動しているのか、そっちも活性化していく方途をついても考えていかねばと強く思いました。

森田● では、高橋先生に理事長として、最後の感想とまとめをお願いします。

高橋●「ささえる」という観点で、面白い例を紹介します。うちのチームのある学生が、ある日、「審判員の資格が取りたいんですけど、練習休んで講習会に行っていていいですか。」と言うんです。その学生は選手としては中心的な戦力になるような子ではなかったんですが、一生懸命休むことなく遅刻することなく、それまでやっていました。もしかしたら、自分の輝ける場所を見つけたかったのかもしれませんが。チームメイトも最初は先ほどの話ではないですが、選手として見込みがないから、何かそっちの方に逃げたのかみたいなニュアンスでとらえていたところがあったんですが、彼が3種の資格をとって、そして実際にオープン大会で審判をやったり、あるいは春秋のリーグ戦にもかかわったりと、審判員として活躍するようになってきます。そうすると、当然スキルが少しずつ経験とともに上がってきて、何ていうんですかね、彼自身のパーソナリティも随分と明るく元気に前向きになってきました。彼はある意味有資格者ですから、チームメイトもだんだんと違った見方をするようになってきます。今では、群馬県協会の審判部から物すごく重宝されて、土日の練習に来れないくらいです。あちこちの大会に引っ張りだこで、駆けずり回ってます。平日の我々の練習の中でも審判をやってくれるんですが、もう全然オーラが違う。昔だったら、仲間の投手が、「ええー、今のがボール？」とか言ってましたが、今はもう何も言いません。話が少し長くなりましたが、このような人材をこれからは大学から出していかなきゃいけないという



ことです。何に貢献できるかって言えば、やはり「社会で生きている」ということを自覚できるような人材を育てる、世の中に出していければいいと思います。幸いにソフトボール競技は生涯スポーツとして非常に定着しています。そんな生涯スポーツを実践している人たちを支えていくような人材もこれから大学連盟が担う、そんな装置になるべきではないかなと考えます。

ちなみに、現在、大学連盟には「強化」部会というのがあります。それはどうやって競技力向上を図るかという話ですが、これまでの強化部会は「アスリート部門」として銘打って、もう一つ新たに、「コーチ・マネジメント部門」みたいなものを立ち上げることも考える時期に来ているかもしれません。選手として頑張ってもらう側面と、もう一つは選手ではなく、指導するだとか、あるいは役員、審判、記録員として活動していくような方面を強化するという感じです。そこに予算をつけて、場合によっては資格をとるために、多少なりとも助成するとかですね。そういった仕組みができ上がってくると、学生も選手として見込みがないからそちらに行ったというのではなくて、そういうことが大事だと認識できるかもしれません。実際に、そういう人達がいなければ試合さえできないことを明確に気づかせねばなりません、いつまでもお客様では困るのですから。大学連盟はこの二つの柱を全面的に強化していくようにこれから進むことができればと個人的には考えています。それがこれからの未来に向かっての一つの指針になれば幸いです。

本日は、皆さんありがとうございました。



事前に検討をいただいた若手の皆さん(敬称略)

後列左から：増淵まり子・木田京子・

長澤淑恵・東美幸・西村真由子

前列左から：二瓶雄樹・舟山健一・吉末和也

第4章 記録・資料集 ～全日本大学ソフトボール連盟50年の歩み～

全日本大学ソフトボール連盟年表

年度		代表役員	記 事 (日本協会関係・ルール変更等を含む)	登録校	
				男	女
	'26 S01		・大谷武一らによって普及されたプレイグラウンドボールが文部省制定の学校体操教授要目に採用		
	'33 S08		・第1回全米選手権大会（世界で初の大規模大会）		
	'45 S20		・日本軟式野球連盟の中にソフトボールが併置		
	'48 S23		・第3回福岡国体でオープンゲームとして参加		
	'49 S24		・日本ソフトボール協会創設、日本体育協会に加盟		
	'50 S25		・第5回国体（愛知県安城市）より正式種目（一般女子、高校女子、教員（男女混合））		
	'51 S26		・国際ソフトボール連盟（ISF）設立、日本加盟		
	'57 S32		・第12回国体（静岡県三島市）より一般男子正式種目		
	'63 S38		・国際ルール採用・ルール全面改訂、国際審判員の登場		
	'64 S39		・審判員登録制度の開始 ・東京オリンピック		
	'65 S40		・アジアソフトボール連盟（ASF）設立 ・第1回世界女子選手権大会（メルボルン） ・日本体育大学チーム部長兼監督の下奥信也氏が再三日本ソフトボール協会に「大学連盟」の必要性を力説する。年末に栗本氏（日本体育大学長）を会長、下奥氏を理事長として連盟の設立準備に入る。		
1	'66 S41	会 長：栗本義彦 理事長：下奥信也	・第1回世界男子選手権大会（メキシコシティ） ・日本ソフトボール協会との話し合いは難航したが、1月22日の理事会にて承認 ・学生数2000名以上の大学に対して、チームの有無と大学選手権参加希望の調査を実施し、男女約20校から参加希望の回答 ・11月、第1回全日本大学選手権大会を駒沢オリンピック記念軟式野球場で開催し、男子10校・女子5校が参加、男女とも日本体育大学が優勝 ・チーム登録費2,000円、選手登録費200円で、以後10年近く役員はまったく無報酬のボランティアで連盟を運営 ・出場大学はオープン参加	10	5
2	'67 S42	〃	・第1回アジア女子選手権大会（マニラ）	10	6
3	'68 S43	〃	・日本女子リーグが発足	9	5
4	'69 S44	〃	・岩野副会長の尽力で、この年から西日本大学選手大会を開催 ・アジア会議（台北）	12	4

年度		代表役員	記 事 (日本協会関係・ルール変更等を含む)	登録校	
				男	女
5	'70 S45	〃		14	6
6	'71 S46	〃	・アマチュア規定改訂、金属バット検定開始	13	5
7	'72 S47	会 長：松前重義 理事長：下奥信也	・松前重義氏（東海大学総長）が第2代会長に就任 ・財団法人日本ソフトボール協会設立 ・第1回全国総合男女選手権大会（伊那市）	12	5
8	'73 S48	〃	（特記事項なし）	12	5
9	'74 S49	〃	・第1回東西対抗戦を愛知県刈谷市で開催	15	7
10	'75 S50	〃	・女子登録は8校になり、トーナメント方式に変更	17	8
11	'76 S51	〃	・チーム登録費5,000円、選手登録費400円に改定 [ルール] 延長戦（14回）で勝敗が決しない場合、引き分け抽選方式を採用 ・ジュニアソフトボールルール（小学生用）発行 ・金属バット販売にSGマーク貼付を義務化	21	7
12	'77 S52	〃	（特記事項なし）	24	10
13	'78 S53	〃	・女子決勝戦（日体大と東女体大）が没収試合 [ルール] ランナーがベースに達しようとしているとき、野手は必ずベースの前縁の一部をあけなければならない。	31	11
14	'79 S54	会 長：松前重義 理事長：角田真一郎	・角田真一郎氏（早稲田大学）が第2代理事長に就任	34	13
15	'80 S55	会 長：岡田俊彦 理事長：角田真一郎	・岡田俊彦氏（日体大学長）が第3代会長に就任 ・男子は日ソ協の地区割りに準じて大学連盟独自の地区割りで予選を行い、インカレ予選を実施、本大会出場校は28チーム（女子はオープン参加のまま） ・雨天による日程変更で、1日3試合を実施 ・9回（延長2回）引き分けにより9人による抽選で勝敗を決定。 [ルール] DH制、再出場制を採用	57	20
16	'81 S56	〃	・女子準決勝（中京大×大阪成蹊女短大）戦、14回同点で9人抽選 [ルール] 打者のヘルメット着用義務化	84	25
17	'82 S57	〃	・チーム登録10,000円、選手登録費500円に改定 ・役員の出張に若干の交通費の支払いを開始 ・総会でグラウンド整備は両チーム3名ずつ、次の試合のために行うことを決定 ・大牟田大会（8月6～9日）で、7日に中支中学校で講習会実施（受講者：約300名） トレーニング：末井、 ソフトボール（大人の部）：下奥、 ソフトボール（子どもの部）：吉村。 ・「公認審判員必携」作成	84	25
18	'83 S58	〃	（特記事項なし）	96	33
19	'84 S59	〃	・オリンピック種目への募金活動開始	97	45

年度		代表役員	記 事 (日本協会関係・ルール変更等を含む)	登録校	
				男	女
20	'85 S60	〃	・第20回(坂出市)大会の第1日目夕刻よりホテルサンルート坂出で20周年祝賀会開催、大学連役員・顧問・日本協会・香川県協会などとともに全参加チームなど総勢130人の参加 ・開会式後ソフトボール講習会(参加者約130名) 講師:下奥、末井 対象:クラブ、一般男女、高校男女、中学女子 [ルール] インサイドプロテクターの採用、審判・捕手のマスクにスロートガード装着義務化、タイブレーク制採用	100	54
21	'86 S61	会 長:岡田俊彦 理事長:水野信義	・水野信義氏(日本大学工学部)が第3代理事長に就任 ・女子はオープン参加から地区予選を経ての18チームによる大会に変更 ・韓国から関俊基審判長が特別参加 ・1回戦終了後(午後6時~8時)講習会 講師:下奥、対象者は一般、高校女子など約100名 ・この年から、東日本大学選手権大会が開催され後援 ・第1回指導者認定会(高知)	102	63
22	'87 S62	〃	・日本協会から優勝旗・優勝杯・準優勝杯の授与 ・チーム登録20,000円、選手登録費1,000円に改定 ・ルールブックを日本独自のものに全面改編発行 [ルール] 打者・走者・捕手のヘルメット着用義務化	07	68
23	'88 S63	会長:一谷定之丞 理事長:水野信義	・一谷定之丞氏(園田学園女子大学学長)が第4代会長に就任 ・女子、インカレ出場チーム数を20校に増加 ・旅費規程を改定、交通費・日当・宿泊費を支給 ・一谷会長、病にて急逝(平成元年2月)	11	70
24	'89 H1	理事長:水野信義	(特記事項なし)	112	71
25	'90 H2	会 長:松田岩男 理事長:水野信義	・松田岩男氏(中京大学学長)、第5代会長に就任(8月) ・連盟規約を大幅改定 ・学生委員会が発足し、全国のインカレ予選戦評集を作成 ・25周年記念記録要覧を発行 ・関東北信越地区を関東地区と北信越地区に分離	19	75
26	'91 H3	〃	・インカレ出場チーム数、男子32、女子24に改定 ・第12回広島アジア大会の正式種目に決定 ・松田会長ボストンにて凶弾に倒れる。(H4年2月)	24	78
27	'92 H4	会 長:坂井正郎 理事長:水野信義	・坂井副会長(国士舘大学)、第6代会長に就任 ・故松田会長の尽力により、文部大臣杯の授与が実現 ・女子選抜チーム、ブラジルへ初の海外遠征 ・岡田顧問逝去	26	81
28	'93 H5	〃	(特記事項なし)	35	83
29	'94 H6	〃	・岩野顧問逝去 ・ブラジル代表との親善試合を主催(各地で11試合) ・チーム登録30,000円、選手登録費1,000円に改定 [ルール] ISF規準の新革ボール検定(いわゆる飛ぶボールの平成7年度公式使用球決まる)。	39	85

年度		代表役員	記 事 (日本協会関係・ルール変更等を含む)	登録校	
				男	女
30	'95 H7	会 長：坂井正郎 理事長：水野信義	・創設30周年を記念し、第1回全日本女子短期大学大会を東京で開催し、淑徳短大が優勝(以後、都学連が運営) ・30周年記念誌を発行 ・30周年記念式典を学習院大学で開催	143	88
31	'96 H8	会 長：大内敬哉 理事長：末井健作	・大内敬哉氏(中京大学)が第7代会長に就任 ・末井健作氏(姫路工業大学)が第4代理事長に就任 ・学連所属の吉野みね子(総監督)、武藤幸政(トレーナー)、高山樹里(日本体育大学)、持田京子(日本体育大学)、藤本佳子(東京女子体育大学)、アトランタオリンピック出場(4位) ・10月、前副会長下奥信也氏逝去 ・「ルール・ケースブック」発行 ・日ソ協会公認指導者資格の文部大臣認定公認ソフトボールC級スポーツ指導員への移行が承認	147	91
32	'97 H9	〃	・中平副会長(四国学院大学)、急逝 ・連盟機関誌「ウインドミル」を創刊 ・H10年2月、男子選抜チームニュージーランド遠征(ニュージーランド：ディーンシットーナメントに参加) [ルール] 一塁ベース：ダブルベース	149	90
33	'98 H10	〃	・第9回世界女子選手権大会、第13回アジア競技大会の日本代表として高山樹里(日本体育大学)が参加	148	91
34	'99 H11	〃	・登録規定を改定し、専攻科生と大学院生の選手登録を承認 ・東京女子体育大学、アジア女子選手権大会準優勝 ・H12年2月、女子選抜チームオーストラリア遠征	144	86
35	'00 H12	〃	・原口常任理事、病にて急逝(4月) ・増淵まり子(東京女子体育大学)、アテネオリンピックで銀メダル獲得 ・全日本大学東西対抗は第27回をもって終了 ・連盟公式ホームページを開設 ・この年から阪神学生女子オープンを後援 ・この年から「峠のまち」Matsuida Cupを後援	141	85
36	'01 H13	〃	・全日本女子短期大学大会は第7回をもって終了 ・関東、中国、九州各地区で秋季大会が開催され、全9地区で秋季リーグ戦もしくは秋季大会を開催 ・H14年2月、男子選抜チームニュージーランド遠征	141	85
37	'02 H14	〃	・この年から東海オープンを後援 ・この年から大学女子学生大会in八幡浜を後援 [ルール] ①外野フェンス距離 (ISF)：女子220ft (67.06m)、男子250ft (76.20m)。 ②投手板から本塁までの距離：女子43ft (13.11m)	142	87



年度		代表役員	記 事 (日本協会関係・ルール変更等を含む)	登録	
				登録数	
				男	女
38	'03 H15	会 長：大内敬哉 理事長：末井健作	・第8回アジア女子選手権に向けて選手選考会を実施し、選手団を決定するも、SARS等により大会中止 ・チーム登録規定の改正；「チーム登録は、同一大学1チーム（男・女別）とする。ただし同一大学であってもキャンパスの所在地が異なる場合は、キャンパス単位でチーム登録することができる。」 ・静岡国体でドーピング検査導入。 [ルール]「ベンチ入り25名」、「5回得点差10点コールド」、「DP／指名選手」制を採用	144	85
39	'04 H16	〃	・4月、末井理事長は日本ソフトボール協会役員選任規定の第6条（全日本大学連盟の代表として）に基づき理事に就任 ・4月、従来の指導者制度から日本体育協会「公認スポーツ指導者制度」に移行。 ・学連所属ジュニア世代の選抜チーム、第3回アジア女子ジュニア選手権大会優勝 ・大学日本代表チーム、第1回世界女子大学選手権大会第3位 ・この年から国公立大学オープンを後援 ・シドニーオリンピック第3位(学連OG：日本体育大学高山樹里、東京女子体育大学佐藤理恵)	143	88
40	'05 H17	〃	・学連所属のジュニア世代を主体とする全日本チーム、第7回世界男子ジュニア選手権大会準優勝 ・ウインドミルNo.9－創立40周年記念号－発行 ・全日本大学選手権大会の新しい地区別出場枠制度が発足 [ルール]「5回得点差7点コールド」を採用 ・30周年記念式典を学習院大学で開催	142	87
41	'06 H18	〃	・全日本インカレに学生役員が参加 ・第3回男子選抜チーム、ニュージーランド遠征 ・第2回世界大学女子選手権大会（3位）	147	92
42	'07 H19	〃	・第1回アメリカンチャレンジシリーズ（男子選抜チーム）、第2位。 ・第24回ユニバーシアード大会（タイ、女子選抜チーム）銅メダル。 [ルール] 第42回全日本大学選手権大会から監督主将会議は「監督会議」に変更、また、新たに男女とも「競技会ドーピング検査」を実施	150	95
43	'08 H20	会 長：一谷宣宏 理事長：末井健作	・一谷宣宏氏（園田学園女子大学学長）が第8代会長に就任 ・第8回世界男子ジュニア選手権大会（銅メダル） ・北京オリンピック優勝（学連OG：中京大学伊藤幸子、東京女子体育大学佐藤理恵）	146	97
44	'09 H21	〃	・白馬カップ大学女子ソフトボール大会開催 ・第8回ワールドゲームズ優勝（大学女子選抜、台湾） [選手登録の改正] 選手登録は25名から「30名」に増加 ただし、試合は「ベンチ入り選手は25名」 ・第4回男子選抜チーム、ニュージーランド遠征	146	98

年度		代表役員	記 事 (日本協会関係・ルール変更等を含む)	登録校	
				男	女
45	'10 H22	会 長：一谷宣宏 理事長：高橋伸次	・高橋伸次氏（高崎経済大学）が第5代理事長に、また日本協会の理事に就任 ・ソフトボール指導法の情報交換会開催。 ・「新学習指導要領対応・学校体育ソフトボール基本ルール」を日本協会が作成 [ルール] 試合球：イエローボール ・学連女子選抜チーム台湾遠征	152	99
46	'11 H23	〃	・3月11日、東日本大震災が発生 後援大会の東海オープン中止 過去のインカレ開催地である東松島市、女川市にそれぞれ50万円の義援金寄付 ・西日本大会（岐阜県）での募金活動等により309,935円の義援金を寄付 ・インカレ広報委員会：twitterによる試合速報や学連HPでのインカレ特設サイトの開設 ・パンパシフィックソフトボール大会（シンガポール）に東日本、西日本各大学選抜チームを派遣（東日本選抜が優勝） ・第5回男子選抜チーム、ニュージーランド遠征	145	107
47	'12 H24	〃	・公益財団法人日本ソフトボール協会発足 ・インカレプログラムが顔写真入りに ・インカレ女子の出場数が24から32に増加 ・学習指導要領の改訂に伴い中学校1・2年生の「学校体育」でソフトボールが必修化 ・第1回東アジアカップ日本代表(大学女子選抜)優勝 ・ロンドン五輪でソフトボール競技開催されず	138	107
48	'13 H25	〃	・第2回東アジアカップ（大学女子選抜全日本に惜敗） ・インカレの男女決勝戦を動画配信、またそのDVDを販売 ・広報記録部会が公式Facebookを開始 [ルール] 得点差コールドゲームの改正：「3回15点、4回10点、5回以降7点以上の差」また、「故意四球」の採用 ・第6回男子選抜チーム、ニュージーランド遠征	136	103
49	'14 H26	〃	・第3回東アジアカップ女子大学日本代表優勝 ・チューバーリーグ（沖縄）を後援 [ルール] 大会時での公認指導者資格証明書の携行 ・H27年3月、第5回アジア女子ジュニアソフトボール選手権大会（大学女子選抜、タイ）で優勝	133	101
50	'15 H27	〃	・インカレ予備日も雨天のために準決勝戦と決勝戦が実施できず中止、ベスト4の4チーム入賞で終了 [ルール] テンポラリーランナー制度を採用大学連盟 ・H28年2月13日創設50周年記念祝賀会を東京で開催 ・50周年記念誌を発行	133	100



主要なソフトボール国際大会

[男子]

回数	世界選手権	アジア選手権	世界ジュニア選手権
1	メキシコ (66年)	フィリピン (68年)	カナダ (81年)
2	アメリカ (68年)	フィリピン (74年)	アメリカ (85年)
3	フィリピン (72年)	日本 (85年)	カナダ (89年)
4	ニュージーランド (76年)	フィリピン (90年)	ニュージーランド (93年)
5	アメリカ (80年)	フィリピン (94年)	カナダ (97年)
6	アメリカ (84年)	フィリピン (98年)	オーストラリア (01年)
7	カナダ (88年)	フィリピン (03年)	カナダ (05年)
8	フィリピン (92年)	日本 (06年)	カナダ (08年)
9	アメリカ (96年)	日本 (12年)	アルゼンチン (12年)
10	南アフリカ (00年)		カナダ (14年)
11	ニュージーランド (04年)		アメリカ (16年)
12	カナダ (09年)		
13	ニュージーランド (13年)		
14	カナダ (15年)		
15	カナダ (17年)		

[女子]

回数	世界選手権	アジア選手権	世界ジュニア選手権
1	オーストラリア (65年)	フィリピン (67年)	カナダ (81年)
2	日本 (70年)	台湾 (69年)	アメリカ (85年)
3	アメリカ (74年)	フィリピン (74年)	アメリカ (87年)
4	エルサルバドル (78年)	日本 (87年)	オーストラリア (91年)
5	台湾 (82年)	インドネシア (91年)	アメリカ (95年)
6	ニュージーランド (86年)	フィリピン (95年)	台湾 (99年)
7	アメリカ (90年)	中国 (99年)	中国 (03年)
8	カナダ (94年)	フィリピン (04年)	オランダ (07年)
9	日本 (98年)	インドネシア (07年)	南アフリカ (11年)
10	カナダ (02年)	台湾 (11年)	カナダ (13年)
11	中国 (06年)		アメリカ (15年)
12	ベネズエラ (10年)		アメリカ (17年)
13	カナダ (12年)		
14	オランダ (14年)		
15	カナダ (16年)		

※大学の世界大会は、アメリカ (2004年)、台湾 (2006年) のみ。2010年のイタリア大会は中止となり、それ以降行われていない。

国際大会への大学生、大学生選抜の参加

(無印：日本ソフトボール協会主催、学連：全日本大学連盟主催)

年	男 子	女 子
68	第1回アジア選手権大会 (マニラ、国士舘大)	
72		女子大学ワールドシリーズ (オマハ)
74	第2回アジア選手権大会 (マニラ)	
76	第4回世界選手権大会 (ニュージーランド)	
78		第4回世界選手権大会 (不出場)
79	日ソ記念国際試合 (日本)	日ソ記念国際試合 (日本)
80	第5回世界選手権大会 (アメリカ)	ミニワールドシリーズ (オーストラリア) 日中対抗戦 (中国)
81	第1回世界ユース選手権大会 (カナダ)	第1回世界ユース選手権大会 (カナダ)
82		第5回世界選手権大会 (台湾、不出場)
84	第6回世界選手権大会 (アメリカ)	国際女子カップ大会 (アメリカ)
85	第3回アジア選手権大会 (静岡・草薙) 世界ジュニア選手権大会 (アメリカ)	世界ジュニア選手権大会 (アメリカ) ハーレムソフトボールウィークワールドゲームズ (アムステルダム、大学女子選抜)
86		第6回世界選手権大会 (ニュージーランド) ワヒナ招待ソフトボール大会 (ハワイ、大学女子選抜) 第2回セラングール国際チャンピオンシップ (クアラルンプール、大学女子選抜)
88		第4回アジア選手権大会 (高知県春野)
89	第3回世界ジュニア選手権大会 (カナダ)	
91		第4回世界ジュニア選手権大会 (オーストラリア)
92	第4回世界選手権大会 (フィリピン)	女子チャレンジカップ (中国) ブラジル親善試合 (学連：ブラジル)
93	第4回世界ジュニア選手権大会 (ニュージーランド)	
94		第8回世界選手権大会 (カナダ) ブラジル招待親善試合 (学連：日本)
95		アトランタオリンピック予選 (ニュージーランド) 第5回世界ジュニア選手権大会 (アメリカ) 第2回ブラジル親善試合 (学連：ブラジル)
96	全日本ニュージーランド遠征 (06) 第9回世界選手権大会 (アメリカ)	アトランタオリンピック (4位)
97	第5回世界ジュニア選手権大会 (カナダ)	

年	男 子	女 子
98	第1回ニュージーランド遠征（学連）	第9回世界選手権大会（富士宮）
99		第6回世界ジュニア選手権大会（台湾） 第7回アジア選手権大会（中国）
00		学連：オーストラリア遠征（ブリスベン） シドニーオリンピック（銀メダル）
01	第6回世界ジュニア選手権大会（オーストラリア）	
02	第2回ニュージーランド遠征（学連）	第10回世界選手権大会（カナダ）
03	第7回アジア選手権大会（フィリピン）	第8回アジア選手権大会（中止） 第7回世界ジュニア選手権大会（中国）
04	第11回世界選手権大会（ニュージーランド）	第3回アジアジュニア選手権大会（韓国） アテネオリンピック（銅メダル） 第1回世界大学選手権大会（アメリカ）
05	第1回パシフィックインターナショナル（ニュージーランド） 第7回世界ジュニア選手権大会（カナダ）	大学日本代表オーストラリア遠征（8月）
06	第3回ニュージーランド遠征（学連） パシフィック国際大会（仙台） 第8回アジア選手権大会（北九州）	日本代表オーストラリア遠征（シドニー） カナダカップ（女子B強化チーム） 第2回世界大学選手権大会（台湾）
07	ISF第1回ワールドカップ（チェコ） 第1回アメリカンチャレンジシリーズ パシフィック国際シリーズ	第8回世界ジュニア選手権大会（オランダ） カナダカップ（強化Bチーム） 第24回ユニバーシアード大会（タイ） 北京オリンピック（金メダル）
08	第8回世界ジュニア選手権大会（カナダ） 3カ国チャレンジ大会（カナダ）	
09	第9回ニュージーランド遠征（学連） 第12回世界選手権大会（カナダ）	第8回ワールドゲームズ in 高雄（台湾） 第4回アジアジュニア選手権大会（マレーシア）
10	第4回アジアジュニア選手権大会（インド）	第3回世界大学選手権大会（中止） 全日本学連女子台湾遠征（台北）
11	第2回男子ワールドカップ（チェコ）	第10回アジア選手権大会（台湾） 第9回世界ジュニア選手権大会（南アフリカ） アジアパシフィックソフトボール大会（シンガポール、東日本西日本各大学選抜が出場、東日本選抜が優勝）
12	第5回ニュージーランド遠征（学連） 第9回ジュニア選手権大会（アルゼンチン）	第13回世界選手権大会（カナダ） 第1回東アジアカップ（韓国、大学選抜優勝）
13		第2回東アジアカップ（岐阜県）
14	第6回ニュージーランド遠征（学連） 第10回世界ジュニア選手権大会（カナダ）	第3回東アジアカップ（中国）
15		第5回アジア女子ジュニア選手権大会（タイ） 第11回世界ジュニア選手権大会（アメリカ） 第4回東アジアカップ（台湾）

注）国際大会に参加した大学生の名前は、DVD資料の「国際大会への大学選手の参加」を参照のこと。また、大学生の参加者名は未確定ないしは不明の大会については、ここに記載していない。

大学ソフトボール界における研究成果と調査報告 ～全日本大学ソフトボール連盟機関誌「ウインドミル」を中心に～

(1)日本のソフトボール創生期に関する研究
①財団法人日本ソフトボール協会『協会30年史』(1980年)；

当時の東京高等師範学校に在職していた大谷武一教授が、嘉納治五郎学校長のもとで1917年にシカゴ大学へ留学し、1921年(大正10年)帰国したときにソフトボール(当時はプレイグラウンド・ボール)を持ち帰ったとされる。1926年(大正15年)の文部省・体操科教授要目にソフトボールが取り入れられてから、学生の間に急速に広がった。

②吉村 正「明治時代におけるソフトボール(ベースボール)の歴史的研究」(『早稲田大学体育研究紀要』第15号、1983年)；
明治期における第一高等学校での試合事情や高橋雄次郎氏の指導書などを検討した上

で、明治30年前後期には「野球」だけでなく「ソフトボール」に類似したものまで含めた競技が行われていたことを明らかにしている。この歴史的事情については、写真や図、文献を紹介しながらわかりやすく解説もしている。(『ソフトボール・マガジン』1992年2月号から8月号を参照)

※これらの研究からのまとめ；

ソフトボールが日本にもたらされる事情は、野球と同様に主に第一高等学校などの高等教育機関で様々な競技が積極的に試されていたことによっている。ただ、初期のソフトボールの普及過程においては、体操科教育体制のもとで東京高等師範学校の大谷教授による教育指導が大きな役割を果たし、貢献してきた。(中野 元)

(2)全日本大学ソフトボール連盟機関誌「ウインドミル」の研究調査報告一覧

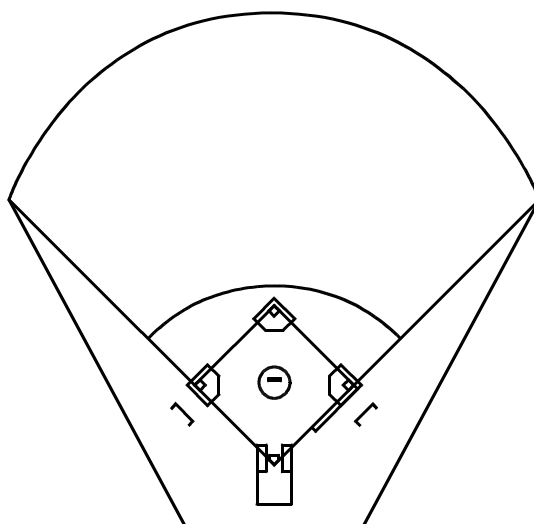
年度	研 究 ・ 調 査 報 告 な ど	筆 者
1997	創刊号	
1998 2号	[総説] 野球型スポーツに関する研究の動向 [提言] 大学院生の出場について 男子捕手の装備について [研究報告] - 一塁ベースへのヘッドスライディングはやり方しだいで効果的になる - プロ野球選手のバットスウィング速度と肩関節等速性筋力 - 打者はどのようなカウントから振っていけばよいか？ - ウインドミル投法の動作分析的研究 [卒業論文] - ソフトボールにおける打者の視覚情報についての研究	松永尚久(東海大学) 後藤静夫(相模女子大学) 後藤静夫(相模女子大学) 淵本隆文(大阪体育大学) 児玉公正(大谷女子大学)・中山悌一(阪神タイガース) 熊坂康典(日本体育大学) 山本英弘(朝日大学) 水田悦世(岡崎整形外科病院)
1999 3号	[研究報告] - 大学・短期大学のスポーツ指導を考える - パワーアップを考える [論説] コーチは如何にあるべきか	久保田豊司(大阪国際女子大学)・森田啓之(兵庫教育大学) 田路秀樹(姫路工業大学) 後藤静夫(相模女子大学)

1999 3号	[特別寄稿] ・ソフトボールのためのビジュアルトレーニング	石垣尚男（愛知工業大学）
2000 4号	[研究資料] ・スポーツ指導を考える ～増淵まり子選手へのインタビューを通して～ [特別寄稿] ・世界選手権準優勝に輝いて ・ソフトボールの「指導」について考える ～競技生活を終えて～ [提言] ・みんなの役に立つ実践研究を進めるために ～何を書けばヒントになりやすいか（試案）～ [問題提起] ・大学ソフトボール男子選手の試合姿勢 [事例報告] ・年間練習計画～神戸親和女子大学ソフトボール部～ [研究紹介] ・最近の研究報告から指導に役立つこと(1) ・ソフトボール投手の尺骨疲労骨折 ～投球時の直達外力との関連について～	久保田豊司（大阪国際女子大学）・ 森田啓之（兵庫教育大学） 宮平永義（沖縄県立中部工業高校） 岡本伊都子（豊田自動織機製作所） 森田啓之（兵庫教育大学） 紅林和博（愛知大学） 島田佳代子・ 但尾哲哉（神戸親和女子大学） 末井健作（姫路工業大学） 清水卓也（名古屋大学）・ 三浦隆行（中京大学）
2001 5号	[特別寄稿] ・ソフトボールへの思い ～大学のプレーヤー達に～ ・大学男子ソフトボールの先輩より後輩へ [研究紹介] ・夏期ソフトボール練習及び試合時の環境温度と水負債、体温上昇量及び運動量からみた生体負担度について [卒業論文] ・大学女子ソフトボールの直球打撃におけるボールとバットの衝突	三宅豊（日本ソフトボール協会技術委員長） 長澤宏行（東海学園大学） 朝山正己・森 悟 他（中京女子大学） 松本陽子・飯本雄二（中京女子大学）
2002 6号	[特別寄稿] 大切なもの [研究資料] ・鈴木由香選手へのインタビューから ・ソフトボール選手の体力特性について [提言] ・インカレの試合は1日1試合に [卒業論文] ・ソフトボールのルール改正による試合への影響	鈴木由香（日本体育大学） 森田啓之（兵庫教育大学） 久保田豊司（大阪国際大学）・ 末井健作（姫路工業大学） 水谷 博（中京女子大学） 中山美千代・團 琢磨（中京女子大学）

2003 7号	[研究紹介] ・全日本女子ソフトボール投手の投球腕の動作分析 ・レギュラーシーズンにおけるトレーニングが女子ソフトボール選手の筋力・筋パワー・敏捷性能力に及ぼす影響 [卒業論文] ・ソフトボールのウインドミル投球における個人分析～速度に及ぼす要因～	福島豊司（東京大学大学院） 中谷敏昭（天理大学） 宮崎謙尚・田路秀樹（姫路工業大学）
2004 8号	[対談報告] ・強い人間、たくましい選手になってほしい！！～宇津木妙子前全日本監督からのメッセージ～ [研究紹介] ・ソフトボールウインドミル投法における投球腕の動作分析 [卒業論文] ・女子ソフトボールに適した体力指標の開発	森田啓之（兵庫教育大学） 福島 豊司（東京大学大学院） 宮崎有紀子（姫路工業大学）・末井健作（兵庫県立大学）・板谷昭彦（園田学園女子大学）
2005	創立40周年記念号（9号）	
2006 10号	[研究紹介] ・ウインドミル投法における非利き腕のたたみ込み動作がボールスピードに及ぼす影響について	松下健二（兵庫教育大学）
2007 11号	[紹介] ・国際ルールとの比較 [研究紹介] ・大学女子ソフトボール選手のための体力評価基準の作成	後藤春日（東京都審判員） 東山智郁子・末井健作・吉田司（兵庫県立大学）／板谷昭彦・木田京子（園田学園女子大学）
2008 12号	[特集] ・ドーピングについて ・ドーピング検査に立ち会って	武藤幸政（城西大学） 田邊裕貴（学生委員長・中京大学）
2009 13号	[研究紹介] ・ソフトボールの投球動作（オーバースロー）における手の大きさが速度とコントロールに及ぼす影響について [卒業論文] ・大学男子ソフトボール競技における投手・打者に関する研究 ・大学男子ソフトボール選手におけるスイングスピードの男女差 ・大学女子ソフトボール投手の試合中におけるボールスピードと身体機能の変化に関する研究	木田京子（園田学園女子大学） 高橋速水・佐藤祐輔・豊永諒・石寄祥悟・藤田隼人・高橋流星・小川幸三（日本体育大学） 佐藤祐輔・高橋速水・高橋流星・利根川勇・小川幸三（日本体育大学） 朝田豊永・末井健作（兵庫県立大学）／久保田豊司（大阪国際大学）

2010 14号	[調査報告] ・高反発バットにまつわる事故等の実態調査 [研究レポート] ・バッティングにおける「体を開く『くせ』」を持ったプレイヤーへの指導 [研究資料] ・イエローボールへの変更による記録への影響について [研究報告] ・大学男女ソフトボール選手におけるバッティング中のスイングスピードおよびスタンス幅の関係性 [都学連活動紹介] ・大学男子ソフトボール選手における身体的および体力的特性	岩間英明（松本大学）・高橋伸次（高崎経済大学）・水谷博（至学館大学） 森田啓之（兵庫教育大学） 水谷 博（至学館大学） 伊藤皓二・片岡大洋・亀田亮治・畑末地郎・高橋流星・筒井崇護・利根川勇・小川幸三・船渡和男（日本体育大学） 石井新菜（専修大学）／高橋流星・山内亮・小川幸三（日本体育大学）／吉野みね子（東京女子体育大学）
2011 15号	[研究ノート] ・捕手の指導について [研究レポート] ・バッティングにおける「体を開く『くせ』」を持ったプレイヤーへの指導について	西村真由子・久保田豊司（大阪国際大学） 森田啓之（兵庫教育大学）
2012 16号	[研究報告] ・目標志向性が自己効力感に及ぼす影響 ～大学生ソフトボール選手を対象として華～ ・2012年度ルール改正に伴う投球成績の変化 [卒業論文] ・体育授業におけるソフトボールの扱い方について	池田かすみ・高橋流星・筒井崇護・利根川勇・本間悠也・楠本恭久（日本体育大学） 久保和正・高橋流星・利根川勇・筒井崇護（日本体育大学） 浅井麻美（神戸親和女子大学）
2013 17号	[実践研究] ・学校体育におけるソフトボールについて ～楽しいソフトボールの指導事例～ [卒業論文] ・ソフトボールの体育教材としての過大と可能性	岩間英明（松本大学）・二瓶雄樹（中京大学） 高野 響（松本大学）
2014 18号	[総説] ・アイシングの実際 [研究報告] ・学校体育におけるソフトボールについて 2 ～投運動の指導事例～	山下義則（日本ソフトボール協会） 岩間英明（松本大学）
2015 19号	[総説] ・アイシングの理論	山下義則（日本ソフトボール協会）

2015	[研究論文]	
19号	・我が国におけるソフトボールの文化的特性に関する一考察 ～スローピッチとファーストピッチの比較から～ [実践報告] ・アクティブ・ラーニングにおける「投げる動作の修得について ～反転授業の実践より～ [調査報告] ・頭部へのボール接触事故に関するアンケート調査報告 ～フェイスガードつきヘルメットの許可とその他安全に対する対応策の提言～	舟山健一（東北福祉大学） 但尾哲哉（神戸親和女子大学） 二瓶雄樹（中京大学）



インカレ大会成績一覧表 (男子の部)

回	開催日	開催地	優勝	準優勝	第3位
1	1966. 11. 03～05	東京都世田谷区	日本体育大学	高崎経済大学	早稲田大学 国土舘大学
2	1967. 07. 26～28	東京都世田谷区	日本体育大学	学習院大学	早稲田大学
3	1968. 08. 16～18	群馬県高崎市	日本体育大学	国土舘大学	学習院大学
4	1969. 07. 26～28	東京都世田谷区	国土舘大学	日本体育大学	早稲田大学
5	1970. 11. 13～15	大阪府吹田市	日本体育大学	中京大学	国土舘大学
6	1971. 08. 27～29	東京都世田谷区	日本体育大学	高崎経済大学	茨城大学
7	1972. 08. 17～19	愛知県豊橋市	日本体育大学	高崎経済大学	中京大学
8	1973. 08. 28～30	群馬県草津町	日本体育大学	都留文科大学	中京大学
9	1974. 08. 24～26	東京都世田谷区	日本体育大学	中京大学	学習院大学
10	1975. 08. 20～22	兵庫県姫路市	日本体育大学	中京大学	関西大学 福岡大学
11	1976. 08. 22～25	広島県呉市	中京大学	日本体育大学	国土舘大学
12	1977. 07. 26～28	三重県熊野市	日本体育大学	福岡大学	中京大学
13	1978. 08. 15～17	山梨県甲府市	中京大学	日本体育大学	関西大学
14	1979. 08. 20～23	群馬県安中市	琉球大学	東海大学	京都産業大学
15	1980. 08. 22～25	石川県金沢市	日本体育大学	京都産業大学	広島修道大学
16	1981. 08. 21～24	山口県宇部市	日本体育大学	東海大学	広島修道大学
17	1982. 08. 06～09	福岡県大牟田市	日本体育大学	国土舘大学	広島修道大学
18	1983. 08. 09～12	東京都昭島市	日本体育大学	中京大学	京都産業大学 東海大学
19	1984. 08. 10～13	静岡県浜松市	日本体育大学	国土舘大学	九州東海大学
20	1985. 08. 24～27	香川県坂出市	東海大学	福岡大学	大阪体育大学
21	1986. 08. 08～11	岐阜県下呂町他	日本体育大学	福岡大学	京都産業大学
22	1987. 08. 14～17	山口県宇部市	日本体育大学	国土舘大学	東海大学 愛媛大学
23	1988. 08. 19～22	福岡県大川市	日本体育大学	東海大学	立命館大学 福岡大学
24	1989. 08. 26～28	千葉県千葉市	日本体育大学	京都産業大学	福岡大学 国土舘大学
25	1990. 08. 17～20	石川県野市町	東海大学	中京大学	日本体育大学 福岡大学
26	1991. 08. 09～12	愛知県豊田市	日本体育大学	国土舘大学	早稲田大学 神戸学院大学
27	1992. 08. 07～10	香川県観音寺市他	中京大学	早稲田大学	愛知大学 九州東海大学
28	1993. 08. 06～09	山口県宇部市	京都産業大学	中京大学	東海大学 山梨学院大学

回	開催日	開催地	優勝	準優勝	第3位
29	1994. 08. 19～21	群馬県前橋市	沖縄国際大学	京都産業大学	神戸学院大学 龍谷大学
30	1995. 08. 11～13	福井県福井市	沖縄国際大学	京都産業大学	日本体育大学 国際武道大学
31	1996. 08. 08～11	山口県宇部市	立命館大学	同志社大学	中京大学 東海大学
32	1997. 08. 08～10	鹿児島県桜島町	日本体育大学	関西大学	早稲田大学 沖縄国際大学
33	1998. 08. 07～09	三重県伊勢市・二見町	日本体育大学	東海大学	立命館大学 沖縄国際大学
34	1999. 08. 08～10	宮城県矢本町	立命館大学	早稲田大学	日本体育大学 福岡大学
35	2000. 08. 05～07	香川県丸亀市	日本体育大	東海大学	福岡大学 関西大学
36	2001. 08. 09～11	茨城県下妻市	日本体育大学	国土舘大学	九州産業大学 神戸学院大学
37	2002. 08. 10～12	京都府宇治市	日本体育大学	立命館大学	早稲田大学 国土舘大学
38	2003. 08. 29～31	山口県宇部市	日本体育大学	早稲田大学	高崎経済大学 東海大学
39	2004. 08. 25～29	静岡県富士宮市	国土舘大学	日本体育大学	福岡大学 立命館大学
40	2005. 09. 03～05	群馬県安中市	早稲田大学	国際武道大学	国土舘大学 東海大学
41	2006. 08. 26～28	愛知県豊橋市	国土舘大学	中京学院大学	京都産業大学 神戸学院大学
42	2007. 08. 25～27	京都府舞鶴市	国土舘大学	日本体育大学	広島修道大学 中京学院大学
43	2008. 08. 29～01	宮城県東松島市	日本体育大学	国土舘大学	熊本学園大学 京都産業大学
44	2009. 08. 28～30	宮崎県宮崎市	日本体育大学	福岡大学	早稲田大学 同志社大学
45	2010. 09. 10～12	富山県富山市・婦中町	環太平洋大学	同志社大学	関西大学 中京大学
46	2011. 08. 27～29	山口県宇部市	中京学院大学	立命館大学	中京大学 神戸学院大学
47	2012. 09. 01～03	埼玉県坂戸市	早稲田大学	神戸学院大学	中京大学 九州共立大学
48	2013. 09. 07～09	大阪府大阪市	早稲田大学	同志社大学	日本体育大学 高知工科大学
49	2014. 08. 30～01	岩手県花巻市	早稲田大学	環太平洋大学	神戸学院大学 関西大学
50	2015. 08. 29～01	三重県伊勢市	立命館大学・日本体育大学・中京大学・福岡大学 (雨天のため最終日が実施できず、4校入賞)		

インカレ大会成績一覧表 (女子の部)

回	開催日	開催地	優勝	準優勝	第3位
1	1966. 11. 03～05	東京都世田谷区	日本体育大学	日本女子体育大学	東京女子体育大学
2	1967. 07. 26～28	東京都世田谷区	日本体育大学	東京女子体育大学	日本女子体育大学
3	1968. 08. 16～18	群馬県高崎市	東京女子体育大学	日本体育大学	
4	1969. 07. 26～28	東京都世田谷区	日本体育大学	東京女子体育大学	武庫川女子大学
5	1970. 11. 13～15	大阪府吹田市	日本体育大学	東京女子体育大学	武庫川女子大学
6	1971. 08. 27～29	東京都世田谷区	東京女子体育大学	日本体育大学	武庫川女子大学
7	1972. 08. 17～19	愛知県豊橋市	日本体育大学	大阪成蹊女子短大	東京女子体育大学 武庫川女子大学 日本女子体育大学
8	1973. 08. 28～30	群馬県草津町	東京女子体育大学	大阪成蹊女子短大	日本女子体育大学 日本体育大学
9	1974. 08. 24～26	東京都世田谷区	東京女子体育大学	日本体育大学	日本女子体育大学
10	1975. 08. 20～22	兵庫県姫路市	東京女子体育大学	日本体育大学	大阪成蹊女子短大
11	1976. 08. 22～25	広島県呉市	日本体育大学	東京女子体育大学	中京大学
12	1977. 07. 26～28	三重県熊野市	日本体育大学	東京女子体育大学	中京大学
13	1978. 08. 15～17	山梨県甲府市	日本体育大学	東京女子体育大学	大阪成蹊女子短大
14	1979. 08. 20～23	群馬県安中市	日本体育大学	東京女子体育大学	大阪体育大学
15	1980. 08. 22～25	石川県金沢市	日本体育大学	大阪成蹊女子短大	中京大学
16	1981. 08. 21～24	山口県宇部市	日本体育大学	大阪成蹊女子短大	中京大学
17	1982. 08. 06～09	福岡県大牟田市	中京女子大学	日本女子体育大学	東京女子体育大学
18	1983. 08. 09～12	東京都昭島市	園田学園女子大学	東京女子体育大学	大阪成蹊女子短大 日本女子体育大学
19	1984. 08. 10～13	静岡県浜松市	大阪成蹊女子短大	大阪体育大学	武庫川女子大学
20	1985. 08. 24～27	香川県坂出市	日本体育大学	東京女子体育大学	園田学園女子大学
21	1986. 08. 08～11	岐阜県下呂町・小坂町	東京女子体育大学	武庫川女子大学	日本体育大学
22	1987. 08. 14～17	山口県宇部市	日本体育大学	園田学園女子大学	東京女子体育大学 日本女子体育大学
23	1988. 08. 19～22	福岡県大川市	園田学園女子大学	日本体育大学	日本女子体育大学 東京女子体育大学
24	1989. 08. 26～28	千葉県千葉市	園田学園女子大学	日本女子体育大学	中京女子大学 東京女子体育大学
25	1990. 08. 17～20	石川県金沢市	日本体育大学	東京女子体育大学	大阪成蹊女子短大 日本女子体育大学
26	1991. 08. 09～12	愛知県豊田市	東京女子体育大学	日本体育大学	日本女子体育大学 中京大学
27	1992. 08. 07～10	香川県観音寺市、他	日本体育大学	東京女子体育大学	中京大学 園田学園女子大学
28	1993. 08. 06～09	山口県宇部市	東京女子体育大学	日本体育大学	九州女子大学 中京大学

回	開催日	開催地	優勝	準優勝	第3位
29	1994. 08. 19～21	神奈川県相模原市	日本体育大学	東京女子体育大学	園田学園女子大学 仙台大学
30	1995. 08. 11～13	広島県御調町	東京女子体育大学	日本体育大学	園田学園女子大学 中京大学
31	1996. 08. 08～11	山口県宇部市	日本女子体育大学	日本体育大学	東京女子体育大学 中京大学
32	1997. 08. 08～10	鹿児島県桜島町	日本体育大学	東京女子体育大学	九州女子大学 関西外国語大学
33	1998. 08. 07～09	三重県磯部町	東京女子体育大学	日本体育大学	淑徳大学 園田学園女子大学
34	1999. 08. 08～10	宮城県女川町	東京女子体育大学	日本女子体育大学	中京大学 武庫川女子大学
35	2000. 08. 05～07	香川県丸亀市	東京女子体育大学	園田学園女子大学	日本体育大学 神戸親和女子大学
36	2001. 08. 09～11	茨城県古河市	東京女子体育大学	東海女子大学	大谷女子大学 園田学園女子大学
37	2002. 08. 10～12	京都府宇治市	東京女子体育大学	東海学園大学	園田学園女子大学 龍谷大学
38	2003. 08. 29～31	山口県宇部市	淑徳大学	東京女子体育大学	日本体育大学 大阪国際大学
39	2004. 08. 26～29	静岡県富士宮市	大谷女子大学 日本体育大学	(決勝戦は雨天中止) (両チーム優勝)	愛媛女子短期大学 東海女子大学
40	2005. 09. 03～05	群馬県安中市	東北福祉大学	田学園女子大学	中京大学 清和大学
41	2006. 08. 26～28	愛知県豊橋市	早稲田大学	日本体育大学	福岡大学 淑徳大学
42	2007. 08. 25～27	京都府福知山市	園田学園女子大学	大阪国際大学	東北福祉大学 大阪大谷大学
43	2008. 08. 29～01	宮城県女川町	東北福祉大学	大阪国際大学	日本女子体育大学 東京女子体育大学
44	2009. 08. 28～30	宮崎県宮崎市	東北福祉大学	日本体育大学	立命館大学 園田学園女子大学
45	2010. 09. 10～12	富山県富山市	東京女子体育大学	武庫川女子大学	東北福祉大学 鈴鹿国際大学
46	2011. 08. 27～29	山口県下関市	園田学園女子大学	鈴鹿国際大学	日本体育大学 早稲田大学
47	2012. 09. 01～03	埼玉県毛呂山町	園田学園女子大学	東京女子体育大学	日本体育大学 東海学園大学
48	2013. 09. 07～10	大阪府交野市	中京大学	園田学園女子大学	大阪国際大学 環太平洋大学
49	2014. 08. 30～01	岩手県花巻市	東京国際大学	日本体育大学	東京富士大学 園田学園女子大学
50	2015. 08. 29～01	三重県伊勢市	中京大学・東海学園大学・東京富士大学・日本体育大学 (雨天のため最終日が実施できず、4校入賞)		

インカレ（男子）大会入賞校・入賞回数

大学名	優勝	2位	3位	入賞
日本体育大学	28	5	4	1
国士舘大学	4	7	6	
早稲田大学	4	3	7	
中京大学	3	6	7	1
東海大学	2	5	6	
立命館大学	2	2	3	1
沖縄国際大学	2		2	
京都産業大学	1	4	5	
中京学院大学	1	1	1	
環太平洋大学	1	1		
琉球大学	1			
福岡大学		4	7	1
高崎経済大学		3	1	
同志社大学		3	1	
学習院大学		1	2	
神戸学院大学		1	6	

大学名	優勝	2位	3位	入賞
関西大学		1	5	
国際武道大学		1	1	
都留文科大学		1		
広島修道大学				4
九州東海大学				2
茨城大学				1
愛媛大学				1
愛知大学				1
大阪体育大学				1
山梨学院大学				1
龍谷大学				1
九州産業大学				1
熊本学園大学				1
九州共立大学				1
高知工科大学				1

※50回連続出場校：日本体育大学・早稲田大学・国士舘大学

インカレ（女子）大会入賞校・入賞回数

大学名	優勝	2位	3位	入賞
日本体育大学	18	13	6	1
東京女子体育大学	15	15	8	
園田学園女子大学	6	4	9	
東北福祉大学	3		2	
日本女子体育大学	1	5	8	
大阪成蹊女子短大	1	4	5	
中京大学	1		11	1
淑徳大学	1		2	
大阪大谷大学	1		2	
中京女子大学	1		1	
早稲田大学	1		1	
東京国際大学	1			
武庫川女子大学		2	6	
大阪国際大学		2	2	
大阪体育大学		1	1	

大学名	優勝	2位	3位	入賞
東海女子大学		1	1	
東海学園大学		1	1	1
鈴鹿国際大学		1	1	
九州女子大学				2
仙台大学				2
東京富士大学				1
関西外国語大学				1
神戸親和女子大学				1
龍谷大学				1
愛媛女子短期大学				1
龍谷大学				1
清和大学				1
福岡大学				1
立命館大学				1
環太平洋大学				1

※旧校名分を含む ※第39回の優勝は2校 ※第50回は入賞4校 ※50回連続出場校：日本体育大学・東京女子体育大学

全日本大学ソフトボール連盟規約

第 1 章 名 称

第1条 本連盟は、全日本大学ソフトボール連盟と称する。

第 2 章 目 的 と 事 業

第2条 本連盟は、日本ソフトボール協会に加盟し、わが国の大学ソフトボール団体を統括する機関として、学生スポーツの精神を遵守し、大学ソフトボールの普及と発展を図ることを目的とする。

第3条 本連盟は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 競技会（国内・国際）の開催
1. ソフトボールに関する研究・調査の推進
1. ソフトボールに関する講演会・講習会等の開催
1. その他、本連盟の目的達成のために必要な事項

第 3 章 役 員

第4条 本連盟に次の役員を置く。

- | | | |
|--------------|---------------|----------------|
| 1. 会 長 1 名 | 1. 副 会 長 若干名 | 1. 顧 問 若干名 |
| 1. 監 事 2 名 | 1. 理 事 長 1 名 | 1. 副理事長 2 名 |
| 1. 常任理事 若干名 | 1. 理 事 33名以内 | 1. 評 議 員 60名以内 |
| 1. 学生委員長 1 名 | 1. 学生副委員長 2 名 | 1. 学生委員 30名以内 |

第5条 会長は、評議員会において推薦し、総合役員会の承認を経て選任する。

2 会長は、本連盟に関する一切の事案について統括し、本連盟を代表する。

第6条 副会長は、評議員会において推薦し、総合役員会の承認を経て選任する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

第7条 顧問は、評議員会において推薦し、総合役員会の承認を経て選任する。

2 顧問は、本連盟の運営に関して、必要に応じて助言を行い相談に応じる。

第8条 監事は、評議員会において推薦し、総合役員会の承認を経て選任する。

2 監事は、本連盟の財務を監査する。

第9条 理事長は、理事の互選により選任する。

2 理事長は、会長の指示を受け会務を総理する。

第10条 副理事長は、理事長がこれを指名し、理事会の承認を経て選任する。

2 副理事長は、理事長を補佐し、理事長事故あるときは、その職務を代行する。

第11条 常任理事は、理事の互選により選任する。

2 常任理事は、本連盟の常務を執行する。

第12条 理事は、評議員の互選により選任する。

2 会長は、評議員並びに学識経験者の中から、理事3名以内を推薦することができる。

3 理事長の選出地区においては、理事1名を加えることができる。

4 理事は、理事会を構成し、第21条に規定する任にあたる。

第13条 評議員は、本連盟加盟校の専任教職員であることを基礎資格とし、部長（顧問・同好会長）又は監督の中から選任する。

2 評議員は、各大学1名以内とする。ただし、同一大学で男子と女子の登録がある場合には、2大学とみなすことができる。

3 評議員は、評議員会を構成し、第20条に規定する任にあたる。

第14条 学生委員長は、学生委員の互選により選任する。

2 学生委員長は、理事長の指示を受け、本連盟の運営を援助する。

第15条 学生副委員長は、学生委員長がこれを指名し、学生委員会の承認を経て選任する。

2 学生副委員長は、学生委員長を補佐し、学生委員長事故あるときは、その職務を代行する。

第16条 学生委員は、本連盟加盟大学の学生の中から選任する。

- 2 学生委員は、各大学1名以内とする。ただし、同一大学で男子と女子の登録がある場合には、2大学とみなすことができる。
- 3 学生委員は、学生委員会を構成し、第22条に規定する任にあたる。
- 4 学生委員会は所属する当該地区より、1名の常任学生委員を選出し、第22条2項に規定する常務を執行する。

第17条 本連盟役員の任期は3年とし、再選を妨げない。ただし、学生委員の任期は1年とする。

- 2 役員に欠員が生じた場合には、所定の手続きを経てこれを補充しなければならない。

第 4 章 会 議

第18条 本連盟に次の会議を置く。

1. 総合役員会
1. 評議員会
1. 理事会・常任理事会
1. 学生委員会・学生常任委員会

第19条 総合役員会は、本連盟の最高決議機関であり、第4条に規定する総ての役員で構成し、会長これを招集する。

- 2 総合役員会は、毎年1回定期に開催し、必要あるときは、臨時総合役員会を開催することができる。

第20条 評議員会は、会長これを招集し、評議員の互選により議長を選出し、次のことを行う。

1. 会長・副会長・顧問・監事の推薦
1. 総合役員会に対する理事会の提案事項の審議
1. 総合役員会から委任された事項の審議

第21条 理事会は、本連盟の執行機関とし、理事長これを招集する。

- 2 理事会は、本連盟の会務を処理し、運営の責にあたる。
- 3 理事会には、運営の円滑化を図るために、常任理事会を置く。

第22条 学生委員会は、本連盟の執行支援機関とし、学生委員長これを招集する。

- 2 学生委員会は、本連盟の会務の処理及び運営の援助にあたる。

- 3 学生委員会のもとに、常任学生委員会をおくことができる。

第23条 本連盟の会議に欠席した役員は、白紙委任状を提出したものとみなす。ただし当該議事につき書面をもってあらかじめ意思を表した者は出席者とみなす。

第24条 本連盟の各会議の議事は、出席者の過半数をもって決定される。ただし、可否同数の場合には、議長の裁決によるものとする。なお、本連盟規約の改正については別に定める。

第 5 章 登 録

第25条 本連盟の加盟大学は、各年度の定められた期日までに登録しなければならない。なお、本連盟に加盟するためには、各都道府県ソフトボール協会を経由して、日本ソフトボール協会に登録しなければならない。

第26条 登録は、チーム登録と選手登録とする。未登録の場合は、本連盟が主催または共催・後援する競技大会等に参加することはできない。

第27条 チーム登録は、同一大学1チーム（男・女別）とする。ただし、同一大学であってもキャンパスの所在地が異なる場合は、キャンパス単位でチーム登録することができる。

第28条 選手登録は、入学時から卒業時または修了時までとする。ただし、登録できるのは学校教育法第54条2に定める通信の学生、同法第56条に定める学生、同法第57条に定める専攻科と別科の学生並びに同法第67条に定める大学院の学生とする。

第 6 章 会 計

第29条 本連盟の経費は、次の収入をもってこれに当てる。

1. チーム登録料
1. 個人登録料
1. 寄 附 金
1. そ の 他

- 第30条 本連盟の加盟大学は、チーム登録料及び個人登録料を納入しなければならない。
- 第31条 寄附金及びその他の収入は、本連盟の目的に則って受けることができる。
- 第32条 本連盟の資産は、会長が管理する。
- 第33条 毎会計年度の予算は、前年度末に予算書を作成し、総合役員会の議決を経なければならない。
- 2 毎会計年度の決算は、年度終了後2ヵ月以内に決算書を作成し、監査を経た上で、総合役員会の議決を経なければならない。
- 第34条 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第 7 章 事 務 局

- 第35条 本連盟には、本部事務局及び地区事務局を置く。
- 第36条 本部事務局は、理事長の所属大学に置く。
- 第37条 2 本部事務局は、非常勤職員（有給）を置くことができる。
地区事務局は、本連盟が分割する各地区に置く。
- 2 本連盟が分割する地区は、次の9地区とする。
- | | | | |
|-----------|-------------|-----------------|---------|
| 〔東日本ブロック〕 | 1. 北海道・東北地区 | 1. 関東（東京都を除く）地区 | |
| | 1. 北信越地区 | 1. 東京都地区 | |
| 〔西日本ブロック〕 | 1. 東海地区 | 1. 近畿地区 | 1. 中国地区 |
| | 1. 四国地区 | 1. 九州地区 | |

第 8 章 表彰及び資格の喪失

- 第38条 本連盟及び大学ソフトボールの発展に著しい功勞のあった団体または個人は、理事会の議決を経て表彰することができる。
- 2 本連盟の規約及び決定に従わない加盟大学のチームまたは個人は、総合役員会の議決を経て試合出場停止、または除名の処分をすることができる。

第 9 章 規 約 の 改 正

- 第39条 本連盟の規約の改正については、総合役員会において出席者の3分の2以上の賛成をもって決定されるものとする。

第 10 章 雑 則

- 第40条 本連盟規約の施行についての細則は、理事会の議決を経て定め、総合役員会で承認を経なければならない。

この規約は、昭和41年11月1日から施行する。

この規約は、昭和51年4月1日から一部改正施行する。

この規約は、昭和55年4月1日から一部改正施行する。

この規約は、昭和57年4月1日から一部改正施行する。

この規約は、昭和62年4月1日から一部改正施行する。

この規約は、平成2年4月1日から改正施行する。

この規約は、平成3年4月1日から一部改正施行する。

この規約は、平成11年3月7日から一部改正施行する。

この規約は、平成14年3月19日から一部改正施行する。

編集後記

1966年1月、大学ソフトボール競技を統括し運営する団体として「全日本大学ソフトボール連盟」が創設されました。「創立25周年記念」記録要覧（1994年）の中で、初代理事長（下奥信也・日本体育大学）は当時を振り返って、次のように言います。ソフトボール競技を行う大学チームが少ない中で、教員と学生がお互いに協力し合ってようやく東京・駒沢で大会を開くことができた、と。まさに苦難の草創期を乗り越えて、50年の月日が経ちました。

2015年現在、大学連盟は、チーム登録数233（男子133、女子100）、選手数5,042人（男子2,808人、女子2,234人）を有する規模に達しています。その事業は、主催大会（地区大会から全日本インカレまで）、各地区の後援大会、国際交流大会など広範囲に及んでいます。さらに、各地の少年ソフトボール研修や地域スポーツ研修活動、独自の研究調査活動へ広がっています。

これまでの50年の歴史を振り返るたびに、様々な人たちのひたむきな努力と相互の協力があつたことが垣間見られます。ただ、これからの未来を見据えると、まだまだ改良すべき課題も多々あるようです。望むべくは、20歳前後の若者たちによりいっそう魅力あふれる競技としてソフトボールを実感してもらうことです。その中で、若者たちがお互いの人生をより充実し豊かなものにしていくのであれば、いうことはありません。そのためには、全日本インカレをはじめ各種大会の運営面など、さらに新しい工夫や試みが必要なのかもしれません。今後に向けて、この記念誌が大いに活用されることを願います。

最後に、今回のとりまとめに当たって、多くの方々にご協力をいただきました。大学連盟の先生方や選手、OB、OGの皆様をはじめとして、執筆に協力いただきました関係者の方々に、心より御礼申し上げます。また、平素よりご支援をいただいている（公財）日本ソフトボール協会には日々忙しい業務の中で快く資料を提供していただきました。日本体育大学の図書館でも、資料検索・収集などでたいへんお世話になりました。さらにベースボール・マガジン社のソフトボール・マガジン編集部、日本体育社の皆様にも快くご協力いただきました。まだまだ言い尽くせないご協力いただきました方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

（大学連盟創立50周年記念誌編集責任者 中野 元）

未来に向かって 大学ソフトボール50年の歩み

全日本大学ソフトボール連盟機関誌ウインドミル創立50周年記念号

■編集

第1・3章：森田啓之

第2章：中野 元

第4章：水谷 博

■資料収集：高橋伸次・中野 元

■構成レイアウト：水谷 博

■表紙デザイン：川北卓史

2016年2月13日発行

発行者 全日本大学ソフトボール連盟会長 一谷 宣宏

編集責任者 全日本大学ソフトボール連盟副会長 中野 元

発行所 全日本大学ソフトボール連盟

〒370-0801 高崎市上並榎町1300 高崎経済大学

印刷 有限会社 井坂印刷

〒331-0077 埼玉県さいたま市西区中釘2071-5

I S S N 1 3 4 3 - 4 3 9 X



明日は、きっと、できる。

ヘッドだけじゃない。
**両端が効く
新構造。**

バット本体の肉厚設計を見直し、
バットの両端にウェイトを配分。
"振りやすさ"と"ヘッドの効き"を両立させた新構造。
デュアルウェイトテクノロジー。



エックス〈反発規制対応モデル〉[3号革・ゴムボール用] 本体価格¥39,000+税

●カーボン+グラス ●φ57mm ●中国製

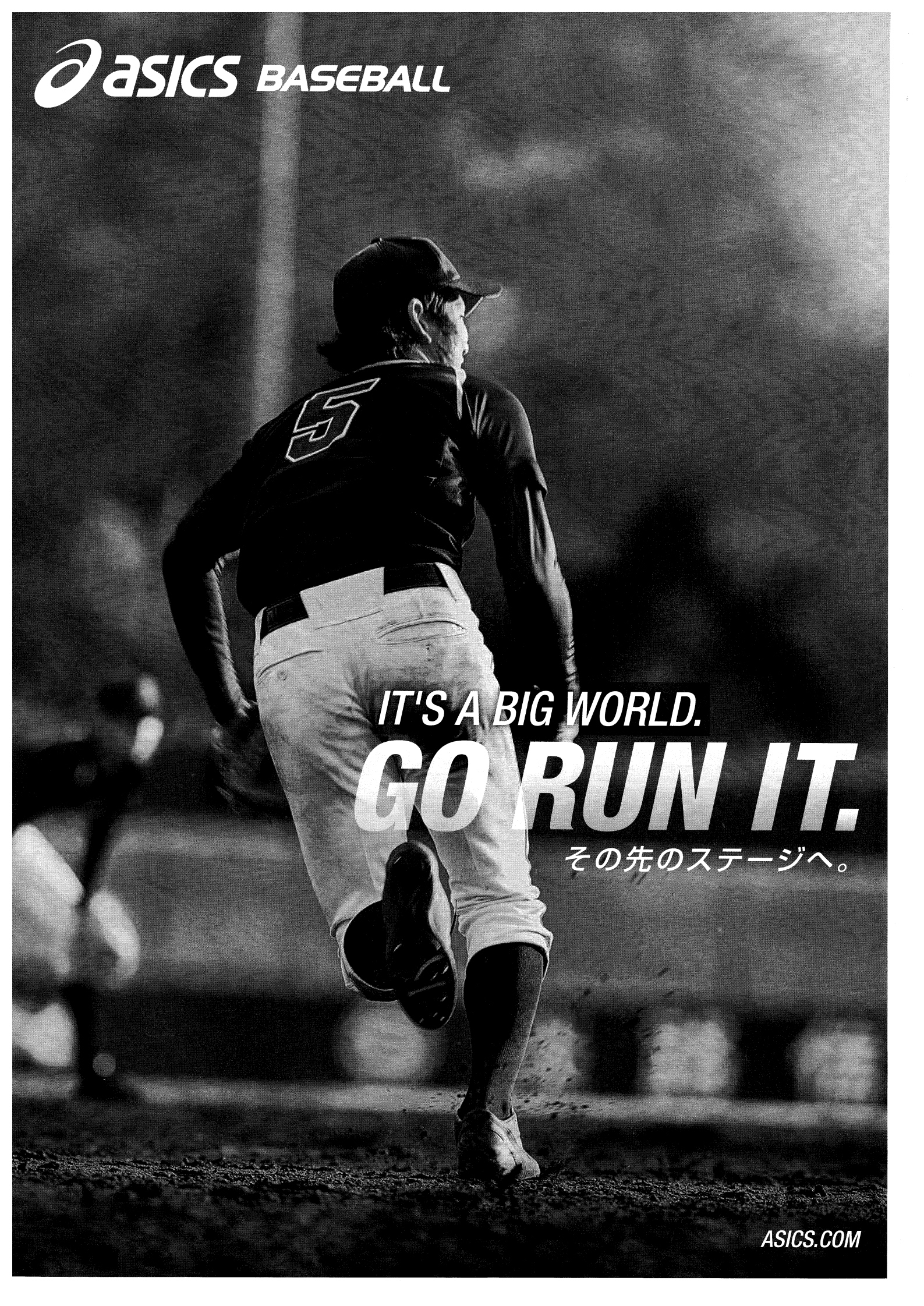


1CJFS10183 (83cm・平均680g) ●ミドルバランス ●ブラック×ライトグレー (0905)
1CJFS10184 (84cm・平均690g) ●ハーフトップバランス ●ブラック×ライトグレー (0905)
1CJFS10185 (85cm・平均700g) ●ハーフトップバランス ●ブラック×ライトグレー (0905)



1CJFS10284 (84cm・平均720g) ●ハーフトップバランス ●ブラック×レッド (0962)
1CJFS10285 (85cm・平均730g) ●ハーフトップバランス ●ブラック×レッド (0962)
1CJFS10286 (86cm・平均740g) ●トップバランス ●ブラック×レッド (0962)

記載価格は、消費税抜きのメーカー希望小売価格です。 mizuno.jp ☎ 0120-320-799



asics BASEBALL

IT'S A BIG WORLD.
GO RUN IT.

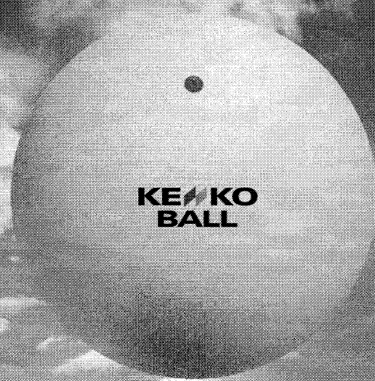
その先のステージへ。

ASICS.COM

感動！ サプライヤー ケンコーボール



(公財)全日本軟式野球連盟公認球
ケンコーボール



(公財)日本ソフトテニス連盟公認球
ケンコーソフトテニスボール



(公財)日本ソフトボール協会検定球
ケンコーソフトボール

一九三四年創業以来七〇年以上にわたり 一心にボールを作り続けてまいりました
これからもスポーツライフに相応しい自信作をお届けしていきます

「ボールのロゴマークカラーはイメージ
実際の商品とは異なります」

KENKO BALL

ケンコーボール

ナガセケンコー株式会社 www.nagase-kenko.com

[東京本社] TEL(03)3614-3501(代) [大阪営業所] TEL(06)6531-0783(代) [九州営業所] TEL(092)471-5381(代) [名古屋営業所] TEL(052)734-8886

想いを込める一球がある。



NAIGAI SOFTBALL

(財)日本ソフトボール協会検定球 検定1号・2号・3号・皮製3号・14インチ



NAIGAI BASEBALL

(財)全日本軟式野球連盟公認球 A号・B号・C号・D号・H号

内外ゴム株式会社

ソフトボールと環境

ソフトボールを愛する私たちも皆、宇宙船地球号の搭乗員

ソフトボールをするためには、「きれいな空気」、「試合や練習の後に飲むおいしい水」、「プレイする汚染されていないグラウンド」が必要です。また、人間として社会生活をしている者はスポーツマンを含め、皆で環境を考えて空気や水や土を大切にし、環境保全を実行する義務があります。大きな問題も小さな課題解決から、ゴミを出さないなどちょっとしたことから始めましょう。

フェアプレイ宣言（日本体育協会）

私は、スポーツを愛する者として、何事にも全力で取り組み、精神・肉体ともに成長させることに努めます。そして、フェアプレイを通じて思いやり、誇り、努力、勇気を最大限に発揮し、その力を人に、地域に、社会のために生かしていきます。

マナーについて（日本ソフトボール協会）

マナーは、自分もしくは自チームに対して求めるもので、他者や相手チームを不快な気分にはさせないよう気遣うことであり、自分もしくは自チームの正当性を主張するものではありません。

